

令和3年度 アントレプレナーシップ人材の裾野拡大に向けた プラットフォーム形成に係る調査分析報告書

文部科学省 科学技術・学術政策局
産業連携・地域振興課
(調査委託先：有限責任監査法人トーマツ)



文部科学省

目次

【はじめに】 本事業の概要・実施方法	3
0.1 本調査の背景・目的・内容	4
0.2 本報告書の構成	7
【第1章】 アントレプレナーシップ人材の裾野拡大に向けたプラットフォーム形成の在り方	8
1.1 検討論点と調査概要	9
1.2 (A) 受講機会の創出に関する検討	26
1.3 (B) 教職員間の連携に関する検討	44
1.4 (C) プログラムの開発に関する検討	52
1.5 (D) プログラムの運営に関する検討	65
1.6 (E) プログラムの評価に関する検討	77
【第2章】 エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大：インキュベーション施設の活用方法調査	90
2.1 大学インキュベーション施設調査	95
2.2 国内民間企業等インキュベーション施設調査	150
2.3 海外都市調査	169
2.4 国内外都市比較	226
2.5 目指すべき姿	234
【第3章】 エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大：民間企業等が実施するアントレ教育プログラム調査	244
3.1 民間企業等と連携したアントレ教育（海外）	248
3.2 民間企業等と連携したアントレ教育（国内）	305
3.3 民間企業等が実施するアントレ教育プログラム調査まとめ	372
【APPENDIX】	378
① プログラム実施概要	379
② 有識者委員会の概要	398
③ 教職員座談会の概要	416
④ 学生座談会の概要	424
⑤ 学生向けアンケート実施概要	432
⑥ 教職員向けアンケート実施概要	475

【はじめに】
本事業の概要・実施方法

本調査の背景及び調査テーマ

- ✓ 本調査は、アントレプレナーシップ醸成の裾野を我が国全体に拡大する為に、大学と施設や企業との連携、全国プラットフォーム構築に関して検討を行った

本調査の背景及び調査テーマ

背景

- 新型コロナウイルス感染症による社会環境の変化の中で、アントレプレナーシップを我が国全体で醸成していくことが重要であり、人材の育成及びその環境整備が必要になっている
- スタートアップエコシステム支援パッケージとして、アントレプレナーシップ教育が一つの柱として強力に推進していくことになっており、国としてアントレプレナーシップ教育をより一層推進・強化していかなければならない状況である
- EDGE-NEXT実施機関やスタートアップエコシステム拠点都市参画機関が中心となってアントレプレナーシップ教育をリードすることに加え、他の全国の大学等と連携し、自律的・効果的に取組を続け、最終的には**全国の大学等において希望する学生がアントレプレナーシップ教育を受講できる環境の実現**が求められている
- 大学間のアントレプレナーシップ教育に係るネットワーク機能等を備えた全国プラットフォームの形成や全国プラットフォームの持続的・自律的運用に向けた検討を進め、**情報発信や事例・ノウハウの共有によってアントレプレナーシップ醸成の裾野を我が国全体に拡大**していくことが求められている

本調査 テーマ

1 全国プラットフォーム構築による裾野拡大

全国プログラム試行から実証的に検証

- アントレプレナーシップ教育の受講機会の拡大に向け、特にアントレプレナーシップ教育にアクセスできていない学生を含む**全国規模プログラム受講機会の提供**について
- 大学間のアントレプレナーシップ教育に係る**ネットワーク機能等を備えた全国プラットフォームの形成とこの持続的・自律的運用**について
- 全国の学生に対して**アントレプレナーシップ教育の認知度を高める広報**について

2 エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大

- インキュベーション施設や民間企業・各種財団等との連携により**外部が行うアントレプレナーシップ教育の活用による受講者の裾野拡大**について
- アントレプレナーシップ醸成に係る**ネットワークの構築**について

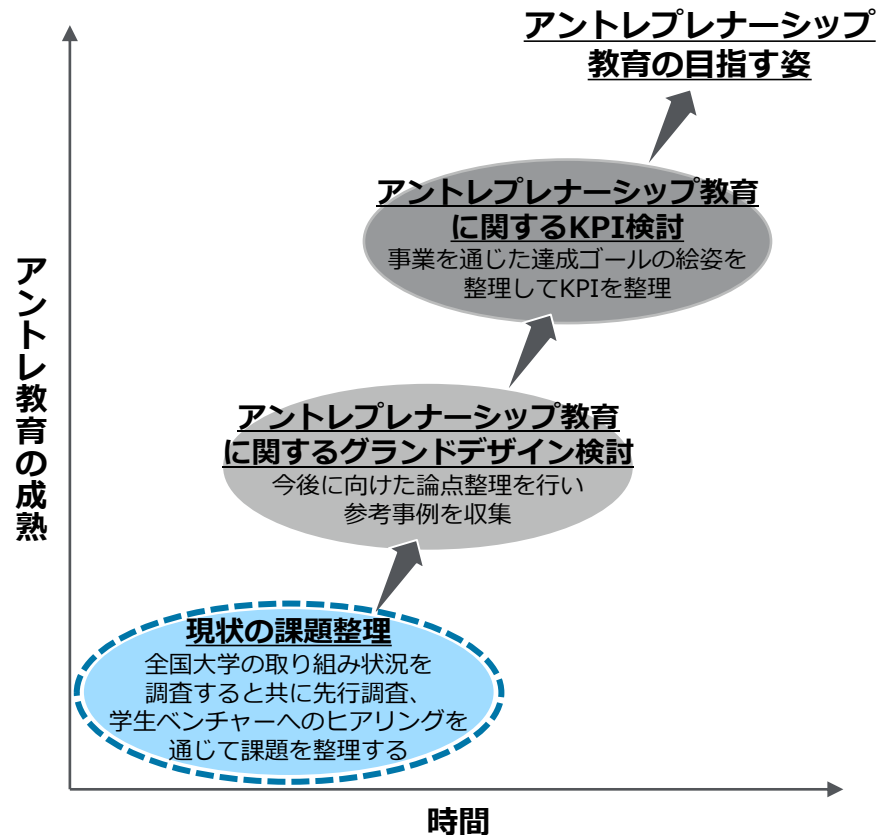
本年度調査の目的

- ✓ 昨年度調査業の検討内容を踏まえ、本年度はアントレプレナーシップ教育の推進に向け、更なる調査を実施した

本年度の調査目的

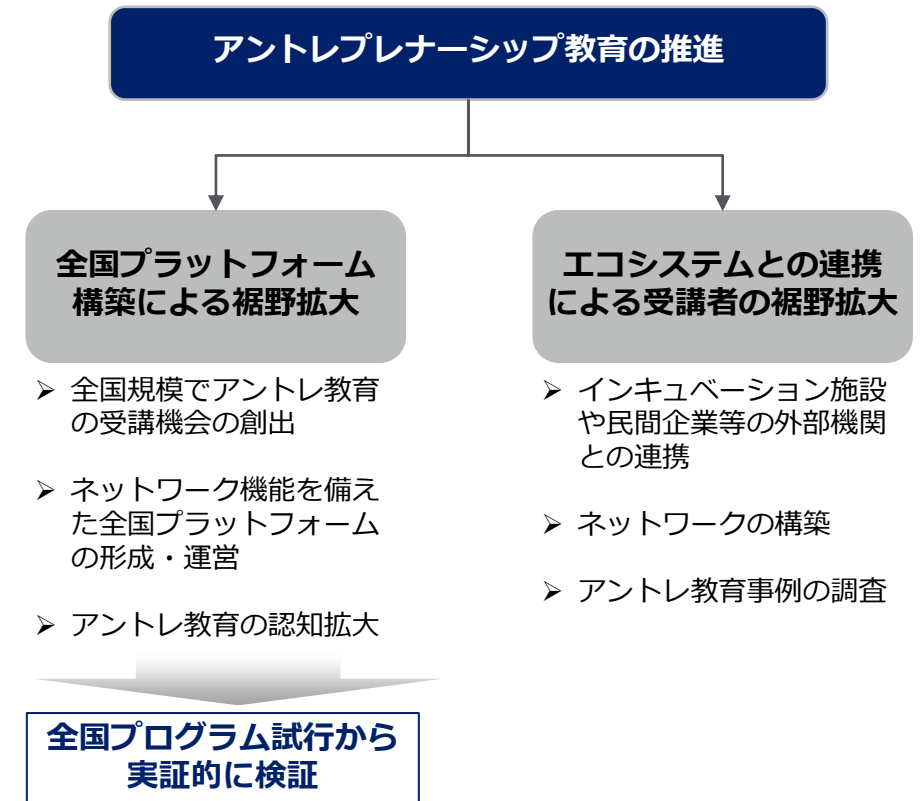
昨年度の事業目的

- 昨年度はアントレ教育の目指す姿と現状を整理し、今後の施策を検討することを目的とした



本年度の調査目的

- 今年度はアントレ教育の推進に向け、エコシステムとの連携や全国プラットフォーム構築について検証をした



調査テーマを踏まえた調査項目

✓ エコシステムに関する論点と全国プログラムの試行を踏まえたプラットフォーム構築に関する論点に整理し、調査を実施した

調査・分析テーマを踏まえた項目

調査・分析テーマ		具体的実施事項	
1 全国プラットフォーム構築による裾野拡大	アントレ教育の受講機会拡大に関する調査・分析	全国規模プログラムの設計と試行	有識者と綿密連携した1,000名以上が実施可能なプログラム設計 全国の学生等を対象としたプログラムの試行的実施 プログラム実施時の課題抽出・最適実施方法に関する検討
		教育効果の評価方法検討	個々の受講者に対する教育効果の測定に関する検討 プログラムの設計・運営に関する評価に関する検討
		プラットフォーム機能・運用	参加者の属性、教育ステージ備えるべき機能、持続的運用検討 教職員間の意見交換・情報提供の場を設け、運用を検討
		アントレ醸成を加速させる広報方策の調査・分析	受講者確保のための広報活動実施（SNS等） プログラムの受講者確保に向けた広報、課題整理検討 情報発信、受講者募集ホームページ運営・運用の方策検討
2 エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大	アントレ教育に関する調査・分析	インキュベーション施設の活用方法調査	国内外の大学が運用するインキュベーション施設を対象としてアントレ醸成に資するインキュベーション施設の活用に関して調査 インキュベーション施設の機能・運用方法のアンケート等による詳細調査
		民間企業等が実施するアントレ教育プログラム調査	大学と民間企業等が連携したアントレ教育プログラムに関する調査 民間企業等に対する大学アントレ教育への期待・課題に関する調査

本調査報告書の構成

✓ 本調査報告書の全体構成は以下の通りである

【第1章】アントレプレナーシップ人材の裾野拡大に向けたプラットフォーム形成の在り方

・ 第1章では、アントレプレナーシップ教育の受講機会の拡大に向け、全国の学生を対象とした**全国規模のプログラムの概要**を示すとともに、プログラムの試行から導出される課題と示唆を整理した上で、**受講機会の創出、教職員間の連携、プログラムの開発・運営・評価**に係るそれぞれの**今後の方向性についての提案の概要**を示した。

【第2章】エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大：インキュベーション施設の活用方法調査

・ 第2章では、**国内外の大学および民間が運用するインキュベーション施設へのアンケート等の調査結果**を示すとともに、アントレプレナーシップ醸成に資するインキュベーション施設の活用方法や機能等を整理した上で、**エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大についての提案の概要**を示した。

【第3章】エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大：民間企業等が実施するアントレ教育プログラム調査

・ 第3章では、**大学と民間企業等が連携したアントレプレナーシップ教育のプログラムの調査結果**を示すとともに、民間企業等に対する大学アントレ教育への期待・課題を整理した上で、**エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大についての提案の概要**を示した。

【APPENDIX】

・ APPENDIXでは本調査で実施した以下の6つの取組の内容をまとめた。

①	プログラム実施概要	全国アントレプレナーシップ人材育成プログラムの概要を示した。
②	有識者委員会の概要	アントレ教育の裾野拡大に向け、ステークホルダーの参加促進とプログラムの教育的価値の向上を検討するために開催した有識者委員会での協議内容をまとめた。
③	教職員座談会の概要	アントレ教育の裾野拡大に向け、プログラム内容・運営、自大学への還元方法、学生への認知拡大・裾野拡大の方法を検討するために開催した教職員座談会での協議内容をまとめた。
④	学生座談会の概要	プログラムを受講した学生からアントレプレナーシップ教育の裾野を拡大するための方法を検討するために開催した学生座談会での協議内容をまとめた。
⑤	学生向けアンケート実施概要	学生向けのプログラム申込時アンケート、プログラム終了後アンケートの調査結果を示した。
⑥	教職員向けアンケート実施概要	教職員向けのプログラム傍聴申込時アンケート、プログラム終了後アンケートの調査結果を示した。

【第1章】

アントレプレナーシップ人材の裾野拡大に向けた プラットフォーム形成の在り方

【第1節】 検討論点と調査概要

調査テーマを踏まえた調査項目

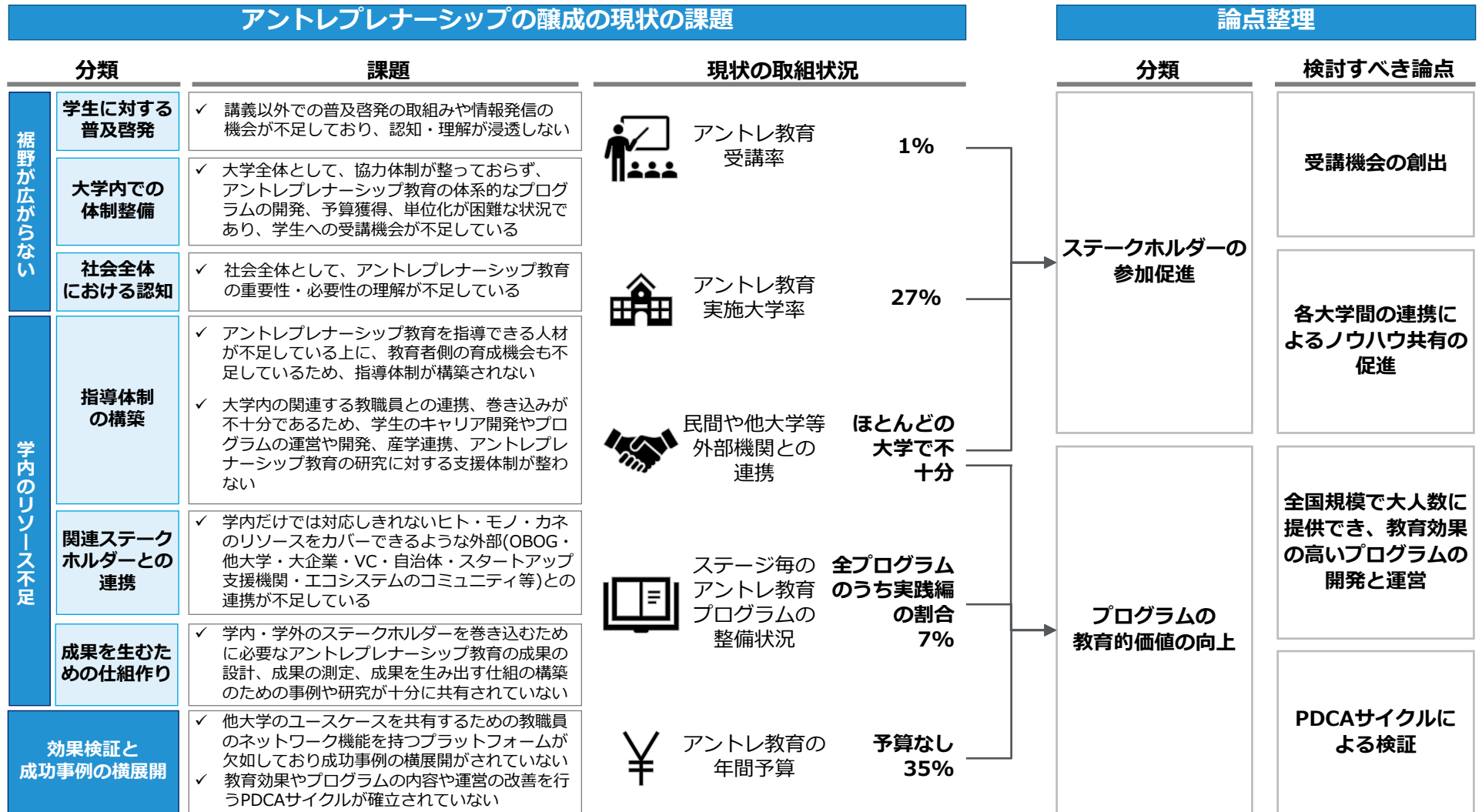
✓ エコシステムに関する論点と全国プログラムの試行を踏まえたプラットフォーム構築に関する論点に整理し、調査を実施した

調査・分析テーマを踏まえた項目

調査・分析テーマ		具体的実施事項	
1 全国プラットフォーム構築による裾野拡大	アントレ教育の受講機会拡大に関する調査・分析	全国規模プログラムの設計と試行	有識者と綿密連携した1,000名以上が実施可能なプログラム設計 全国の学生等を対象としたプログラムの試行的実施 プログラム実施時の課題抽出・最適実施方法に関する検討
		教育効果の評価方法検討	個々の受講者に対する教育効果の測定に関する検討 プログラムの設計・運営に関する評価に関する検討
		プラットフォーム機能・運用	参画者の属性、教育ステージ備えるべき機能、持続的運用検討 教職員間の意見交換・情報提供の場を設け、運用を検討
		アントレ醸成を加速させる広報方策の調査・分析	受講者確保のための広報活動実施（SNS等） プログラムの受講者確保に向けた広報、課題整理検討 情報発信、受講者募集ホームページ運営・運用の方策検討
2 エコシステムとの連携による受講者の裾野拡大	アントレ教育に関する調査・分析	インキュベーション施設の活用方法調査	国内外の大学が運用するインキュベーション施設を対象としてアントレ醸成に資するインキュベーション施設の活用に関して調査 インキュベーション施設の機能・運用方法のアンケート等による詳細調査
		民間企業等が実施するアントレ教育プログラム調査	大学と民間企業等が連携したアントレ教育プログラムに関する調査 民間企業等に対する大学アントレ教育への期待・課題に関する調査

アントレプレナーシップ教育の課題を踏まえた論点の整理

- ✓ 昨年度の報告書にて整理を行った課題を踏まえ、検証すべき論点として「受講機会の創出」「各大学間の連携によるノウハウ共有の促進」「全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営」「PDCAサイクルによる検証」が挙げられる



※ 令和2年度大学におけるアントレプレナーシップ教育に関する調査報告書の第1章(P.10及びP.12)

アントレプレナーシップ教育推進における課題の整理（昨年度調査結果より抜粋）

✓ 昨年度の調査報告書において、アントレプレナーシップ教育推進における課題を整理されている

現状の課題		アントレプレナーシップ教育			アントレ教育後
		アントレプレナーシップの醸成		アントレプレナーシップの発揮	
		動機付け・意識醸成	コンピテンシーの形成	社会実践	
1 受講者の裾野拡大	学生に対する普及啓発	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 講義以外の取組みや情報発信の不足 ✓ 学生コミュニティとの連携不足 ✓ 小中高との連携不足 			
	大学内での理解の促進	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 大学全体としての理解・協力の不足（各学部や研究科での個別対応になっている） ✓ 単位化/必須科目化等、学び促進不足 			
	社会全体における認知	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育の重要性・必要性の理解不足 ✓ 保護者における、学生の受講に対する理解不足 ✓ 社会一般における理解不足 スタートアップだけではなく企業内でもイノベーションを創出する人材の必要性 			
2 アントレ教育のソース不足	学内リソース	ヒト	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育を指導できる人材の育成不足・実務家の採用不足 ✓ キャリア開発等の教員の巻込不足 ✓ 大学内の教育の巻込の不足 ✓ 学術と実務双方を進める教員の育成不足 		3 成果を生むための仕組の不足
		モノ	<ul style="list-style-type: none"> ✓ コーディネート機能の未構築（動機付けから社会実践まで学べるプログラムの全体コーディネートが不足） ✓ 事務局機能の未構築（教員が指導に集中できる環境構築が不足） ✓ 教育プログラム及び共有の不足（成功事例の大学間の事例共有の場合および動機付けから社会実践まで学べる場の整備が不足） ✓ アントレ研究に対する支援不足 ✓ 全大学共通プログラムの開発不足 ✓ 人事評価制度の未対応 ✓ 起業支援プログラムの不足 		
	カネ	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育のための予算獲得難 			
	学外リソース	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 学内だけでは対応しきれないヒト・モノ・カネのリソースをカバーできるような外部（OBOG・他大学・大企業・VC・自治体・スタートアップ支援機関等）との連携不足 ✓ 各地に所在するエコシステムのコミュニティとの連携不足 			
3 成果を生むための仕組の不足	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育後のフェーズにおける課題（右記記載） 				<ul style="list-style-type: none"> ✓ 仕組みの企画設計及び学内外を巻き込み取組む人材不足 ✓ アントレ教育後の展開を見据えたプログラムの未整備や外部連携の未構築
4 効果検証と成功事例横展開	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 他大学の取り組みを知る機会の欠如 ✓ 教育効果の可視化不足（各大学の取組を横展開するための取組評価指標及び有識者による第三者評価を行う継続的機会の設置） 				

※ 令和2年度大学におけるアントレプレナーシップ教育に関する調査報告書の第1章(P.12)

アントレプレナーシップ教育の全体像（昨年度調査結果より抜粋）

【未来社会像】

多様な価値を認めウェルビーイングを達成するためのよりよい社会
一つの固定されたものではなく、常に考え続けていかなければならないもの

【目指す人材】

急激な社会環境の変化を受容し、新たな価値を生み出していく精神
(アントレプレナーシップ)を備えた人材の創出

研究成果の活用も含め、スタートアップやスモールビジネス、
地域特有課題の解決など、創造したい未来・解決したい課題に応じ、
実際に事業を進めていくにあたり必要な様々な専門知識や機会を提供

既存組織

スタートアップ

スモールビジネス※

未来創造や課題解決のために必要な汎用知識やスキルを
提供すると共に、それらを活用し、
実現に向けた仮説検証ができる場や機会を提供

社会に存在する課題を自分事として捉える
課題の発見力や共感力を育むことを入口に、
不確実性の高い環境下でも自身の持つ資源を超えて機会を追求し未来創造や
課題解決に向けた行動を起こしていくための精神と態度を学ぶ場や機会を提供

■ 各専攻分野を通じて培う学士力

(中央教育審議会答申)

- (1) 知識・理解、(2) 汎用的技能、(3) 態度・志向性、
(4) 統合的な学習経験と創造的思考力

■ 「生きる力、学びのその先へ」

(文科省 学習指導要領)

- ・学んだことを人生や社会に生かそうとする(学びに向かう力など)
- ・実際の社会や生活で生きて働く(知識及び技能)
- ・未知の状況にも対応できる(思考力、判断力、表現力)

■ Education2030

「変革を起こす力のある
コンピテンシー」(OECD)

- ・新たな価値を創造する力
- ・対立やジレンマを克服する力
- ・責任ある行動をとる力

アントレプレナーシップの発揮

社会実践段階

コンピテンシーの形成段階



動機付け・意識醸成段階

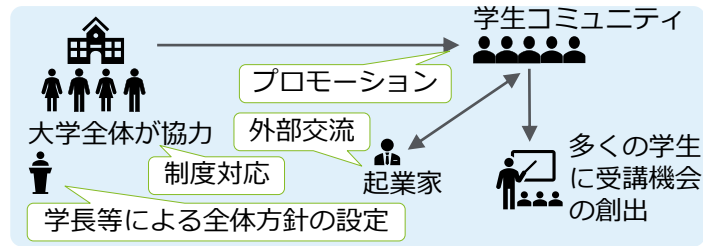
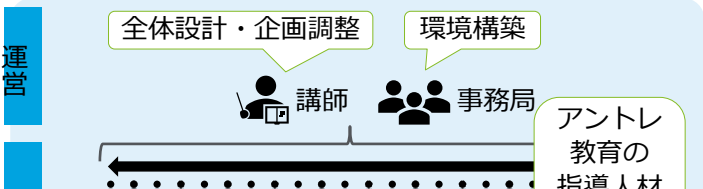

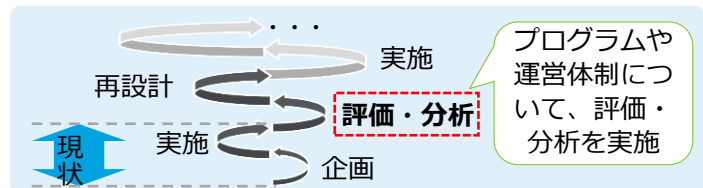
アントレプレナーシップの醸成

アントレ教育に関わらず、
大学卒業までに
広く身に着けるべき能力

- ※ スモールビジネスにはNPOなども含む
- ※ 令和2年度大学におけるアントレプレナーシップ教育に
関する調査報告書の第1章(P.9)

アントレプレナーシップ教育推進に向けた目指すべき姿

- ✓ アントレプレナーシップ教育の推進に向けて、昨年度の調査報告書の結果を踏まえて、検証すべき論点ごとに目指すべき姿を整理した

分類	検証すべき論点	アントレ教育推進に向けた目指すべき姿
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	 <p>大学内外におけるアントレ教育の機運の醸成と学生が受講しやすい環境整備を通じて裾野拡大を図る</p>
各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	 <p>指導体制の全体設計と企画調整・運営を行う事務局を設置し、指導人材の巻き込みや、大学間連携を通じた人材育成やプログラム共有等で学内の指導体制を確立する</p>
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営	 <p>全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営</p>
PDCAサイクルによる検証	PDCAサイクルによる検証	 <p>プログラムや運営体制について、評価・分析を実施</p> <p>プログラムの企画や実施だけではなく、評価・分析を踏まえたプログラムの再設計をし、実施という好循環のサイクルを回す</p>

※ 令和2年度大学におけるアントレプレナーシップ教育に関する調査報告書の第1章(P.14、P.15、P.19)

検討論点と初期仮説の整理

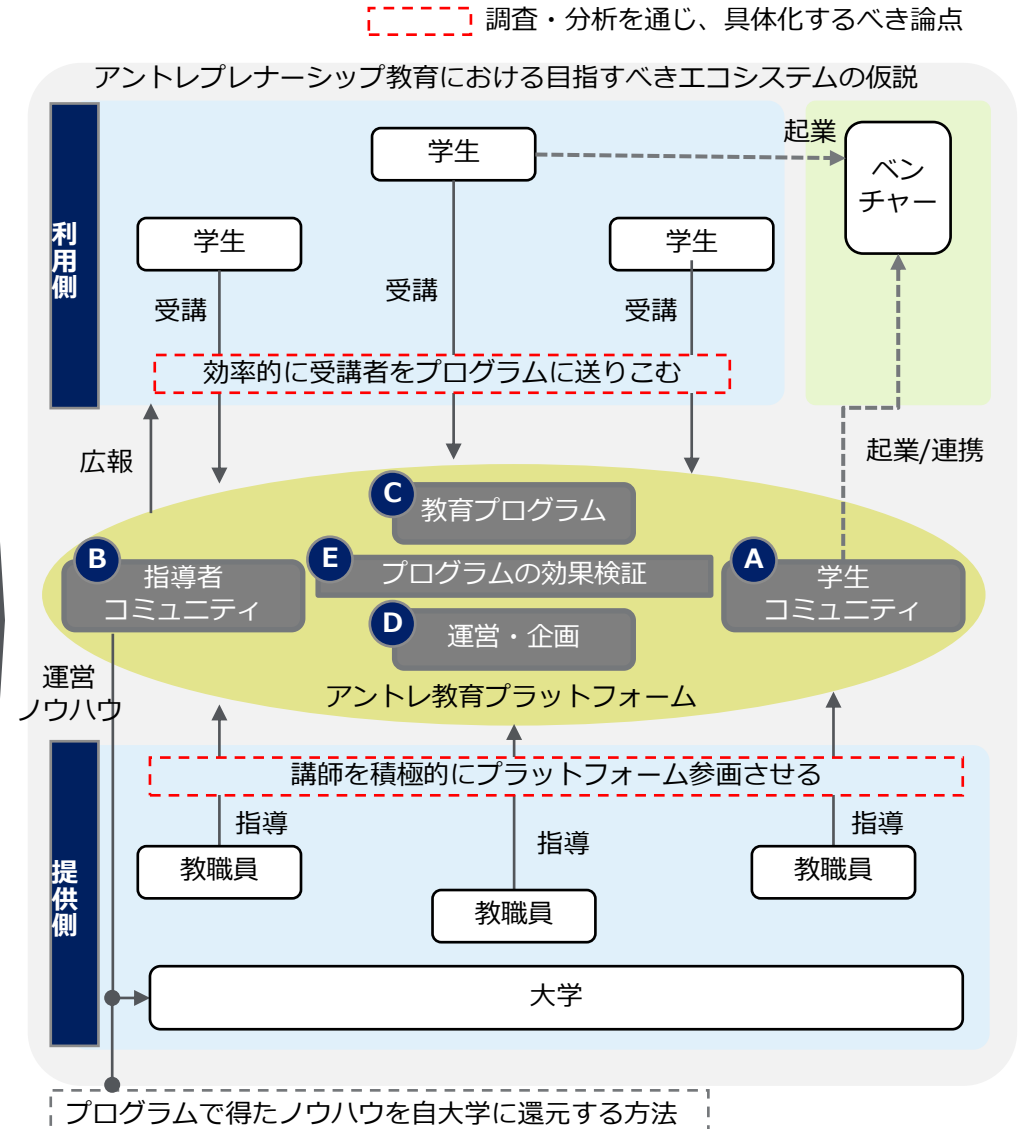
✓ アントレプレナーシップ教育の推進に向け、各論点の課題の解決のために5つの初期仮説(A)~(E)を整理した

分類	検証すべき論点	昨年度検討した事項	今年度の初期仮説
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	大学内外におけるアントレ教育の機運の醸成と学生が受講しやすい環境整備が必要であり、 特に受講機会に恵まれていない地方の学生に対して受講機会を創出する取組が重要である	A 全国の学生を対象として アントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信 および 受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	各大学の指導人材と支援人材を巻き込み、大学間の連携を促進させ、 不足しているリソースを補う仕組みの構築が必要である	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営	教育的価値の高いプログラムの設計や内容について検討した上で、そのプログラムの円滑な運営方法を確立 させることが重要である	C 教育的価値の高いプログラムの開発
	PDCAサイクルによる検証	プログラムの内容や運営に関する評価分析を踏まえたプログラムの再設計→実施という好循環サイクルを回し、 持続的にプログラムを改善する方法の確立 が重要である	D 円滑かつ効率的な運営手法の確立
			E プログラムの効果測定と改善方法の確立

アントレプレナーシップ教育の目指すべきエコシステムにおける検証論点の全体像

✓ 本事業では各論点について初期仮説を整理し、アントレプレナーシップ教育における目指すべきエコシステムの検証を行った

分類	検証すべき論点	初期仮説
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営	C 教育的価値の高いプログラムの開発
	PDCAサイクルによる検証	D 円滑かつ効率的な運営手法の確立
		E プログラムの効果測定と改善方法の確立



検討内容と検証方法の整理

✓ 各論点の初期仮説について、検証内容と検証方法を整理した

分類	検証すべき論点	初期仮説	検証内容	検証方法
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営	学生の認知・関心の醸成が不足している課題に対し、 認知拡大・関心醸成の方法 について検証を行う アントレ教育の受講環境が未整備である課題に対し、 全国プログラムを実施し、学生の反応を通して検証を行う	✓ 学生に対してアントレ教育の認知拡大及び関心醸成につなげるための プロモーションを実施した ✓ 全国プログラムの公式HPへの来訪者や申込者の分析を行い、 プロモーションの効果測定 を実施した ✓ 学生の関心のあるテーマを取り上げ、 当事者意識を醸成させ、受講意欲を高めることができたか 、学生向けのアンケートや座談会等を通して検証した ✓ 全国プログラムに申し込んだ学生の 参加動機 について、アンケート等を通して検証した
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現	全国プログラムへの参加を促し、オンライン上での コミュニティ形成 や 自大学へのプログラムの還元の可能性に関する教職員の反応 について検証を行う	✓ メールや説明会等を通して教職員の参加を促し 、アンケートや座談会等を通して教職員の反応について検証した ✓ オンライン上でのコミュニティ形成や自大学へのプログラムの還元の可能性について、 座談会等 を通して検証した
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発	C 教育的価値の高いプログラムの開発	アントレ教育の 裾野拡大に資するプログラムの開発 及び 各大学への展開の可能性 について検証する	✓ アントレプレナーシップの 醸成段階のプログラムを開発 し、学生に提供した上で、学生の活動状況やアンケートや座談会等を通して 学生と教職員の反応 について検証した
	円滑かつ効率的な運営手法の開発と運営	D 円滑かつ効率的な運営手法の確立	オンライン形式のプログラムでの 効率的な運営方法や運営体制 やオンラインならではの インタラクティブな受講環境 について検証する	✓ オンライン形式のプログラムの運営で必要となる インフラ整備 及び 学生へのフォローアップ体制 を検証し、オンラインならではの インタラクティブな学びにつなげるための工夫 について検証し、学生と教職員の反応について検証した
	PDCAサイクルによる検証	E プログラムの効果測定と改善方法の確立	個々の学生への教育効果の測定方法 や プログラムの在り方の評価方法 について検証する	✓ プログラムの内容や目的に応じて個々の学生の教育効果を測定するために 受講前後のアンケート を実施し、プログラムの在り方を評価するために 個々の学生への教育的効果や座談会での反応等 を通して検証した

検討結果と解釈

✓ 本事業を通して検証した各論点の初期仮説の結果を踏まえて、それぞれの解釈を整理した

分類	検証すべき論点	初期仮説	検証結果	検証結果の解釈
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営	Webサイトには約 2.4万人 が訪れ、定員1,050名の枠を超える約 1,400名 の申込があった 受講終了後のアンケートでは プログラムへの期待値は高かった が、認知が低いため 具体的なイメージが持てなかった という意見が挙げられた	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 全国の学生がWebサイトに訪れプログラムに申し込んだことから、全国的にアントレ教育への潜在的なニーズがあるといえる ✓ 学生の認知のきっかけは大学の媒体やWeb/SNS等が多く、大学や学生コミュニティ等の巻き込みが重要であるといえる ✓ 学生の関心を醸成させるためには、学生の心理的なハードルを解消させ、受講のメリットの明確化、受講のインセンティブの創出が必要である ✓ 地域のステークホルダーを巻き込み、学生の当事者意識を向上させる実践的なフィールドワークを提供する必要がある
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現	全国から約 100名 の教職員が本プログラムに参加したが、 教職員のコミュニティは活性化されなかった	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 教職員のアントレ教育プログラムへの潜在的な関心は高い ✓ 教職員間の連携を促し、活性化させるためには、共通の目的下における共同活動による連携促進や継続的な連携が取れるプラットフォームの形成が必要である
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発	C 教育的価値の高いプログラムの開発	学生の満足度は高い が、学生の 当事者意識を醸成 や 各大学への展開 について検討が必要	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 汎用性の高いプログラムを開発すると同時に、各地域特性を踏まえたフィールドワーク等の設計や学生間の交流の活性化を通して、学生の関心を高め、当事者意識を醸成させる必要がある
	教育効果の高いプログラムの開発と運営	D 円滑かつ効率的な運営手法の確立	オンライン形式の 受講環境やフォローアップ体制の整備 、 グループワーク 、 学生間の交流 については検討が必要	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生と教職員の双方にとって快適なオンラインプログラムの運用方法を検討し、学生の疑問や不安を解消させ、学生間の交流を活性化させ、インタラクティブな交流を促進する取り組みが必要である
	PDCAサイクルによる検証	E プログラムの効果測定と改善方法の確立	プログラム内容や目的に応じた 評価方法の確立 や オンラインとオフラインのそれぞれの良さを活かした連携 が重要	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育の研究データを蓄積し、個々の学生の教育効果の中長期的な測定を行うとともに、オンラインとオフラインのそれぞれの良さを活かすために、アントレ教育の教育フェーズに合わせて各地域や各大学と連携していく必要がある

各論点のステークホルダーごとの施策案の整理

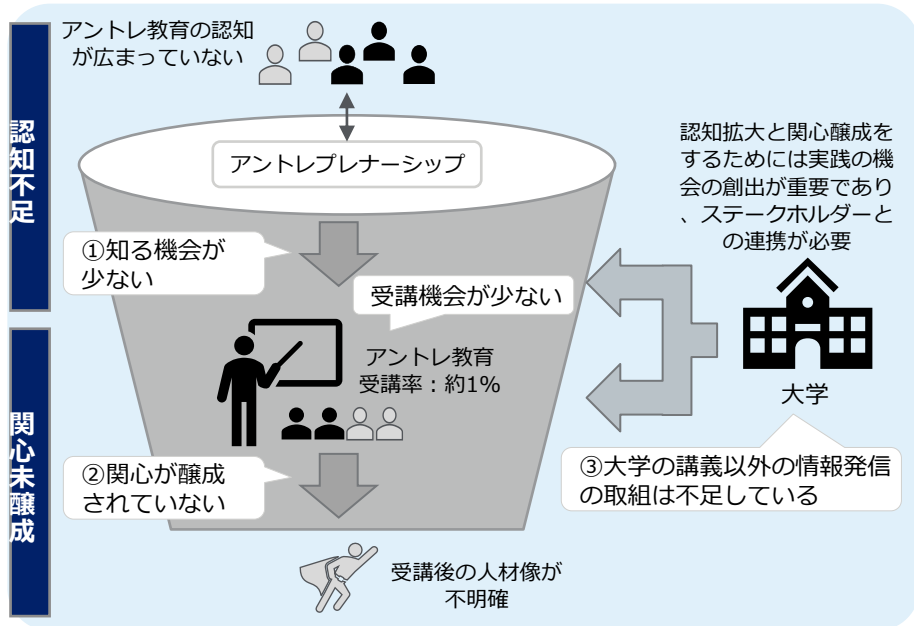
✓ 各論点の初期仮説における、学生、教職員、地域のステークホルダーごとの施策案について整理した

分類	検証すべき論点	初期仮説	ステークホルダーごとの施策案		
			学生（利用者）	教職員（提供者）	地域（パートナー）
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 当事者意識を持ち、自分の関心事やキャリア等と関連させ、受講の内発的動機付けを喚起させる ✓ 学生間の口コミや友人や知人への推奨等を通じて、プログラムの認知拡大や関心醸成を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 地域と連携し、アントレ教育を認知していない学生に対してもプロモーションを実施し、認知のきっかけを創出する ✓ プログラムの本質的な提供価値や受講のメリットを明確にし、受講後の人材像について発信していく 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ メディア等と連携し、認知を拡大させる ✓ 自治体や企業等が参画し、地域課題や企業課題等に取り組む実践的なフィールドワーク等の機会を創出し、学生の関心を惹きつける
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現	—	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 共通の目的下における共同活動に取り組む ✓ 交流の場として、オンラインプラットフォームを活用する 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 地域や企業等と連携し、産業界の視点を取り入れ、教育産業の企業と連携し、ノウハウを蓄積することで有効な学びの場を創出する
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発	C 教育的価値の高いプログラムの開発	<ul style="list-style-type: none"> ✓ エンドユーザーとしてプログラム開発に関与する 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 汎用性の高い全国プログラムを地域ごとの特性を踏まえて各大学に還元する 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 地域課題等に関するフィールドワーク等の実践の機会を提供する
	教育効果の高いプログラムの開発と運営	D 円滑かつ効率的な運営手法の確立	<ul style="list-style-type: none"> ✓ インタラクティブな交流による学生間の相互学習を活性化させる 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生へのフォローアップの体制を構築するとともに、円滑な運営体制構築のために教職員を巻き込む 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 地域や企業等が事務局機能を担い、学生にとって効果的なプログラム運営を行う
	PDCAサイクルによる検証	E プログラムの効果測定と改善方法の確立	<ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラムごとに設定されたロールモデルに近づいたか中長期的に教育効果を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育の研究を促進するデータプラットフォームの活用と全国プログラムとの連携を強化する 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育の教育フェーズごとに全国プログラムと連携をし、地域での広報や実践の機会創出につなげる

- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、学生の受講機会の拡大には、学生の認知のきっかけの創出やアントレプレナーシップ教育を自分事に捉えさせるような関心の醸成とステークホルダーの巻き込みが重要となる

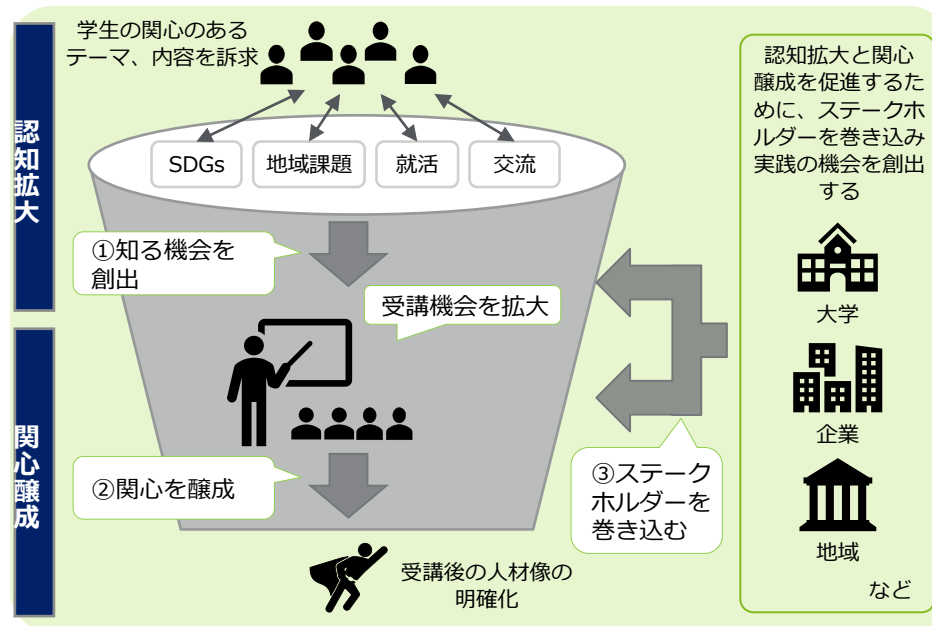
現状

学生にとってアントレ教育の認知につながるような機会が少なく、関心の醸成の工夫やステークホルダーの巻き込みが十分でない



目指す姿

認知のきっかけの機会を創出し、アントレ教育を自分事に捉えさせる工夫とステークホルダーの巻き込みにより受講機会の拡大を図る



今後の方向性

各大学

- ① 学生の興味関心を惹きつけ、アントレプレナーシップ教育の認知のきっかけの創出が必要
- ② アントレプレナーシップ教育を自分事に捉えさせ、当事者意識を醸成させるための工夫が必要
- ③ 学生の参加の動機付けにつなげるために、多種多様なステークホルダーの巻き込みが必要

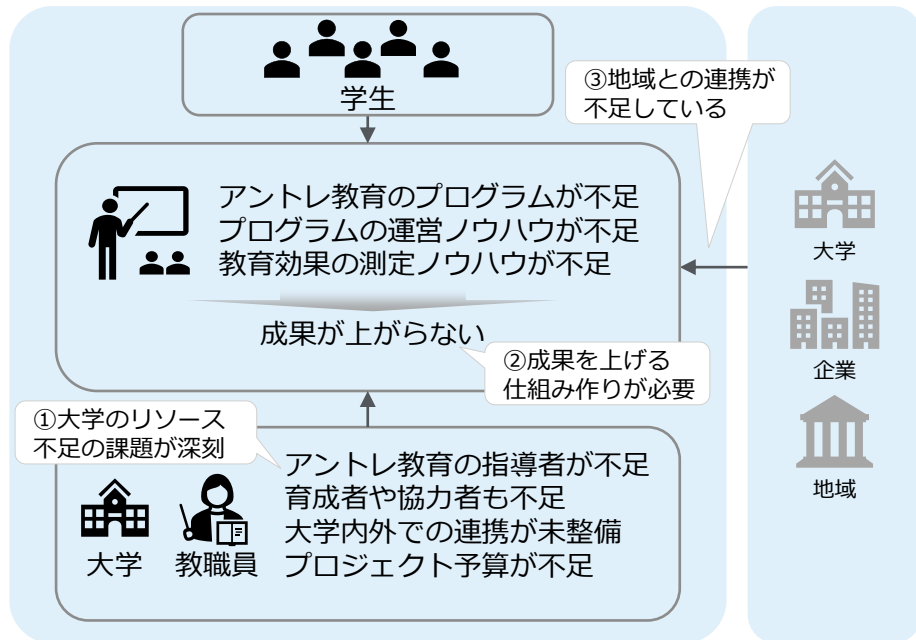
ステークホルダー

- ③ ステークホルダーとの連携による下記のような機会の創出が必要
 - ✓ 自治体：社会課題解決の関心層の巻き込み、実践の機会の創出
 - ✓ 民間企業：企業課題解決の関心層の巻き込み、実践の機会の創出

- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大に向けた、教職員間の連携には、教職員プラットフォームの構築と、教職員の学びの場の創出やステークホルダーとの連携による教職員コミュニティの形成が重要である

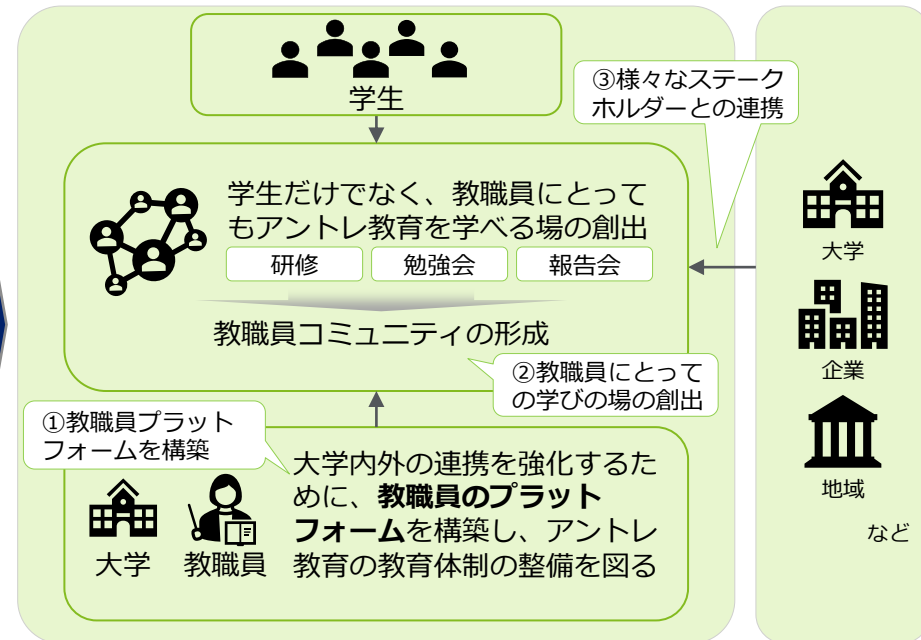
現状

大学のリソース不足により、学生に対して十分なアントレ教育の受講の機会を創出することができておらず、大学間・地域との連携が必要



目指す姿

教職員間の連携を促進するために、教職員のプラットフォームを構築し、アントレ教育を学べる場を創出するためにコミュニティの形成が重要である



今後の方向性

各大学

- ① 教職員間の連携を強化するために、教職員が交流し合える場としてオンラインプラットフォームを構築
- ② 教職員にとっての学びの場を創出させるためにコミュニティの形成
- ③ 様々なステークホルダーとの連携によるノウハウの蓄積、教職員の参加の動機付け

ステークホルダー

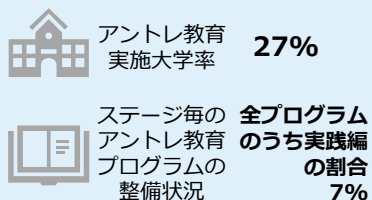
- ③ 下記のようなステークホルダーと連携し、持続性のある有効な学びの場を創出する
 - ✓ 自治体：地域の社会課題の観点を取り入れるために、教職員コミュニティと連携
 - ✓ 民間企業：地域ごとの特性を踏まえたビジネスの観点を取り入れるために、教職員コミュニティと連携

✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、プログラムの開発には、汎用性の高い全国プログラムの開発、地域特性を踏まえたプログラムの活用、学生の関心醸成につながるステークホルダーを巻き込んだプログラム開発が重要である

現状

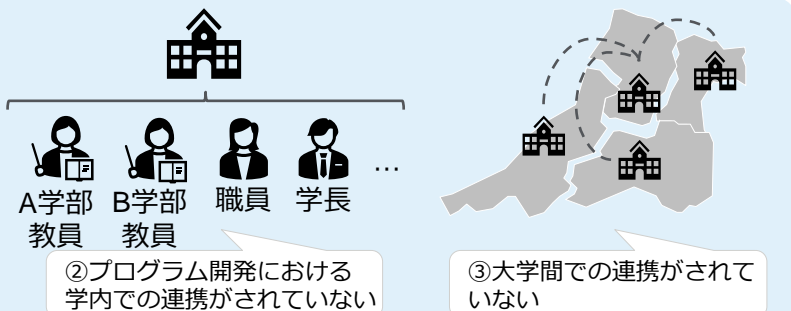
アントレ教育のプログラムが全体的に不足している背景には、大学内での連携や大学間での連携がされていない点が挙げられる

プログラムの不足



①アントレ教育のプログラムが全体的に不足

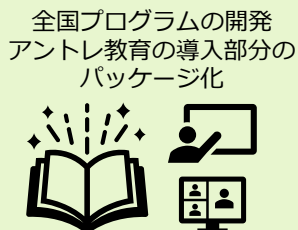
連携の不足



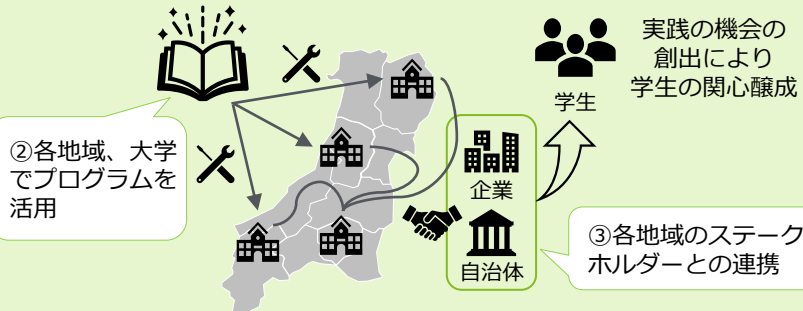
目指す姿

汎用性の高い全国プログラムを開発し、全国の学生に展開するとともに、各地域、大学での活用やステークホルダーの巻き込みが重要である

全国プログラムの開発・実施



ステークホルダーと連携



今後の方向性

各大学

- ① アントレ教育の初期フェーズ（動機付け・意識醸成段階、コンピテンシーの形成段階）においては、汎用性の高い全国プログラムを開発し、全国の学生に展開
- ② アントレ教育の実践フェーズ（社会実践段階）においては、全国プログラムを各地域や各大学にて活用
- ③ 地域のステークホルダーを巻き込み、フィールドワーク等の実践の機会を創出

ステークホルダー

- ③ 下記のようなステークホルダーと連携し、学生の関心を醸成させる
 - ✓ 自治体：社会課題解決につながるフィールドワーク等の創出
 - ✓ 民間企業：企業課題解決につながる実践の機会の創出

✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、プログラムの運営には、円滑な運営体制の構築と、学生の疑問や不安を解消するフォローアップ体制の整備と、学生のコミュニティの活性化させる運営方法の確立が重要である

現状

アントレ教育のプログラムを円滑に実施する運営体制やフォローアップの体制が整っておらず、学生への効果的な学習の提供が困難な状況である

運営体制の未整備



①円滑な講義の体制が未整備

- 大学リソースの不足
- サポーターの不足
- 事務局の不足

②フォローアップの体制が未整備

運営方法の未確立

学生への教育効果を高めるためのオンラインならではのインタラクティブな交流を促進させる運営方法が未確立



マニュアル整備



アナウンスメント



インフラ整備



学生間交流の促進のノウハウ

③学生に効果的な学習を与える運営方法が未確立

目指す姿

講義やグループワークを円滑に運営し、学生の疑問や不安を解消するためのフォローアップ体制を整備し、学生のコミュニティの活性化を促す運営が必要

運営体制の整備

①円滑な運営体制の構築



講義内
講義・グループワーク

②フォローアップ体制の整備



教職員の巻き込み



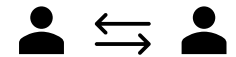
TAの組織化



事務局の機能強化

効果的な運営方法の確立

講義外



学生間の交流・学び

③学生のコミュニティの活性化を促す運営



講義外説明会



マニュアル整備



問合せ、トラブルシューティング



インフラ整備



交流促進のノウハウ



アナウンスメント

今後の方向性

各大学

- ① 講義やグループワークにおいて円滑かつ効率的な運営ができるような体制を整備
- ② 各地域や各大学の教職員等を巻き込み、学生の疑問や不安を解消するためのフォローアップ体制を整備
- ③ 学生のコミュニティの活性化を促し、学生間の交流を活性化させ、相互学習を促進させる運営体制を整備

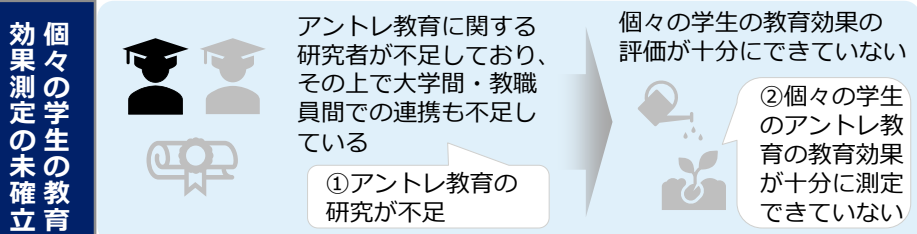
ステークホルダー

- ② ③ 下記のようなステークホルダーを巻き込み、学生にとって効果的なプログラムの運営を実現
 - ✓ TA：教職員がフォローしきれない領域について、学生へのフォローを実施
 - ✓ 事務局：オンラインプラットフォームの環境整備や学生コミュニティの形成を支援し、活発な交流・相互学習を促進
 - ✓ 民間企業：学生コミュニティの活性化に関するノウハウの提供

- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、プログラムの評価には、プログラムの評価には、教育効果の測定の観点では、アントレ教育の研究の促進や教育効果の指標の測定及び中長期的な観測、一方でアントレ教育の裾野拡大の観点では、教育フェーズごとに全国プログラムと各大学が互いに補い合う座組の取組みが重要である

現状

アントレ教育の研究が不足しており、個々の学生の教育効果の測定が十分にできておらず、プログラムの在り方の検討も不十分な状況である

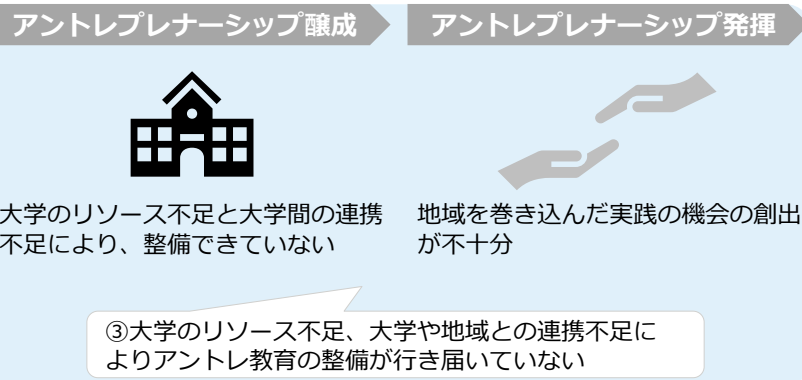


目指す姿

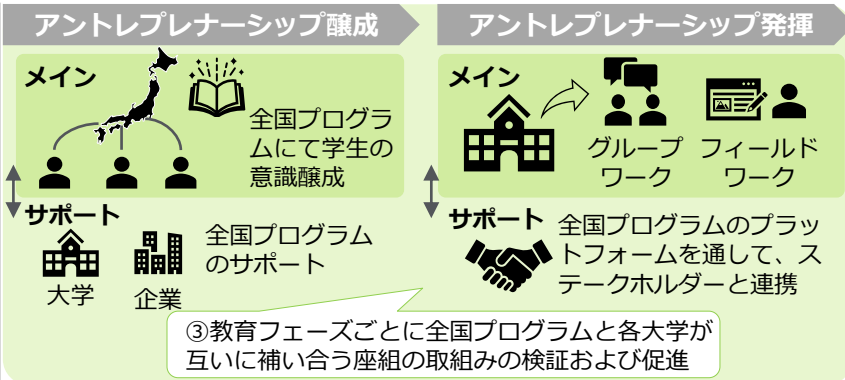
ロールモデルの設定等を通じた個々の学生の教育効果の測定方法の確立や教育フェーズごとに全国プログラムと各大学が補い合う座組の取組みが重要



アントレ教育の裾野拡大における全国プログラムのあり方の評価の未確立



アントレ教育の裾野拡大における全国プログラムのあり方の評価と検証



今後の方向性

各大学


- ① 教職員の研究成果を研究者がアクセス可能なデータベースに蓄積し、共有することにより、アントレ教育の学術研究を促進
- ② 学生のロールモデルを提示した上で、教育効果の測定指標を設定し、指標に関する中長期的な測定を実施
- ③ 全国プログラムとの連携を強化し、教育フェーズごとに互いに補い合う座組の取組みを促進

ステークホルダー

- ③ 下記のようなステークホルダーを巻き込み、教育フェーズごとに補完し合う形を検討することでプログラムの在り方を実現
 - ✓ 自治体：アントレプレナーシップ醸成の段階では全国プログラムをサポートし、アントレプレナーシップ発揮の段階では各大学と連携し実践的なフィールドワークの場を提供する
 - ✓ 民間企業：アントレプレナーシップ醸成の段階では全国プログラムをサポートし、アントレプレナーシップ発揮の段階では各大学と連携し実践的なフィールドワークの場を提供する

アントレプレナーシップ教育の教育フェーズごとの課題と対策と取組の整理

- ✓ 本事業の検証結果や施策案を踏まえ、アントレプレナーシップの醸成・発揮に向けた基本的な考え方、課題、対策、取組を整理した

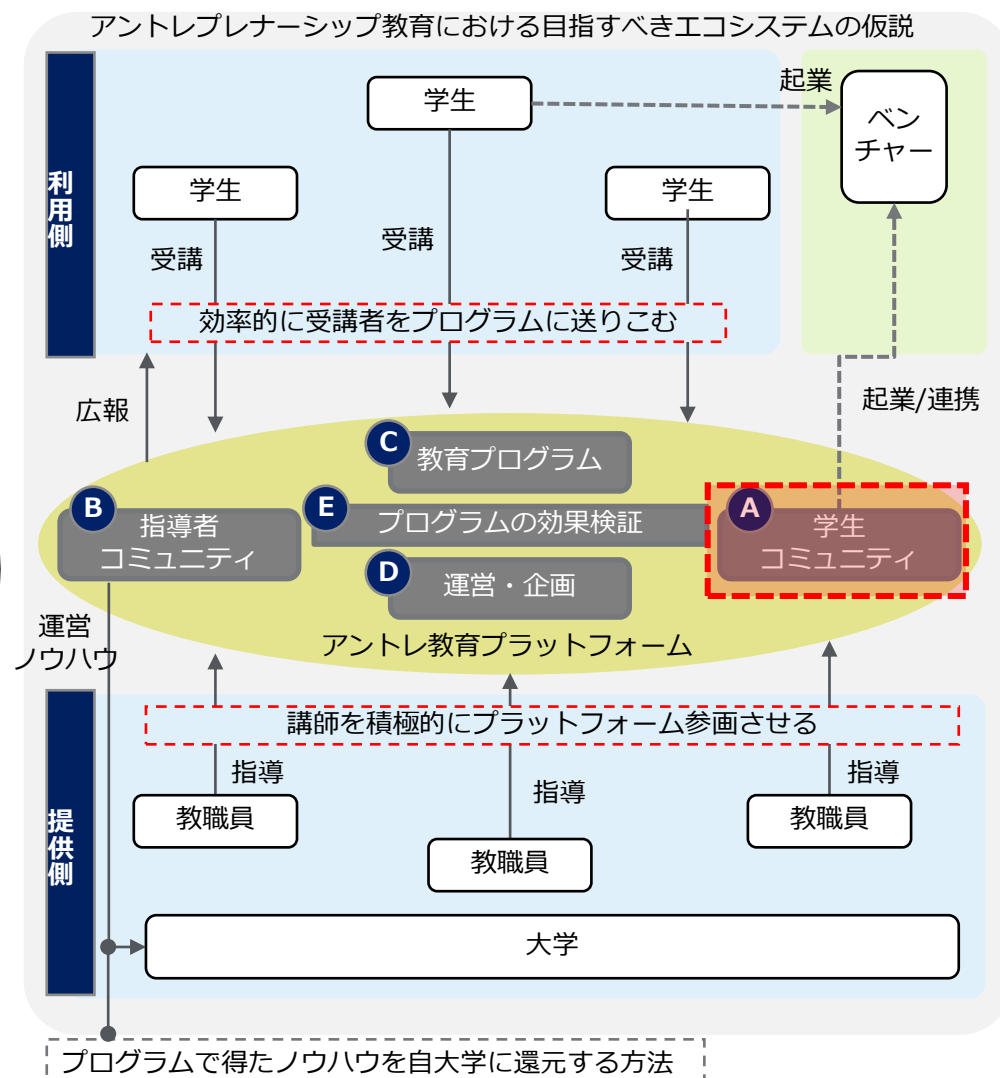
		アントレプレナーシップ教育	
		アントレプレナーシップの醸成	アントレプレナーシップの発揮
		動機付け・意識醸成  コンピテンシーの形成	社会実践
基本的な考え方	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 全国の学生に受講機会を創出するために、オンラインを主とした大人数が受講可能なプログラムを開発し、学生や教職員が交流できるプラットフォームを構築し、アントレプレナーシップの醸成を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ オンラインでは創出しづらい実践の機会については、各地域や各大学や各種ステークホルダーと連携し、アントレプレナーシップの発揮を図る 	
課題	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育に対する学生の認知・関心が不足しており、アントレ教育の受講につながっていない ✓ 大学のリソース不足により、プログラムの開発や運営や効果測定等の実施体制が整っていない ✓ 学生への広報やフォローアップにおいて、地域のステークホルダーとの連携が十分にできていない 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラムで得られる便益や受講後の人材像が不明確であるため、動機付けにつながらず、当事者意識の醸成がされず継続的な学習が実現しない ✓ ステークホルダーとの連携が不十分であることから、フィールドワーク等の社会実践の機会が不足している 	
対策	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アントレ教育への一定の需要があることから、学生への認知拡大・関心醸成を促進するプロモーションが必要である ✓ 受講環境や実施体制を整備するために、プラットフォームの構築する必要がある ✓ プロモーションや実施体制の整備を推進するために、地域のステークホルダーとの連携が必要である 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラムの目的に合わせてアントレ教育の本質的な価値やロールモデルを明確に伝えるとともに、中長期的に教育効果を測定する必要がある ✓ オンラインプログラムと連携し、オフラインにて地域ごとの特性を踏まえたフィールドワーク等の実践の機会の創出が必要である 	
取組	<ul style="list-style-type: none"> ■ プロモーション <ul style="list-style-type: none"> • Webプロモーション • 大学の媒体によるプロモーション • 学生間の口コミや推奨 ■ 実施体制の整備 <ul style="list-style-type: none"> • 学生コミュニティを活性化させる仕掛けの実施 • 教職員間の連携を促進する教職員コミュニティの形成 • 自治体や民間企業との連携による学生の関心の醸成 	<ul style="list-style-type: none"> ■ アントレ教育のゴール設計 <ul style="list-style-type: none"> • プログラムの目的に応じたロールモデルの設定 • アントレ教育の効果測定の研究の促進 • 個々の学生の教育効果の測定の中長期的な観測 ■ 実践の機会の創出 <ul style="list-style-type: none"> • 地域特性を踏まえたプログラムの活用 • 自治体、民間企業等のステークホルダーと連携したフィールドワークの実施 	

【第2節】 (A) 受講機会の創出に関する検討

✓ 本節では(A)受講機会の創出の論点の初期仮説を検証し、アントレプレナーシップ教育における目指すべきエコシステムの検証を行う

分類	検証すべき論点	初期仮説
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営	C 教育的価値の高いプログラムの開発
		D 円滑かつ効率的な運営手法の確立
	PDCAサイクルによる検証	E プログラムの効果測定と改善方法の確立

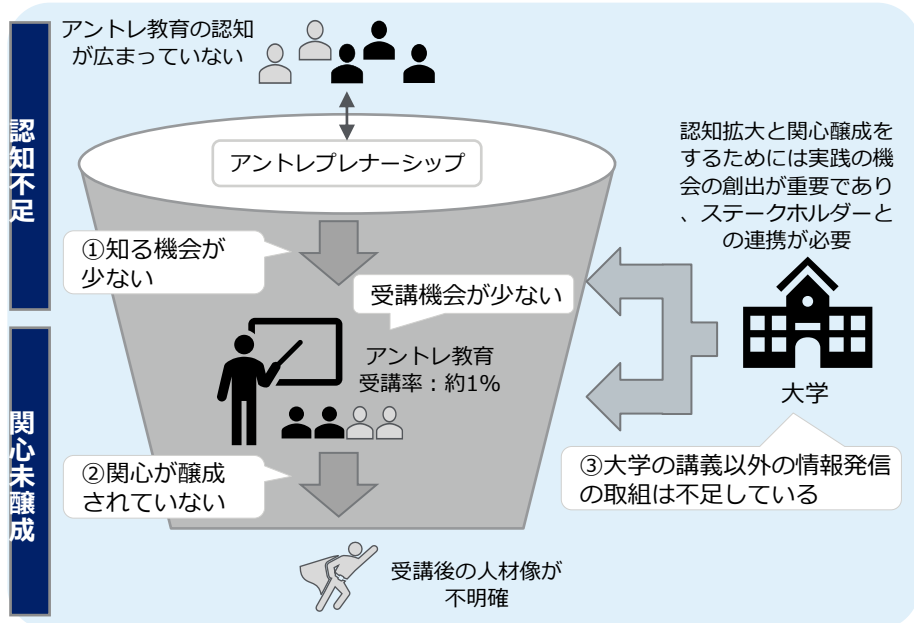
調査・分析を通じ、具体化するべき論点



- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、学生の受講機会の拡大には、学生の認知のきっかけの創出やアントレプレナーシップ教育を自分事に捉えさせるような関心の醸成とステークホルダーの巻き込みが重要となる

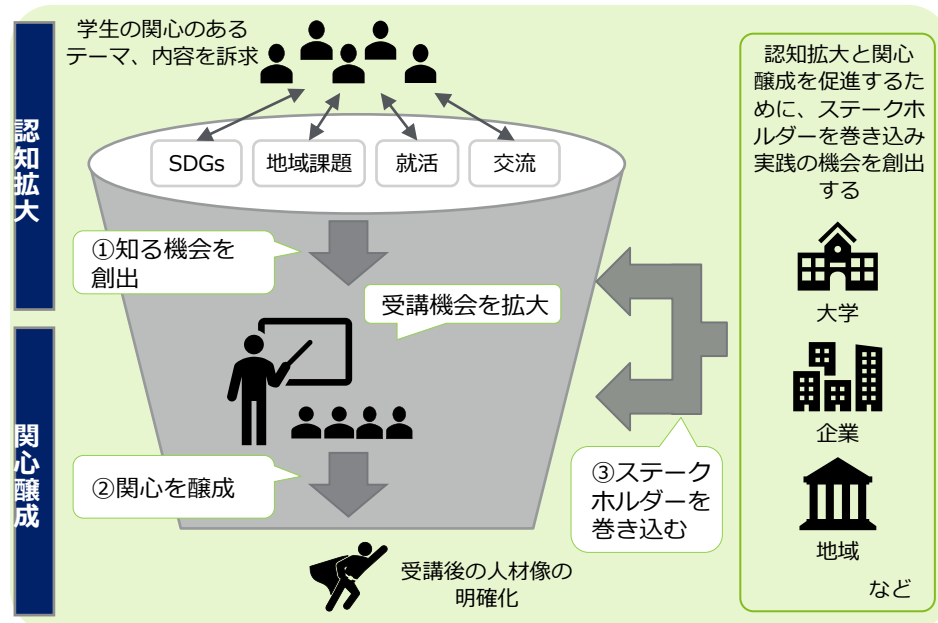
現状

学生にとってアントレ教育の認知につながるような機会が少なく、関心の醸成の工夫やステークホルダーの巻き込みが十分でない



目指す姿

認知のきっかけの機会を創出し、アントレ教育を自分事に捉えさせる工夫とステークホルダーの巻き込みにより受講機会の拡大を図る



今後の方向性

各大学

- ① 学生の興味関心を惹きつけ、アントレプレナーシップ教育の認知のきっかけの創出が必要
- ② アントレプレナーシップ教育を自分事に捉えさせ、当事者意識を醸成させるための工夫が必要
- ③ 学生の参加の動機付けにつなげるために、多種多様なステークホルダーの巻き込みが必要

ステークホルダー

- ③ ステークホルダーとの連携による下記のような機会の創出が必要
 - ✓ 自治体：社会課題解決の関心層の巻き込み、実践の機会の創出
 - ✓ 民間企業：企業課題解決の関心層の巻き込み、実践の機会の創出

- ✓ アントレ教育の裾野拡大における、(A)受講機会の創出の課題に対して、認知拡大として「潜在的なニーズの規模」と「有効に学生へ訴求する手法」、関心醸成として「参加の動機」と「学生の関心のあるテーマ」をそれぞれ検証する

昨年度の調査結果

アントレ教育の課題

受講機会が創出されていない

- ✓ 学生のアントレ教育受講率は**1%**程度であり、受講者が限られている
- ✓ 学生のアントレ教育の**認知が不足**しており、受講者の裾野拡大が広がらない
- ✓ その背景として、社会全体としての**アントレ教育に対する重要性・必要性の理解の不足**が挙げられる
- ✓ 学生に対する普及啓発においては、**講義以外の取組や情報発信の不足、学生コミュニティとの連携不足**等が挙げられている

検証すべき事項

- ✓ **アントレ教育のニーズがある学生は全国的にどれぐらいの規模があるか**を検証すべきである
- ✓ アントレ教育の裾野拡大に向けた、学生に対する**有効な認知拡大の訴求の方法**について検証すべきである
- ✓ どのような学生が関心を持ち、**アントレ教育に対してどのような動機（モチベーション）**を持って参加したのか検証すべきである
- ✓ 学生のアントレ教育に対する認識を踏まえた上で、**学生の関心のあるテーマ**がどのようなものかを検証すべきである

今年度の調査内容

検証内容

受講機会の創出

- ✓ アントレ教育の裾野拡大に向けて、アントレ教育に対する学生の**潜在的なニーズ**を把握し、**認知を広げる学生への訴求**が必要である
- ✓ アントレ教育の受講を促すために、**学生の関心を醸成させる**情報発信を検討する必要がある

① アントレ教育の認知拡大

アントレ教育の認知不足という課題に対して、アントレ教育の「**潜在的なニーズの規模**」と「**有効に学生へ訴求する手法**」について検証する

② アントレ教育の関心醸成

アントレ教育に対する学生の関心を醸成させるために、アントレ教育のプログラムへの学生の「**参加の動機**」や「**学生の関心のあるテーマ**」について検証する

- ✓ アントレ教育の認知拡大の検討項目である、潜在的なニーズの規模と有効に学生へ訴求する手法について実証的に検証した
- ✓ アントレ教育のニーズのポテンシャルやステークホルダーの巻き込みについて解釈・考察を整理した

検証項目	検証方法	検証結果	解釈・考察
① アントレ教育の認知拡大 潜在的なニーズの規模	アントレ教育に 潜在的なニーズを持つ学生 を把握するために、アントレプレナーシップに関連する検索動向について調査を行う	アントレ教育に対する潜在的なニーズの規模 ✓ 本プログラムのWebサイトへの訪問者数は約 2.4万人 であり、全国的にアントレ教育への 潜在的なニーズがある といえる【A-10】 ✓ 全国の学生に対する訴求を通して、 全国各地からWebサイトに学生が訪れた 【A-10】 ✓ 定員1,050名の枠を越える 約1,400名 の申込があった【A-10】	アントレ教育のニーズのポテンシャル ✓ アントレ教育の 受講経験がない学生においても、アントレ教育に対するニーズが存在している ✓ 潜在的なニーズを持つ学生に対して、 継続的にアントレ教育の訴求 を行うべきと考えられる
	有効に学生へ訴求する手法 実証的に全国の大学生に対してアントレ教育の 認知拡大につなげるための各種プロモーションを実施 し、複数の大学に学内の学生に対するプロモーションの協力依頼を行った それらのプロモーションを通して、全国プログラムのWebサイトへの来訪者や申込者の分析を行い、 有効に学生へ訴求する手法について検証する	有効に学生へ訴求する手法 ✓ 本プログラムを知ったきっかけとして最も多かったのが、 約63%の学生が回答した「大学の媒体」 である【A-11】 ✓ 本プログラムを知ったとして、 2番目に多かったのは「Web/SNS」 であった【A-12】 ✓ 大学からの連絡を通じてプログラムの存在を知った学生は多いが、 学生座談会ではオリエンテーションやシラバスへの掲載等の要望が挙がった 【A-11】 ✓ 学生同士の推奨の動機として、 新しい体験やプログラムでの学びや学生間の交流等 が挙がり、阻害要因として 紹介先不在等 が挙がった【A-13, A-14】	ステークホルダーの巻き込み ✓ アントレ教育の認知拡大において、大学のプロモーションの影響力は大きく、 認知拡大を推進していく上で大学との連携は不可欠 であると考えられる ✓ リソースが不足している各大学の状況を踏まえると、 学生にとって身近な各種SNSを用いたオンラインプロモーションは有効 であるといえ、認知の拡大においては重要な手法といえる ✓ 学生間でアントレ教育の推奨を広めるためには、 学生コミュニティの巻き込みが重要 である

- ✓ 今年度の検証結果から得られた解釈・考察に基づき、受講機会の創出におけるアントレ教育の認知拡大に向けた今後の情報発信施策の方向性を整理した

検証項目	解釈・考察				今後の方向性（提案）
① アントレ教育の認知拡大	<p>潜在的なニーズの規模</p> <p>アントレ教育のニーズのポテンシャル</p> <ul style="list-style-type: none">✓ アントレ教育の<u>受講経験がない学生においても、アントレ教育に対するニーズが存在している</u>✓ 潜在的なニーズを持つ学生に対して、<u>継続的にアントレ教育の訴求</u>を行うべきと考えられる		<p>潜在的なニーズの掘り起こし</p>	<p>非認知層の学生への訴求</p>	<ul style="list-style-type: none">✓ 全国の学生に<u>アントレ教育のニーズが一定認められる</u>ことから、アントレ教育を認知していない学生に対しても、<u>認知のきっかけを創出するために、プロモーションを実施</u>し、アントレ教育の認知の醸成を図るべきだと考えられる
	<p>有効に学生へ訴求する手法</p> <p>ステークホルダーの巻き込み</p> <ul style="list-style-type: none">✓ アントレ教育の認知拡大において、大学のプロモーションの影響は大きく、<u>認知拡大を推進していく上で大学との連携は不可欠</u>であると考えられる✓ リソースが不足している各大学の状況を踏まえると、<u>学生にとって身近な各種SNSを用いたオンラインプロモーションは有効</u>であるといえ、認知の拡大においては重要な手法といえる✓ 学生間でアントレ教育の推奨を広めるためには、<u>学生コミュニティの巻き込みが重要</u>である		<p>学生の認知を拡大させる有効な訴求方法</p>	<p>学生像の明確化</p>	<ul style="list-style-type: none">✓ アントレ教育の<u>ターゲットとなる学生像</u>を明確化して発信することによって、効率的な認知の拡大ができると考えられる
				<p>ステークホルダーとの連携</p>	<ul style="list-style-type: none">✓ 学生の多様なニーズを踏まえたプロモーションやコミュニケーションは<u>各地域や各大学と連携</u>していく必要があると考えられる✓ 学生のコミュニティを<u>巻き込んだプロモーション</u>を検討すべきである

- ✓ アントレ教育の関心醸成の検討項目である、参加の動機と学生の関心のあるテーマについて実証的に検証した
- ✓ 心理的なハードルの解消とインセンティブの創出・明確化について解釈・考察を整理した

検証項目	検証方法	検証結果	解釈・考察
② アントレ教育の関心醸成	学生の関心のあるテーマを取り上げ、 当事者意識を醸成させ、受講意欲を高めることができたか 、学生向けのアンケートや座談会等を通して検証する また、プログラムに申し込んだ学生の参加の動機について分析を行い、 どのような学生がアントレ教育のプログラムに対してどのような動機を持って参加したのか を検証する	学生のプログラム参加の動機 <ul style="list-style-type: none"> ✓ 起業に関心を持って参加した学生よりも、起業に関心を持たない学生の方が多く参加した結果となった【A-15】 ✓ SDGsや就職活動や他大学の学生との繋がりを求めて申し込みをした学生が一定数あった【A-15】 	心理的なハードルの解消 <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生の関心を醸成させ、アントレプレナーシップに関する理解を促進させるために、アントレ教育のプログラムの提供価値を学生に伝わりやすい形で発信する必要がある ✓ アントレ教育が掲げる未来社会像を踏まえて、本質的にどのような学生を育てていくべきかについて、検証をする必要がある ✓ 具体的な受講のイメージ、同年代の学生の存在を伝えることで心理的なハードルを下げることができる
		有効な関心醸成の訴求内容 <ul style="list-style-type: none"> ✓ 本プログラムに申し込んだ学生の約83%は高い期待を示しており、その中でも「アントレ教育」に関心を持っている学生が多かった【A-16】 ✓ 2番目に期待していた理由としては、「新しい機会」が多かった【A-16】 	
		<ul style="list-style-type: none"> ✓ 本プログラムの期待値が低い理由として、認知が低いことやプログラムの内容やメリットのイメージが持てないという意見が挙げられた【A-17】 	
		<ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生からアントレ教育のプログラムへの参加を促すインセンティブを明確に訴求すべきと意見が出た【A-16】 	

- ✓ 今年度の検証結果から得られた解釈・考察に基づき、受講機会の創出におけるアントレ教育の関心醸成に向けた今後の情報発信施策の方向性を整理した

検証項目	解釈・考察	今後の方向性（提案）
② アントレ教育の関心醸成	<h3>心理的なハードルの解消</h3> <ul style="list-style-type: none">✓ 学生の関心を醸成させ、アントレプレナーシップに関する理解を促進させるために、アントレ教育のプログラムの提供価値を学生に伝わりやすい形で発信する必要がある✓ アントレ教育が掲げる未来社会像を踏まえて、本質的に<u>どのような学生を育てていくべきか</u>について、検証をする必要がある✓ 具体的な受講のイメージ、同年代の学生の存在を伝えることで心理的なハードルを下げることができる	<h3>関心醸成の方向性</h3> <ul style="list-style-type: none">提供価値の発信 プログラムの提供価値の発信モデル踏襲 諸外国のアントレ教育の事例を参考にし、ターゲットとなる学生像に応じて関心醸成を促すモデルを探索していく必要があると考えられる
	<h3>インセンティブの創出・明確化</h3> <ul style="list-style-type: none">✓ アントレ教育のプログラムへの参加を促すためには、学生が当事者意識を持つような工夫が必要であると考えられる✓ 地域等と連携し学生にとって身近なテーマを扱うことで、学生の自分事としての関心を高める✓ 自大学ではあまり提供されていない内容や機会が得られることや、普段出会うことができない起業家や全国の様々な状況にある学生と交流できる等、インセンティブを明確に示す必要があると考えられる	<h3>学生の当事者意識の醸成</h3> <ul style="list-style-type: none">関係性の認識促進 学生自身との関係性の認識促進ステークホルダーとの連携 学生コミュニティや起業家コミュニティとの交流機会の創出やステークホルダーと連携し、地域課題や企業課題等に取り組むフィールドワーク等の機会の創出等、アントレ教育の関心醸成においては学生への具体的なインセンティブ創出が重要である

- ✓ 学生に対するアントレプレナーシップ教育の認知が低いという課題に対して、各ターゲットに対して全国プログラムのプロモーションを実施し、有効な広報手法の検証を行うとともにアントレプレナーシップ教育の裾野拡大を図った

全国プログラムのプロモーション概要

目的

- ✓ 学生に対するアントレプレナーシップ教育への認知が低い課題に対して、全国プログラムの周知を通して、アントレプレナーシップ教員の裾野を拡大させるための広報を試行する
- ✓ 教職員や大学から学生に対する広報として講義中のアナウンスやメール配信、ポスター掲載等を行うとともに、広く周知を促すためにSNS等を用いたWeb広告を配信し、各種プロモーションの効果を検証する

実施概要

対象		オフライン		オンライン	
		 ポスター	 メール	 SNS広告	 HP/メディア
大学	産学連携				
	学生課				
	大学アントレ教員				
	インキュベーション施設を持つ大学				
学生	学生コミュニティ/学生団体				
	学生個人				
社会全体	保護者				
	学生起業家				
	教育産業事業者				
	人材紹介・派遣業界事業者				
	自治体（学生プログラムを運営している部門）				

- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大の目的に合わせ、全国プログラムの公式HPを作成し、全国の学生を対象にFacebook、Instagram、Googleによる広告によるプロモーションを実施した

全国プログラムのプロモーション詳細（公式HP、Web広告）

公式HP

背景・事業紹介 プログラム内容 期待される成果 募集要項 お問い合わせ

文部科学省令和3年度 産学官連携支援事業委託事業 全国アントレプレナーシップ 人材育成プログラム

世界を変える、自分を変える
一歩踏み出す勇気を手に入れてみませんか？
様々な困難や変化に対し、与えられた環境のみならず自ら
枠を超えて行動を起こし新たな価値を生み出していく精神
(アントレプレナーシップ)の醸成を目指すプログラムで
す。
これからの日本の未来を担う、多くの学生のご参加をお待
ちしています。
＜ 選べる2コース ＞
1. SDGs、地域の社会課題を本気で考えるためのコース（冬季休暇中3日間集
中） 2021年12月27日開校
2. 新しいチャンスを見つけて課題解決やビジネスに活かす具体的な方法論を学
ぶコース（毎週土曜日の8週間） 2021年12月2日開校

ABOUT
背景・事業紹介

新たなウイルスによる感染症の流行や大規模災害、急速なテクノロジー
の進展など、大きな課題や困難、急速な社会環境の変化が生じてい
ます。また、SDGs目標や脱炭素社会の実現、巨大な富の偏在化への
対応等の複雑で一筋縄では解決できないグローバル課題への対応が求
められています。
このような状況下、様々な困難や変化に対し、与えられた環境のみな
らず自ら枠を超えて行動を起こし新たな価値を生み出していく精神
(アントレプレナーシップ)を育むことが重要です。
以上のような背景に踏まえ、文部科学省では、全国の大学生・大学院
生を対象としたオンライン形式でのアントレプレナーシップ人材育成
プログラムを試行的に実施し、全国の大学生・大学院生のアントレ
プレナーシップの醸成を目指しています。

プログラム内容 応募フォーム

Web広告

大学生・ 大学院生向け 全国アントレプレナーシップ 人材育成プログラム

世界を変える、自分を変える
一歩踏み出す勇気を手に入れてみませんか？

文部科学省

選べる2コース

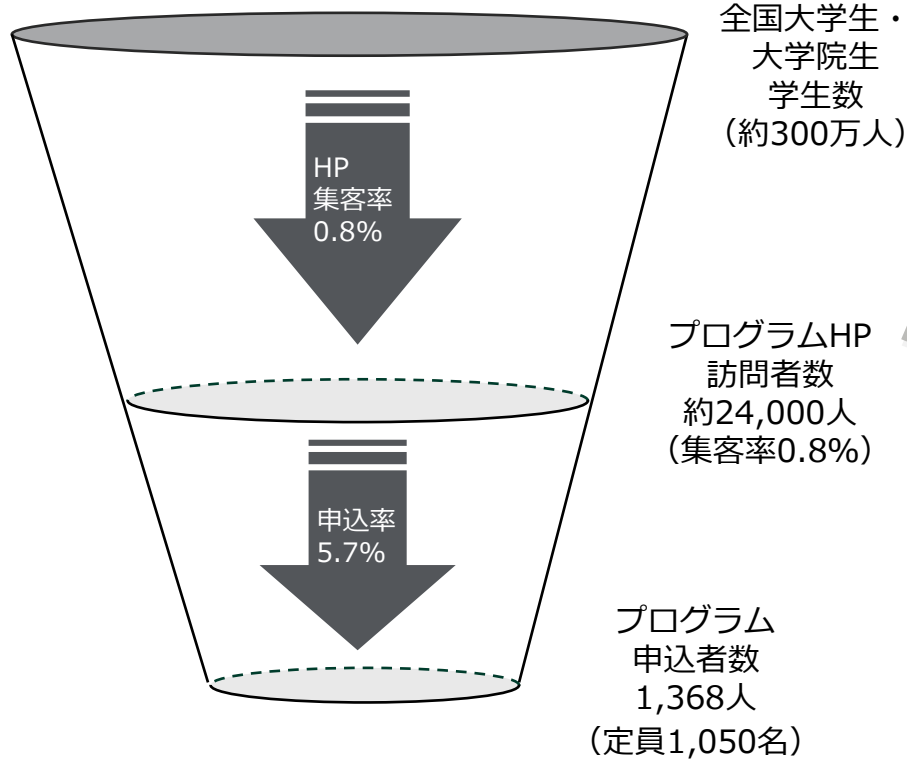
コース 1	3日間集中コース
コース 2	8週間コース

オンライン講義
受講料無料

応募締め切り 11月24日(水)まで

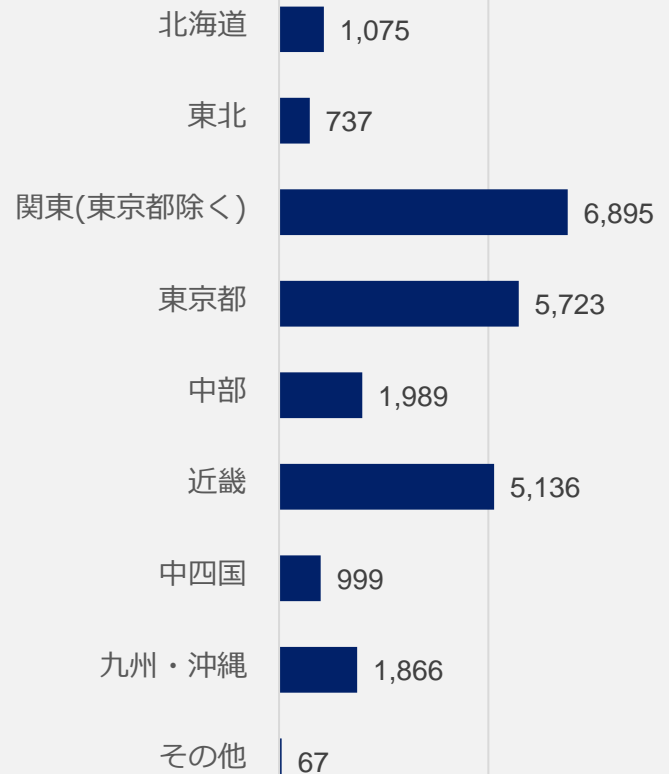
- ✓ アントレプレナーシップ教育の認知を向上させるため、全国各地の大学生にアントレプレナーシップ教育のプログラムの周知を実施し、全国からプログラムHPへの集客ができたことから潜在的なニーズを確認することができた

全国の大学生のアントレ教育に関する認知向上について



【参考】
「アントレプレナーシップ」に関連する
月間検案件数について
月間平均検索ボリューム：約2万回※

サイト流入者の所在地 (N=24,487)



※ ・日本/日本語での検索数 (Google検索)

・「アントレプレナーシップ」関連キーワード

・実数は出せないため、推定値

Nは回答者数

✓ プログラムを周知し、アントレプレナーシップ教育に対する認知のきっかけを創出するためには「大学の媒体」が重要な手段の1つである

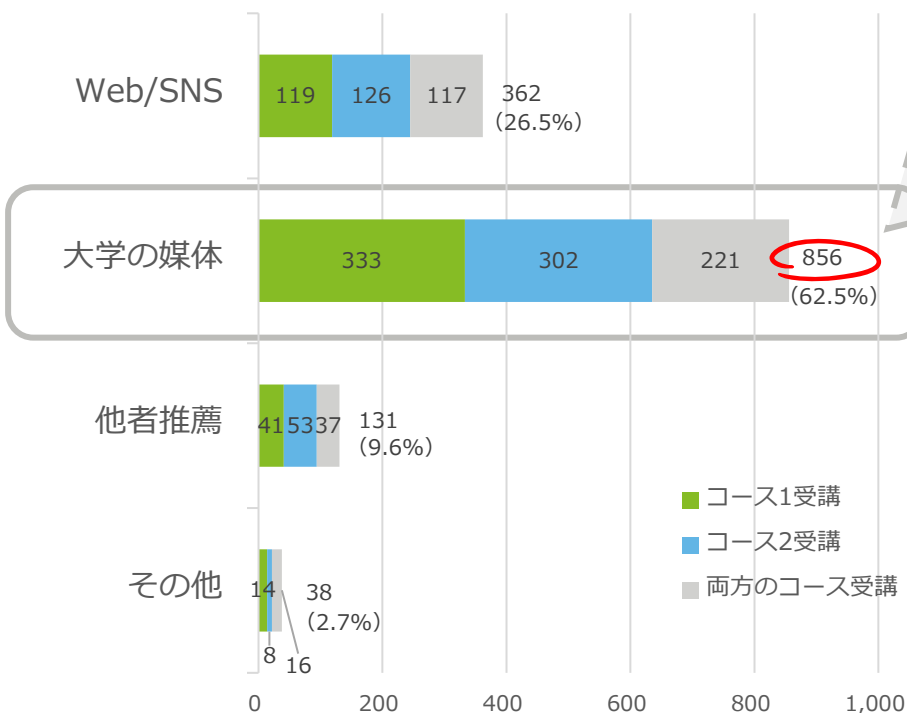
プログラムを知ったきっかけに関する学生向けのアンケートからの結果 (1/2)

プログラム申込時アンケート (N=1,368)

「当プログラムを知ったきっかけを教えてください」

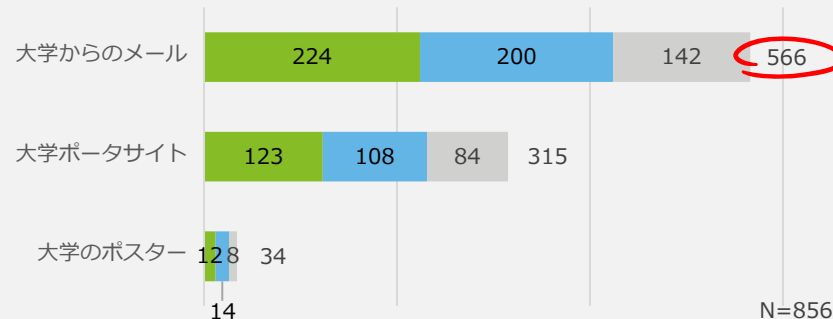
※複数回答可であるため重複有

※各分類で人数カウントをしている



プログラムを知ったきっかけが「大学の媒体」のまとめ

※複数回答可であるため重複有



受講者

■ 大学のメールを通じてプログラムを知ったが、大学のメールを見ない学生も多くいるため、オリエンテーションやシラバスにもプログラム内容を記載してほしい



教職員

■ 学長による積極的な発信が必要である
■ 学内連絡システムによる発信は有効的である
■ アントレに関するイベント、就職活動や地域課題解決に結びつけたイベントを開催することにより、学生にリーチできるとよい

- ✓ プログラムを周知し、アントレプレナーシップ教育に対する認知のきっかけを創出するためには「Web/SNS」による広報が重要な手段の1つである

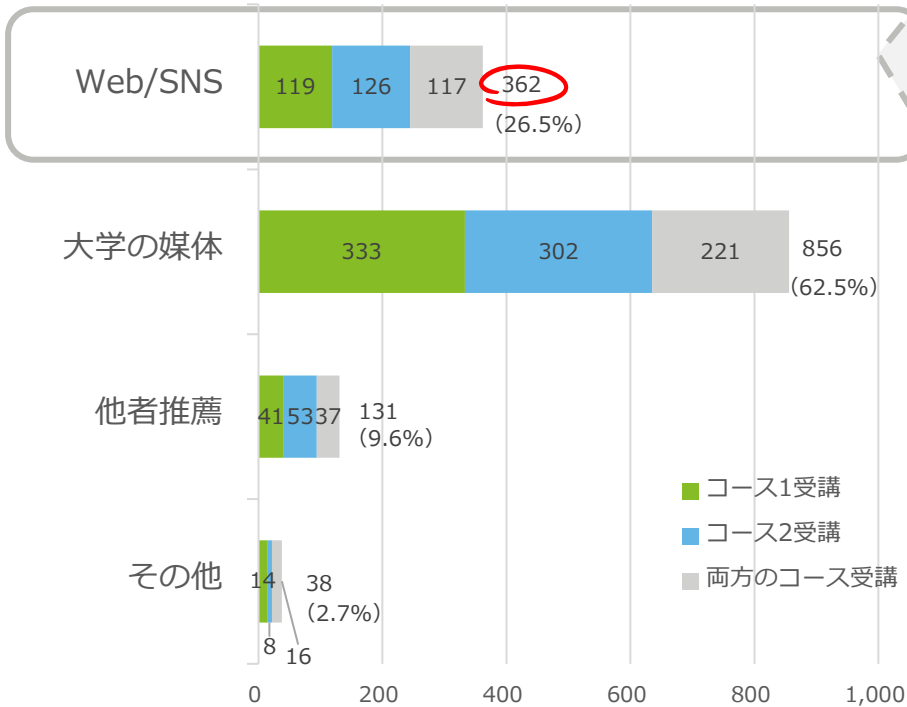
プログラムを知ったきっかけに関する学生向けのアンケートからの結果（2/2）

プログラム申込時アンケート（N=1,368）

「当プログラムを知ったきっかけを教えてください」

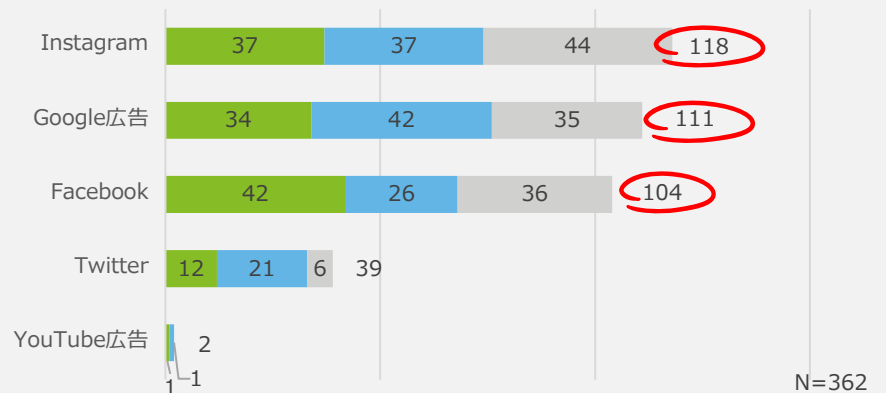
※複数回答可であるため重複有

※各分類で人数カウントをしている



プログラムを知ったきっかけが「Web/SNS」のまとめ

※複数回答可であるため重複有



受講者

- グループの中では、Instagram, Facebook等のSNSを通じて参加した受講者が多い
- プログラムのHPを見て参加した



教職員

- 学部ごとのSNS、大学内のSlack等での発信も有効である

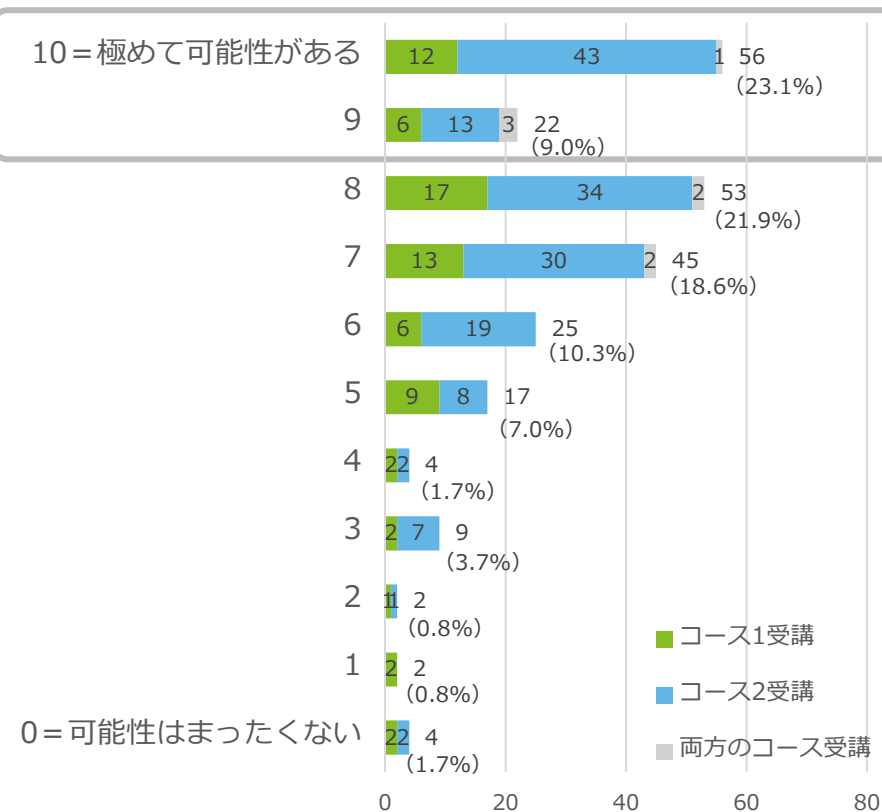
N=362

- ✓ アントレプレナーシップ教育の認知拡大において、学生同士の口コミは重要な手段の1つであり、プログラムの推奨度が高い学生は新しい体験ができたことやプログラムで学べることや学生と交流できたことが動機になっている

プログラムの推奨に関する学生向けのアンケートからの結果 (1/2)

受講終了後学生向けアンケート (N=242)

「本プログラムを友人/知人に勧める可能性はありますか」



プログラムの推奨度が高いアンケートまとめ

■ 新しい体験ができた

- ✓ 自大学では体験できない講義が受けられた
- ✓ 起業家講演が面白かった

■ プログラムから学びを得られた

- ✓ 課題解決の汎用的な手法を勉強できた
- ✓ ビジネススキルに関する実践的な手法を勉強できた

■ 多くの様々な学生と交流できた

- ✓ 他大学、他学部、他学年の学生とコミュニケーションでき、気づきを得た



受講者

- プログラムのコンテンツが面白く、知り合いや後輩に薦めたい
- 他大学の学生と交流できるためぜひ薦めたい
- 実践的手法を勉強できるため、自大学で同じくアントレ教育に関心のある学生にぜひ薦めたい

※ 無効3票を除く

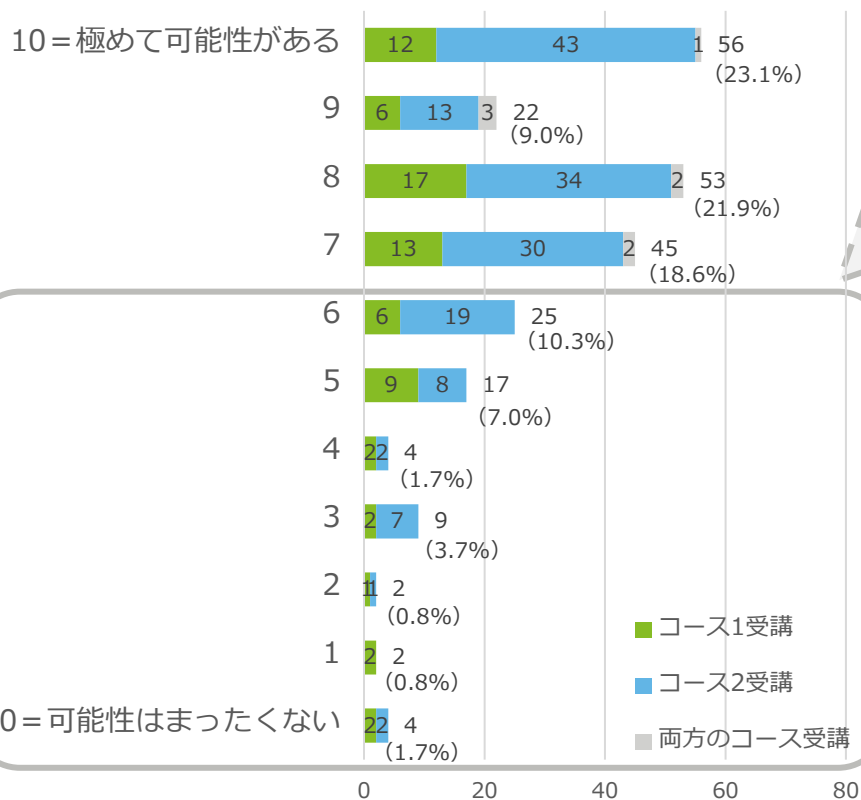
Nは回答者数

- ✓ 一方で、他者への推奨を阻害する要因として、アントレプレナーシップ教育のプログラムを紹介したいと思える友人/知人が周りにいないことやプログラム自体への不満等が挙げられた

プログラムの推奨に関する学生向けのアンケートからの結果 (2/2)

受講終了後学生向けアンケート (N=242)

「本プログラムを友人/知人に勧める可能性はありますか」



プログラムの推奨度が低いアンケートまとめ

■ 紹介先の不在

- ✓ アントレプレナーシップ教育のプログラムに興味を持ちそうな友人が周りにいない
- ✓ 友人に紹介することによって、意識高い人だと思われたくない

■ プログラムへの不満

- ✓ 試験期間や就活期間と重なったため、負担が多かった
- ✓ 内容が難しく、途中からついていけなかった
- ✓ ツールが使いづらかった



受講者

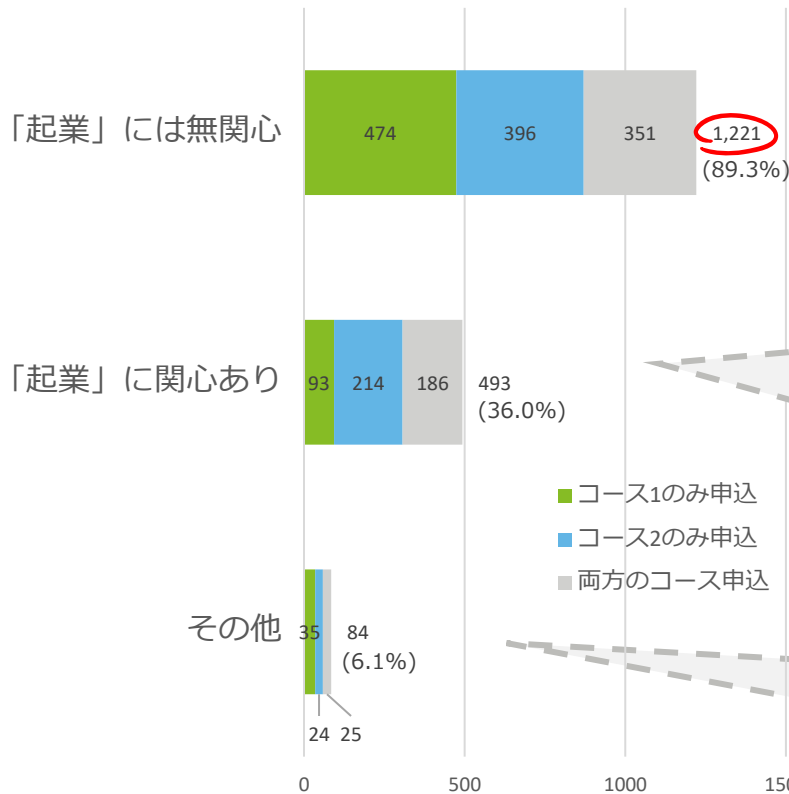
- プログラム自体はよかったが、アントレプレナーシップ教育に興味を持ちそうな友人が周りにいない
- プログラムの内容が難しく他人に薦めにくい
- ツールが使いづらく、他の学生に薦めにくい
- 課題が多く、正課との両立が難しいため、他の学生に薦めにくい

※ 無効3票を除く

✓ プログラムに申し込んだ学生の多くは「起業」には無関心の選択肢を回答しており、起業の目的意識をもって参加した学生は少ないといえ、SGDsや就職活動や他大学の学生との交流を期待して申し込みをしている学生が多いといえる

プログラムへの参加動機に関する学生向けのアンケートからの結果

申込時学生向けアンケート (N=1,368)
「当プログラムを志望された理由を教えてください」
※複数回答可であるため重複有
※各分類で人数カウントをしている



「起業」には無関心の内訳

※複数回答可であるため重複有

講義のみならず、実践的、体験型の内容もあり、面白そう	283	247	271	801
プログラムの講師の話聞いてみたい	260	224	220	704
起業の考えがないが、課題発見や課題解決の手法を学びたい	253	147	145	545
起業の考えがないが、自分の将来に役立つそう	210	156	126	492
起業の考えがないが、起業はどうか知りたい	78	100	76	254
起業の考えがないが、課題解決の仲間を作りたい	89	62	64	215

N=1,221

「起業」に関心ありの内訳

※複数回答可であるため重複有

将来いつかに起業したい/直近起業予定があるので、起業関連の知識を身に付けたい	87	200	174	461
起業する予定で、プログラムを通じて起業仲間を作りたい	52	66	133	151
起業する予定で、授業を通じて講師のフィードバックを得たい	15	54	56	122

N=493

その他の回答例

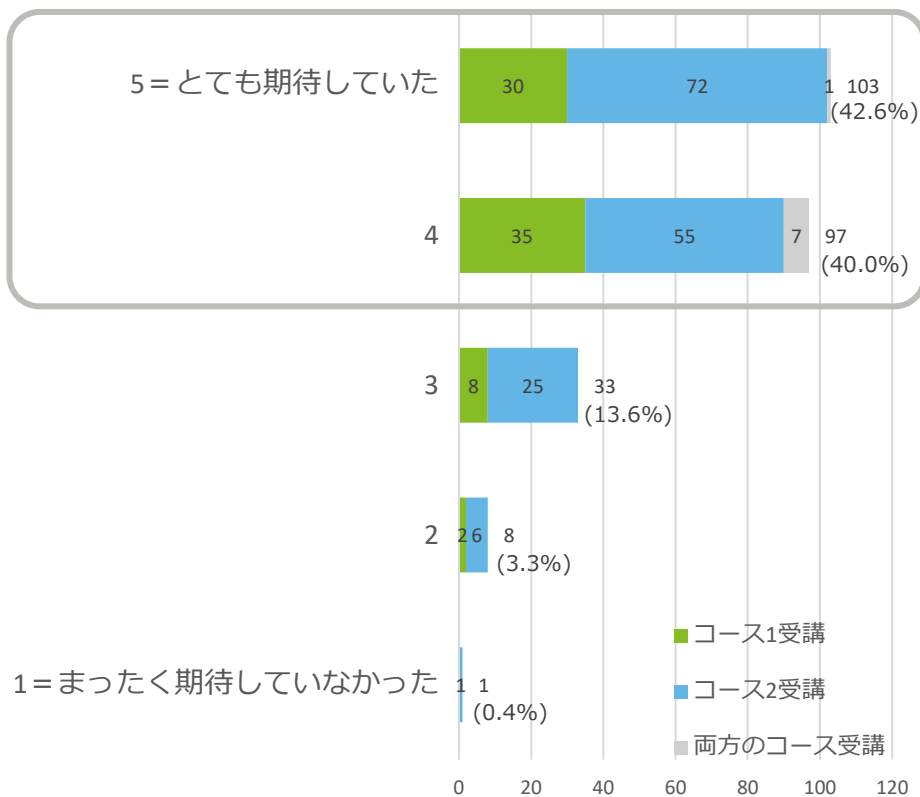
受講者

- SDGsについて学びたい
- 就職活動や入社後の仕事に役立つ経験を得たい
- 新しいことにチャレンジしたい
- 大学生同士の繋がりが、学びに興味があった
- ボランティア団体に所属しており、活動に役立てたい

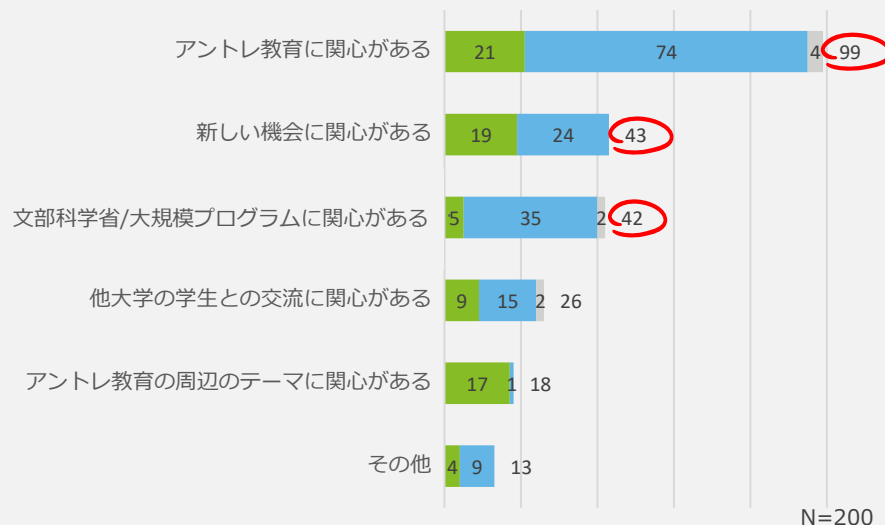
- ✓ 受講者の期待値が高い理由として、アンケートの結果では、アントレ教育に興味がある、新しい機会に関心がある、文部科学省/大規模プログラムに関心がある等の回答があり、座談会では全国の大学生との交流や受講終了証の発行等が挙げられた

プログラムへの期待値に関する学生向けアンケートからの結果 (1/2)

受講終了後学生向けアンケート (N=242)
「当プログラムにどの程度期待していましたか」



プログラムへの期待値が高い項目まとめ ※自由回答であるため下記選択肢内での重複有



受講者

- 普段あまり関わりのない分野について学び、挑戦できる
- 起業について興味があり、実践的で有意義な学びができる
- 全国の大学生と交流できる
- 文部科学省主催であるため安心できる
- 受講終了証の発行がある

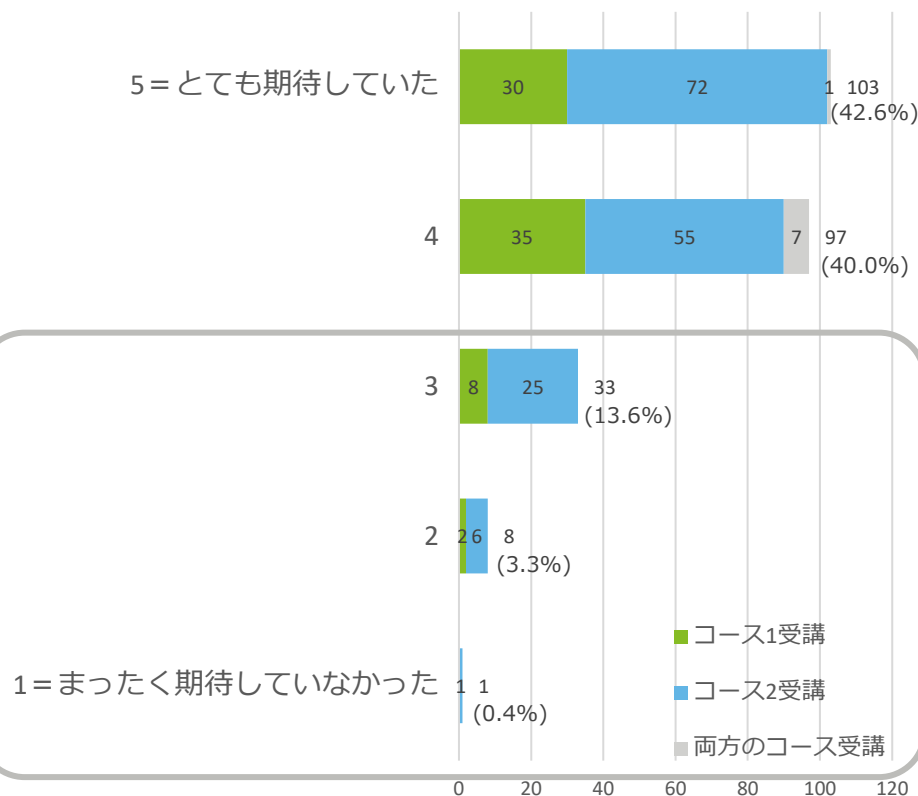
N=200

Nは回答者数

- ✓ 受講者の期待値が低い理由として、アントレプレナーシップに対する認知がないことやプログラムの具体的なイメージが湧かないことや得られる学びやその活用方法が不明確であったこと等が挙げられた

プログラムへの期待値に関する学生向けアンケートからの結果 (2/2)

受講終了後学生向けアンケート (N=242)
「当プログラムにどの程度期待していましたか」



プログラムへの期待値が低い項目まとめ

■ アントレプレナーシップに対する認知がない

- ✓ アントレプレナーシップという言葉自体を初めて聞いたため、どのような内容になるかイメージできなかった
- ✓ インターネットで「アントレプレナーシップ」を検索すると、「起業」と出てきたので、自分にはあまり関係がないと思った

■ プログラムの具体的なイメージが湧かない

- ✓ プログラムの難易度が高そうで自信がなかった
- ✓ プログラムを受けたら、起業を勧められるのかと思ひ、不安に感じた
- ✓ 自分と同じような人がいるかわからず心配だった

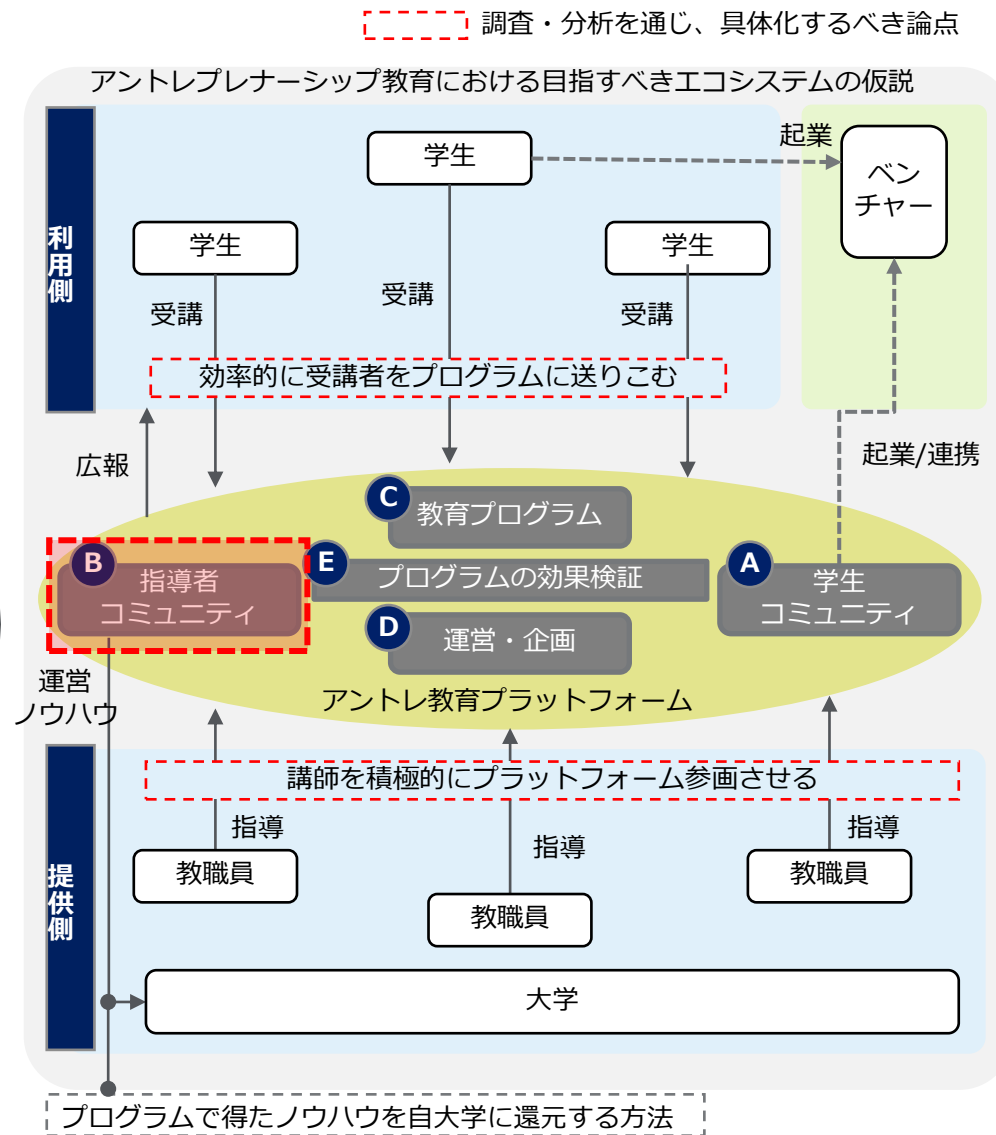
■ プログラムで得られる成果、活用方法が分からない

- ✓ 将来起業の予定がない中で、何を得られるのかイメージがつかなかった
- ✓ どの程度実用的な経験を得られるか不明だった
- ✓ プログラムでの学びをどのように活用できるか不明だった

【第3節】 (B) 教職員間の連携に関する検討

✓ 本節では(B)教職員間の連携の論点の初期仮説を検証し、アントレプレナーシップ教育における目指すべきエコシステムの検証を行う

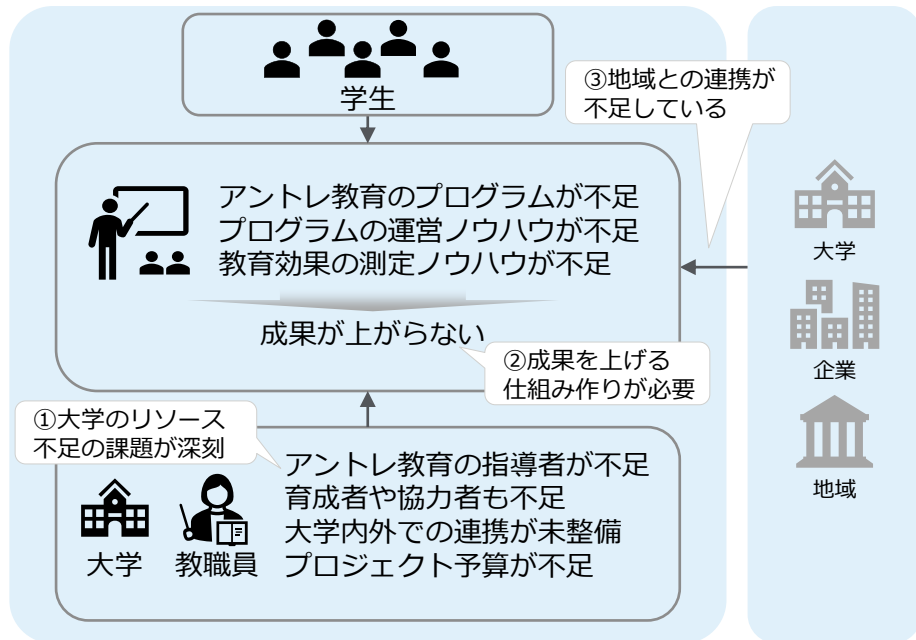
分類	検証すべき論点	初期仮説
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営	C 教育的価値の高いプログラムの開発 D 円滑かつ効率的な運営手法の確立
	PDCAサイクルによる検証	E プログラムの効果測定と改善方法の確立



- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大に向けた、教職員間の連携には、教職員プラットフォームの構築と、教職員の学びの場の創出やステークホルダーとの連携による教職員コミュニティの形成が重要である

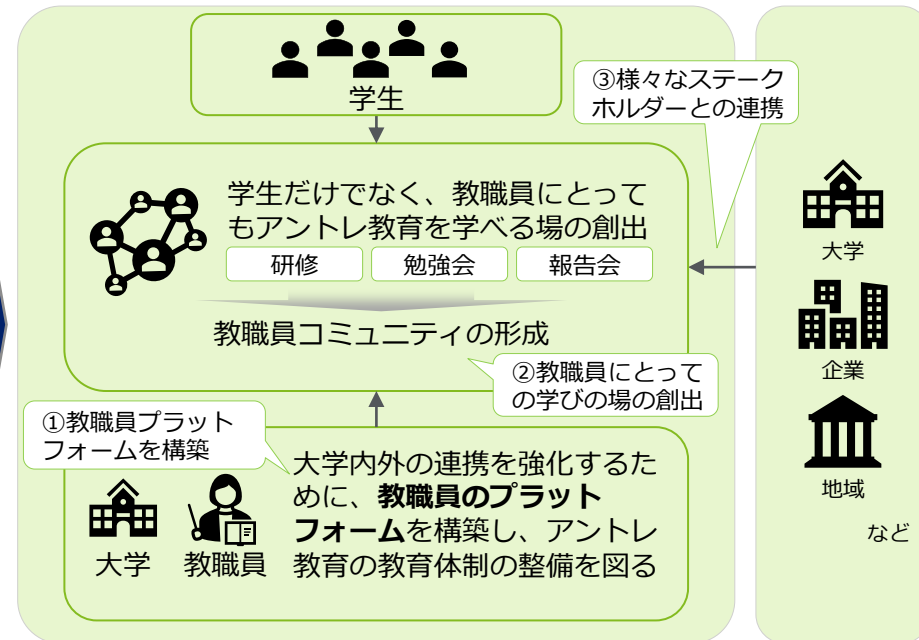
現状

大学のリソース不足により、学生に対して十分なアントレ教育の受講の機会を創出することができておらず、大学間・地域との連携が必要



目指す姿

教職員間の連携を促進するために、教職員のプラットフォームを構築し、アントレ教育を学べる場を創出するためにコミュニティの形成が重要である



今後の方向性

各大学

- ① 教職員間の連携を強化するために、教職員が交流し合える場としてオンラインプラットフォームを構築
- ② 教職員にとっての学びの場を創出させるためにコミュニティの形成
- ③ 様々なステークホルダーとの連携によるノウハウの蓄積、教職員の参加の動機付け

ステークホルダー

- ③ 下記のようなステークホルダーと連携し、持続性のある有効な学びの場を創出する
 - ✓ 自治体：地域の社会課題の観点を取り入れるために、教職員コミュニティと連携
 - ✓ 民間企業：地域ごとの特性を踏まえたビジネスの観点を取り入れるために、教職員コミュニティと連携

- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大に向けた教職員間の連携には、指導者の参加を促し、活発な交流を実現させるための運営が求められるため、全国プログラムを通じて交流の場を設けた

昨年度の調査結果

アントレ教育の課題

リソース不足の課題

- ✓ 各大学でアントレプレナーシップ教育を実施していくためのリソースが不足している

連携の課題

- ✓ 他大学との連携は多くの大学で不十分な状況であり、指導者や支援者のノウハウを共有するための仕組みが存在しない

検討すべき事項

オンラインでのリソース提供

- ✓ 大学や地域内で補いきれないリソースは、オンラインネットワークを活用し、外部との連携を推進し、不足リソースを確保する取り組みが必要ではないか

教職員コミュニティの形成

- ✓ アントレ教育に関する教職員のコミュニティを形成し、参加教職員が講義のノウハウを自大学に還元できる取組が必要ではないか

今年度の調査内容

検証内容

教職員の学びの場の創出

アントレプレナーシップの醸成段階に係るプログラムを設計・開発し、教職員に参加の機会を設け、教職員の反応を検証する

教職員の交流の場の創出

本事業にて設計・開発したプログラムを通じて教職員が交流できる場を設けて、教職員がノウハウを自大学に還元できるか、反応を検証する

大学におけるアントレ教育の提供体制が未整備

- ✓ (B)教職員間の連携の検討項目である教職員の学びの場と交流の場の創出について、本プログラムを通して実証的に検証した
- ✓ 開発したプログラムの提供を通して教職員の参加やコミュニティの巻き込みについて解釈・考察を整理した

検証項目	検証方法	検証結果	解釈・考察
<p>教職員の学びの場の創出</p>	<p>アントレプレナーシップの醸成段階に係るプログラムを設計・開発し、<u>教職員に参加の機会を設け、アンケートや座談会を通して、教職員の反応を検証する</u></p>	<p>教職員の参加状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 文部科学省の呼びかけにより全国の教職員約100名のプログラム傍聴の申込をいただいた【B-6】 ✓ <u>様々な学部、職歴、所属</u>の教職員に参加いただいた【B-6】 	<p>教職員の参加状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生と同様にアントレプレナーシップの醸成段階に係るプログラムに対する<u>教職員の潜在的な関心は高い</u> ✓ <u>教職員が参加可能なプログラムへのニーズが高い</u>と考えられる
<p>教職員間の交流の場の創出</p>	<p>本事業にて設計・開発したプログラムを通じて<u>教職員が交流できる場をオンライン上で設けて、アンケートや座談会を通して、教職員の反応を検証する</u></p>	<p>教職員の交流状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生と同様のツールを使用し交流を促したが、<u>教職員のコミュニティは活性化されなかった</u>【B-7】 ✓ 一方で、教職員からは<u>講義のノウハウを自大学に還元できる</u>とフィードバックをいただいた【B-7】 	<p>教職員の交流状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 教職員間の連携を促し、活性化させるためには、<u>教職員にとってもアントレ教育を学ぶ場の創出</u>が重要であると考えられる ✓ 教職員間で継続的な連携が取れる<u>プラットフォームの形成</u>が必要ではないか ✓ プラットフォームの参加を促すためには、<u>各種ステークホルダーとの連携</u>が重要であると考えられる

✓ 今年度の検証結果から得られた解釈・考察に基づき、教職員の学び、交流の場の今後の方向性を整理した

検証項目	解釈・考察		今後の方向性（提案）
教職員の学びの場の創出	<p data-bbox="426 315 685 347">教職員の参加状況</p> <ul data-bbox="277 465 820 704" style="list-style-type: none">✓ 学生と同様にアントレプレナーシップの醸成段階に係るプログラムに対する教職員の潜在的な関心は高い✓ 教職員が参加可能なプログラムへのニーズが高いと考えられる	教職員の学びの場の創出	<ul data-bbox="1210 422 1951 708" style="list-style-type: none">✓ 学生同様に教職員にとってもアントレ教育の学びの場に対するニーズは高く、研修や勉強会や報告会等を通じた教職員の学びの場を作ることが有効であると考えられる✓ 地域や企業等の各種ステークホルダーと連携して産業界の視点を取り入れることにより、持続性のある有効な学びの場を創出することができる
教職員間の交流の場の創出	<p data-bbox="426 848 685 879">教職員間の交流状況</p> <ul data-bbox="277 941 820 1315" style="list-style-type: none">✓ 教職員間の連携を促し、活性化させるためには、教職員にとってもアントレ教育を学べる場の創出が重要であると考えられる✓ 教職員間で継続的な連携が取れるプラットフォームの形成が必要ではないか✓ プラットフォームの参加を促すためには、各種ステークホルダーとの連携が重要であると考えられる	教職員間の交流の場の確保	<ul data-bbox="1210 1029 1951 1179" style="list-style-type: none">✓ オフラインの交流の機会とオンラインのつながりを継続するプラットフォーム（ツール）を設け、全国の教職員が交流できる場が必要であると考えられる

- ✓ オンライン形式で全国の教職員を対象に説明会を実施し、参加を促したところ、全国から様々な教職員が当プログラムに参加した

プログラムへの教職員の参加状況

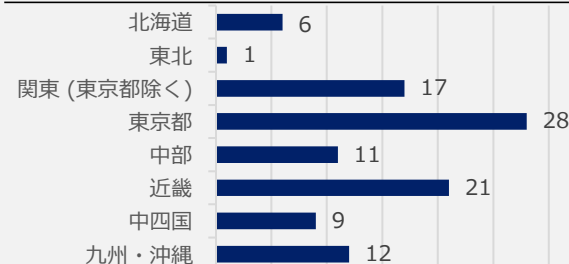
■ 当プログラムに関する説明会への参加者は**187名**

- ✓ オンライン形式で説明会を2回実施した
- ✓ 第1回目：2021年11月2日（火）17:30-18:30
- ✓ 第2回目：2021年11月10日（水）17:30-18:30

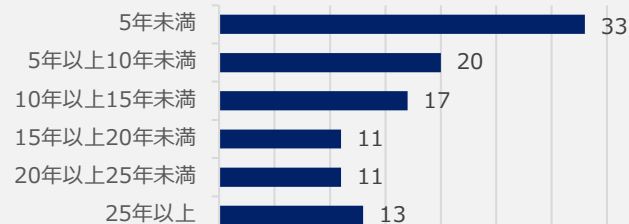
■ 当プログラムへの申込者は**105名**

- ✓ 全国各地の教職員が参加した
- ✓ 様々な職歴の教職員が参加した
- ✓ 研究・産学連携部に所属している参加者が最も多く、大学の学部にも所属している教職員も関心を示していることがわかった

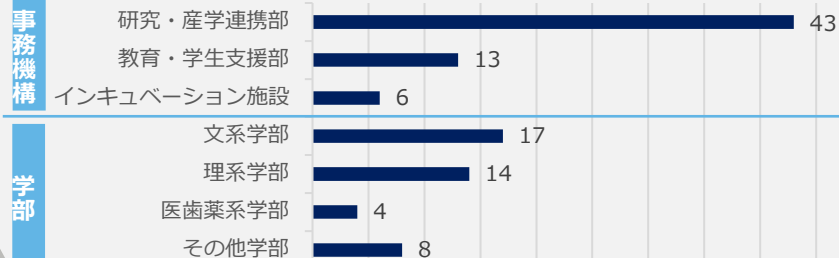
当プログラム申込者教職員 エリア別 (N=105)



当プログラム申込者教職員 職歴別 (N=105)



当プログラム申込者教職員 所属別 (N=105)



- ✓ 本プログラム期間中に参加教職員による交流は見られなかったが、教職員座談会ではオンラインツールの活用やプログラム設計の活用やグループワークの活用に関するフィードバックをいただいた

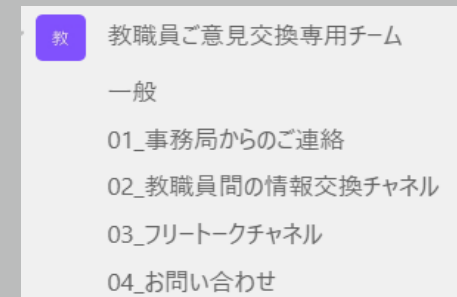
教職員の交流を促す取組と得たフィードバック

取組

- オンラインプログラムの円滑な運営のために、各種**マニュアル**を作成し、教職員に事前に配布した



- 教職員間の**交流の場**を設け、専用のチームを作成したが、教職員による投稿件数は**0件**だった



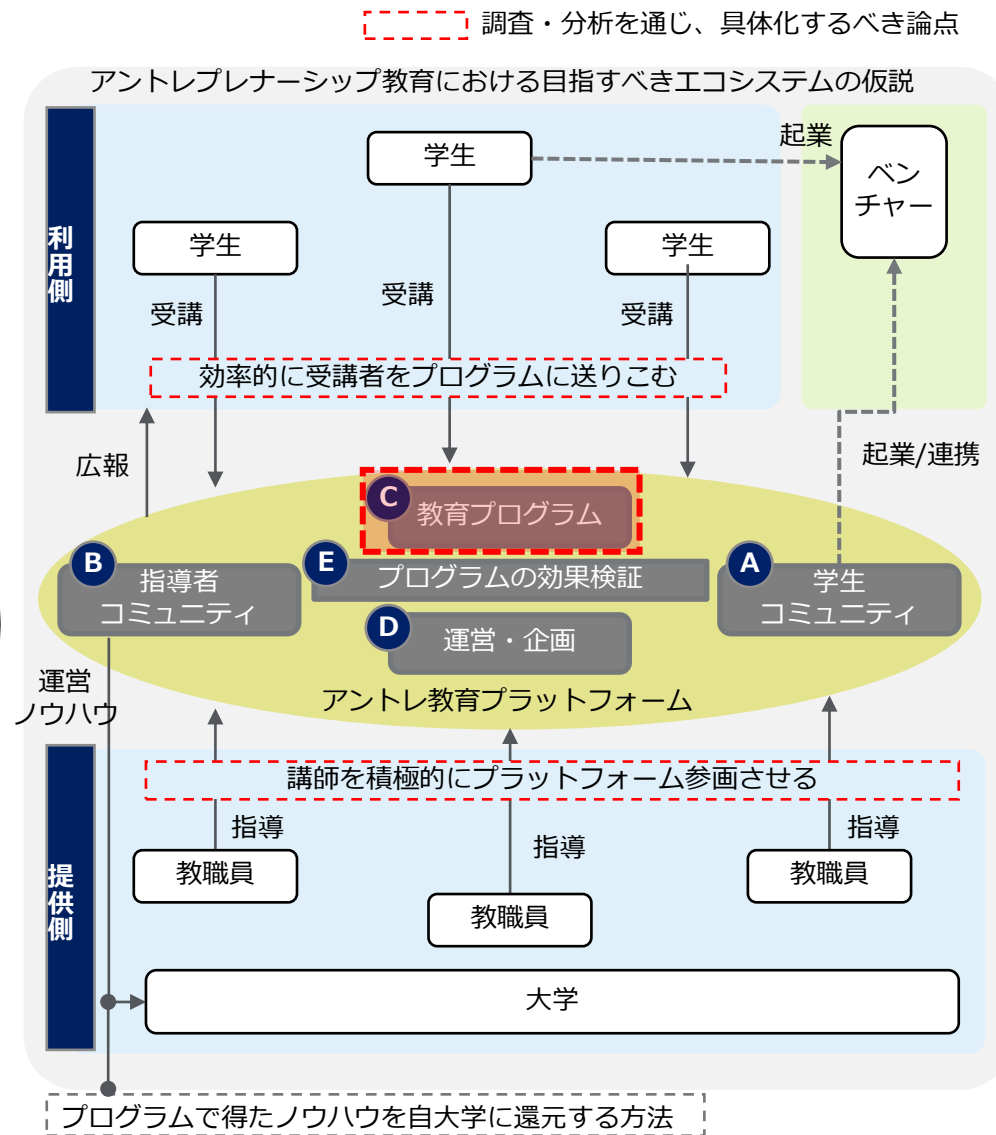
フィードバック

- オンラインツールの活用について
 - ✓ 本プログラムで使っていたツールを実際に自大学で利用したところ、学生のグループワークがはかどり、現業務に早速活かすことができた
 - ✓ ツールに不慣れな学生にはアイスブレイク段階での工夫が必要だと考える
- プログラム設計の活用について
 - ✓ 自大学の講義において、今回のような**体系的な講義設計を取り入れたい**と考える
 - ✓ 今回のプログラムに限らず、**持続的なプログラム**を学生には提供すべきだと考える
- グループワーク形式の活用について
 - ✓ 学生が多いプログラムであればあるほど学生への**ファシリテートの工夫**が必要だと考える
 - ✓ チーム組成において最適な**学生の組み合わせ**を考慮すべきである
 - ✓ 学生同士のつながりをサポートするために**大学でのリアルな交流と学びの機会の提供**が必要である

【第4節】 (C) プログラムの開発に関する検討

✓ 本節では(C)プログラムの開発の論点の初期仮説を検証し、アントレプレナーシップ教育における目指すべきエコシステムの検証を行う

分類	検証すべき論点	初期仮説
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営	C 教育的価値の高いプログラムの開発 D 円滑かつ効率的な運営手法の確立
	PDCAサイクルによる検証	E プログラムの効果測定と改善方法の確立



✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、プログラムの開発には、汎用性の高い全国プログラムの開発、地域特性を踏まえたプログラムの活用、学生の関心醸成につながるステークホルダーを巻き込んだプログラム開発が重要である

現状

アントレ教育のプログラムが全体的に不足している背景には、大学内での連携や大学間での連携がされていない点が挙げられる

プログラムの不足



アントレ教育
実施大学率 **27%**



ステージ毎の
アントレ教育
プログラムの
整備状況

全プログラム
のうち実践編
の割合
7%



①アントレ
教育のプロ
グラムが全
体的に不足

全国プログラムの開発・実施

目指す姿

汎用性の高い全国プログラムを開発し、全国の学生に展開するとともに、各地域、大学での活用やステークホルダーの巻き込みが重要である

全国プログラムの開発
アントレ教育の導入部分の
パッケージ化



①汎用性の高い
オンライン
プログラムを
開発し、全国
の学生に展開

連携の不足



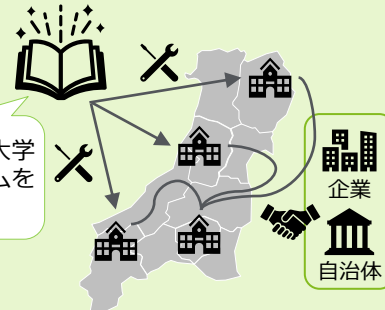
②プログラム開発における
学内での連携がされていない



③大学間での連携がされて
いない

ステークホルダーと連携

②各地域、大学
でプログラムを
活用



実践の機会
の創出により
学生の関心醸成

③各地域のステーク
ホルダーとの連携

今後の方向性

各大学

- ① アントレ教育の初期フェーズ（動機付け・意識醸成段階、コンピテンシーの形成段階）においては、汎用性の高い全国プログラムを開発し、全国の学生に展開
- ② アントレ教育の実践フェーズ（社会実践段階）においては、全国プログラムを各地域や各大学にて活用
- ③ 地域のステークホルダーを巻き込み、フィールドワーク等の実践の機会を創出

ステークホルダー

- ③ 下記のようなステークホルダーと連携し、学生の関心を醸成させる
 - ✓ 自治体：社会課題解決につながるフィールドワーク等の創出
 - ✓ 民間企業：企業課題解決につながる実践の機会の創出

- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、(C)プログラムの開発の課題には「プログラムの不足」と「連携の不足」が挙げられ、アントレプレナーシップ教育の裾野拡大に資するプログラムの開発を通してそれらの課題の解消を図った

昨年度の調査結果

今年度の調査内容

アントレ教育の課題

検証すべき事項

検証内容

プログラムの不足

- ✓ アントレプレナーシップ教育実施大学率は**27%**
- ✓ アントレプレナーシップ教育の導入部分である動機付けや意識醸成のプログラムや社会実践のプログラムが**不足**しており、体系的なプログラムの開発が求められている
- ✓ 大人数の受講者に対して提案でき、教育効果の高いプログラムが不足している

- ✓ 学生のニーズを踏まえながら、アントレプレナーシップ教育の裾野拡大に資する**全国の学生に提供が可能なプログラム**を実証的に開発し、全国の学生に受講機会を提供するべきではないか

プログラムの開発

- ✓ アントレ教育のプログラムの不足の状況を踏まえ、**全国の学生に提供が可能なプログラムの開発**が必要である
- ✓ 全国プログラムと**各大学が連携することにより効果的なプログラムの開発**につなげていく必要がある

連携の不足

- ✓ アントレプレナーシップ教育のプログラムが不足していることから**大学内外での連携や協力体制**の整備をする必要があるが、多くの大学が**実施できていない**

- ✓ 本事業にて開発したオンラインプログラムの内容が**ノウハウとして蓄積され、全国プログラムとの連携を通して、各大学で還元されるように促進**させていくべきではないか

醸成段階のプログラムの設計と開発

アントレ教育の裾野拡大にとって重要なアントレプレナーシップの醸成段階に係る**プログラムを設計・開発**し、学生に提供した際の学生の反応を検証する

汎用性の高いプログラムの各大学への展開

本事業にて設計・開発したプログラムの内容が**各大学や各地域で活用が可能か**を検証する

- ✓ (C)プログラムの開発の2つの検討項目については、開発したプログラムの提供を通して学生と教職員の双方の反応を検証した
- ✓ 学生コミュニティの巻き込み、地域との連携、学生と教職員へのプログラムの展開について解釈・考察を整理した

検証項目	検証方法	検証結果	解釈・考察
醸成段階のプログラムの設計と開発	アントレプレナーシップ教育の設計・開発の知見を有する先生の協力を得て、アントレプレナーシップ教育の醸成に係るプログラムを設計・開発し、学生に提供した上で、 <u>学生の活動状況を分析し、アンケートや座談会等</u> を通して、学生の反応を検証する	<p>学生の当事者意識の醸成</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 両プログラム共に<u>初回講義の参加率が低く、平均離脱率は約67%</u>であった【C-9】 ✓ 講義の回を重ねるごとに参加者が減少し、短期集中型のコース1よりも8週間実施したコース2の方が離脱率は高かった【C-9】 <p>学生の満足度</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラムを受講した学生の満足度は高く、アンケート回答者の<u>80%以上</u>が高評価をつけている【C-10】 ✓ 高い満足度の理由として最も多く挙げられたのは<u>プログラムのコンテンツ</u>についてであった【C-11】 ✓ 高い満足度の理由として2番目に多かったのは<u>交流</u>であり、「今後も交流を続けたい」等の意見が出た【C-10, C-11】 	<p>学生コミュニティの巻き込み</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 離脱を防ぐために学生の<u>関心や当事者意識を高める工夫</u>が必要である ✓ 学生コミュニティを巻き込み、<u>交流を活性化させる</u>ことは重要である ✓ 学生の関心を高めるために、プログラムの<u>設計者として学生を巻き込む</u>ことも考えられる <p>地域との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生が自分事で捉えやすい地元の<u>地域課題をテーマとしたフィールドワーク</u>や<u>地元企業との連携を推進</u>することで<u>学生の関心を高めるべき</u>と考えられる <p>プログラムの展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ <u>汎用性が高く、大人数で様々な属性の学生が受講できる</u>オンラインプログラムは裾野拡大に有用であり、全国の学生に向け<u>開発すべき</u>である
汎用性の高いプログラムの各大学への展開	開発されたプログラムを教職員に傍聴してもらい、プログラム内容が自大学で還元されるかについて <u>アンケートや座談会</u> を通して、教職員の反応を検証する	<p>各大学への展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 傍聴した教職員からはプログラムの精度が高いため、<u>自大学のプログラムへの取り込みについて意欲的</u>な意見が出た【C-12】 ✓ <u>全国プログラムをベースとし、地域特性や各大学の事情を踏まえたカスタマイズ</u>も必要であるという意見が出てきた【C-12】 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ <u>全国プログラムと各大学が連携し、それぞれの事情を踏まえたカスタマイズによる、多様なプログラムの各地域・各大学での開発を検討</u>していく必要がある

- ✓ 今年度の検証結果から得られた解釈・考察に基づき、プログラムの開発、機会の提供、各ステークホルダーとして大学、学生コミュニティ、地域のステークホルダーの巻き込みにおける今後の方向性を整理した

検証項目	解釈・考察	今後の方向性（提案）
醸成段階のプログラムの設計と開発	学生コミュニティの巻き込み <ul style="list-style-type: none">✓ 離脱を防ぐために学生の<u>関心や当事者意識を高める工夫</u>が必要である✓ 学生コミュニティを巻き込み、<u>交流を活性化させる</u>ことは重要である✓ 学生の関心を高めるために、プログラムの<u>設計者として学生を巻き込む</u>ことも考えられる	プログラムの開発 <ul style="list-style-type: none">✓ アントレプレナーシップの裾野拡大に有用である<u>汎用性の高い醸成段階のプログラムの開発を今後も継続</u>すべきである
	地域との連携 <ul style="list-style-type: none">✓ 学生が自分事で捉えやすい地元の<u>地域課題をテーマとしたフィールドワークや地元企業との連携を推進</u>することで学生の<u>関心を高めるべき</u>と考えられる	機会の提供 <ul style="list-style-type: none">✓ アントレプレナーシップの裾野拡大における醸成段階は、<u>公共性が高く</u>、特に地方では受講機会やノウハウ、リソースが不足しているため、<u>継続して全国規模でプログラムの実施、展開をすべき</u>である
	プログラムの展開 <ul style="list-style-type: none">✓ <u>汎用性が高く、大人数で様々な属性の学生が受講できる</u>オンラインプログラムは裾野拡大に有用であり、全国の学生に向け<u>開発すべき</u>である	大学 <ul style="list-style-type: none">✓ 汎用性の高い全国プログラムを開発し、<u>各大学に還元させるために各大学と連携</u>をする必要がある✓ アントレプレナーシップ教育のプログラムの裾野拡大のためには<u>大学全体での協力</u>が必要である✓ <u>各大学は地域の民間企業等と連携</u>して、全国プログラムを活用するべきであると考えられる
汎用性の高いプログラムの各大学への展開	<ul style="list-style-type: none">✓ <u>全国プログラムと各大学が連携</u>し、それぞれの事情を踏まえたカスタマイズによる、<u>多様なプログラムの各地域・各大学での開発を検討</u>していく必要がある	学生コミュニティ <ul style="list-style-type: none">✓ プログラムの開発においても、<u>学生コミュニティと連携し、巻き込むべき</u>である✓ エンドユーザーである学生の意見を積極的に取り込み<u>学生の関心のあるテーマを反映させることも検討</u>すべきである 地域のステークホルダー <ul style="list-style-type: none">✓ 地域のステークホルダーを巻き込み、アントレプレナーシップの実践の場を求めている学生に<u>地域の課題を与えるフィールドワーク等の機会を創出</u>していくべき

各ステークホルダーの巻き込み

- ✓ アントレプレナーシップ教育の動機付け・意識醸成段階、コンピテンシーの形成段階のそれぞれの観点に基づき、プログラムを設計・開発した

全国プログラムの概要

コース1

コース2

コース1

SDGs、地域の社会課題を本気で考えるためのコース

コース2

新しいチャンスを見つけて課題解決やビジネスに活かす具体的な方法論を学ぶコース

アントレプレナーシップの醸成

アントレ教育の教育フェーズ

コンピテンシーの形成

動機付け・意識醸成 + コンピテンシーの形成

プログラムの目的

- 問題の本質を捉える力を醸成させる
- アイデアを考え出す力を醸成させる
- 提供すべき価値の定義・実装する力を醸成させる

- スタートアップへの理解を深める
- ビジネススキルを向上させる
- 新しいチャンスを見つけ、課題解決やビジネスに活かす方法論の学習を促す

学生に身につけてほしい能力

- 問題を複眼的に理解する能力
- アイデアを考え出す能力
- 提供すべき価値を定義する能力

- 仮説検証能力
- 顧客インタビューを行う能力
- MVP (Minimum Viable Product) を作る能力
- アイデアを売り込む (ピッチ) 能力

プログラム開発アプローチ

- 日常生活の課題を見つけ、解決するための汎用的なプログラムを設計する
- デザイン思考、システム思考、論理的思考力を軸に、問題提起、解決策立案、実行の手法を学生が学習できるように設計する

- 起業家講演を通じてモチベーションの向上を図る
- グループワーク中心の実践的プログラムを設計する
- 新規事業等のように、何か新しいことを始め、社会に役立つための基本的な考え方を身につけられるように設計する

プログラム開発体制

- 地域課題の視点を取り入れるため、これまでにレジリエンスをテーマにプログラムを実施したことがある複数大学で編成された教員陣にてプログラムを開発する

- オンラインとオフラインのハイブリッドの講義を提供し、各大学の教職員による学生への支援やコミュニティ形成を図る (コロナ禍により見送り)

(C) プログラムの開発 コース1のプログラム詳細【C-7】

- ✓ アントレプレナーシップ教育のコンピテンシーの形成段階のプログラムであるコース1では、複数の大学の教員陣でプログラムを開発し、冬季休暇期間の3日間短期集中で教育効果が大きくなるようにインプットを中心に復習を徹底した内容とした

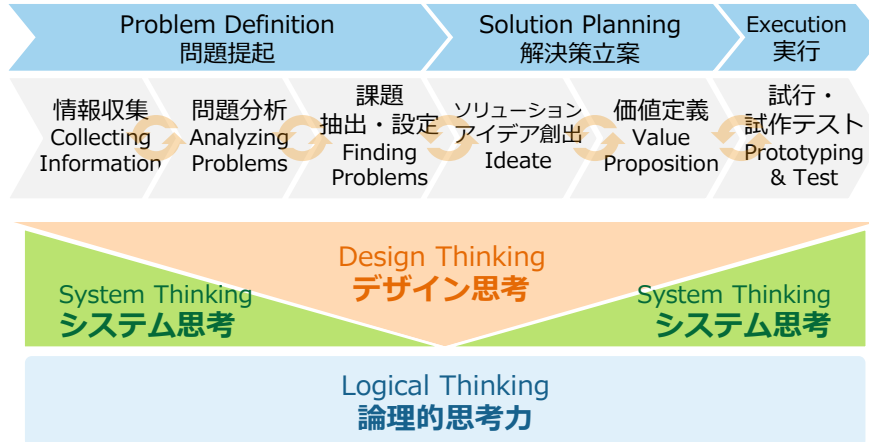
コース1のプログラムの詳細

コース1

コース2

プログラム設計の概念

基本となる考え方



プログラム内容

Day	内容	講師									
Day1 (12/27)	<table border="1"> <tr> <td>イントロダクション</td> <td>問題と課題</td> <td>グループワーク</td> </tr> </table>	イントロダクション	問題と課題	グループワーク	鶴田						
イントロダクション	問題と課題	グループワーク									
Day2 (1/5)	<table border="1"> <tr> <td>問題と課題</td> <td>アイデア創出</td> <td>グループワーク</td> </tr> </table>	問題と課題	アイデア創出	グループワーク	祇園						
問題と課題	アイデア創出	グループワーク									
Day3 (1/8)	<table border="1"> <tr> <td>問題と課題</td> <td>アイデア創出</td> <td>グループワーク</td> </tr> <tr> <td></td> <td>ビジネスモデリング</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>価値定義</td> <td></td> </tr> </table>	問題と課題	アイデア創出	グループワーク		ビジネスモデリング			価値定義		三上
問題と課題	アイデア創出	グループワーク									
	ビジネスモデリング										
	価値定義										

Day1: 12/27

- ・ イントロダクション
- ・ 問題の捉え方
- ・ 問題の構造化
- ・ 主観に基づく課題設定

Day2: 1/5

- ・ 創造的思考
- ・ アイデア創出
- ・ 発表とフィードバック

Day3: 1/8

- ・ 問題とビジネスの価値
- ・ ビジネスモデリング
- ・ 発表とフィードバック

※前回の内容を異なる講師が別の事例で説明。
オンラインによって知識獲得が受動的になってしまい、定着が不十分となることを避ける

ポイント

■ 複数大学の教員陣でプログラムを開発した（下記10名）

- ・ 阿部 晃成 雄勝町の雄勝地区を考える会 構成員
- ・ 石田 祐 宮城大学 事業構想学群 教授
- ・ 金井 純子 徳島大学 理工学部 助教
- ・ 加藤 知愛 北海道大学 公共政策大学院 研究員
- ・ 祇園 景子 神戸大学 V.School 准教授
- ・ 北岡 和義 徳島大学 教養教育院 イノベーション教育分野 准教授
- ・ 武田 浩太郎 東北大学大学院 工学研究科 講師/URA
- ・ 友淵 貴之 宮城大学 事業構想学群 助教
- ・ 鶴田 宏樹 神戸大学 V.School 准教授
- ・ 三上 淳 小樽商科大学 商学研究科 学術研究員

■ インプットに重みをおいた授業形式

受講者の習熟度を上げるため、身につけるべき概念・考え方を講義形式でインプットを意識して提供した。受講者相互の議論からの学びは短くしたとしても省略できないため、後半はグループワークを身につけるべき概念・考え方の理解を促す内容で実施した

■ 事前学習の促進

オフィスアワーを通じて、受講者の不安等を軽減した。事前予習動画の配信、教師により事前に準備されたホワイトボードやワークシート等を通じて、受講者による主体的な事前学習を促進した

■ 「聴き流し」への対策

「聴き流し」による習熟度の低下を避けるために、1日目の講義内容を2日目の講義内容に組み込む、1日目と2日目の内容を3日の講義内容に組み込む等、復習を徹底させる内容にした

(C) プログラムの開発 コース2のプログラム詳細【C-8】

- ✓ アントレ教育の動機付け・意識醸成及びコンピテンシーの形成段階のプログラムであるコース2では、汎用性の高いコンピテンシーである仮説検証にフォーカスし、期間中にプロジェクトを2回に分けて振り返ることで、実践的知識の定着を図った

コース2のプログラムの詳細

コース1

コース2

プログラムの全体像

日付	内容	次回までに見る動画	宿題
12/2	ガイダンス、システムガイダンス、スタートアップとは何か、ゲスト講演	アントレプレナーシップとは、アイデアとは、サーベイの方法	スタートアップのサーベイ×2
12/9	Group Work #1 サーベイの結果共有とチームでのアイデアの決定、仮説検証、顧客インタビュー	なし	選んだスタートアップのアイデアを顧客インタビューで検証する
12/16	Group Work #1 撤退判断、ピッチとは、セールスとは	なし	選んだスタートアップのアイデアをインタビューを通して売ることによって検証する
12/23	Group Work #1 ピッチと相互評価、チームでの振り返り	なし	振り返りレポートを書く、プレイブックを書く
1/6	振り返りレポートの共有、自分たちのアイデア、ゲスト講演	なし	スタートアップのアイデアを考えてくる
1/13	Group Work #2 チームでのアイデア共有と決定、インタビューの準備	なし	アイデアを顧客インタビューで検証する
1/20	Group Work #2 撤退判断、MVPの作成、セールスの準備	なし	アイデアをインタビューを通して売ることによって検証する
1/27	Group Work #2 ピッチと相互評価、チームでの振り返り	なし	振り返りレポートを書く

他社のアイデア

自分のアイデア

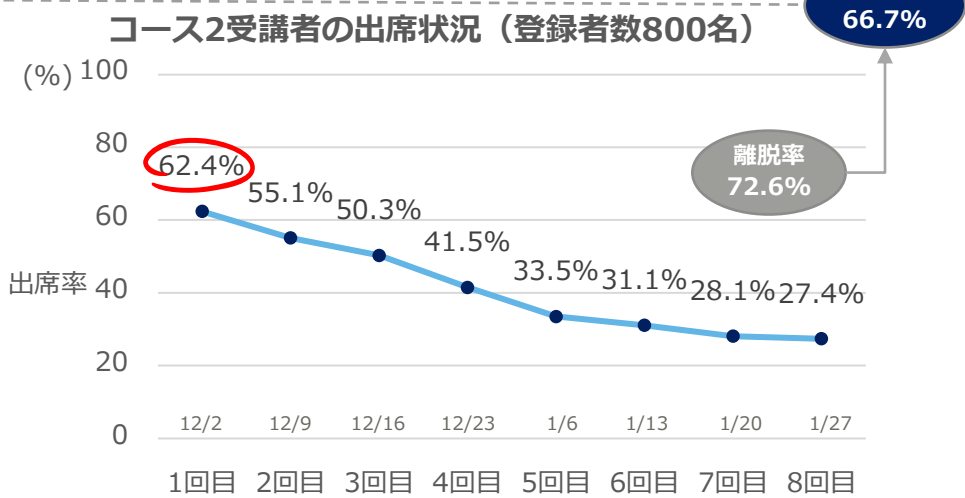
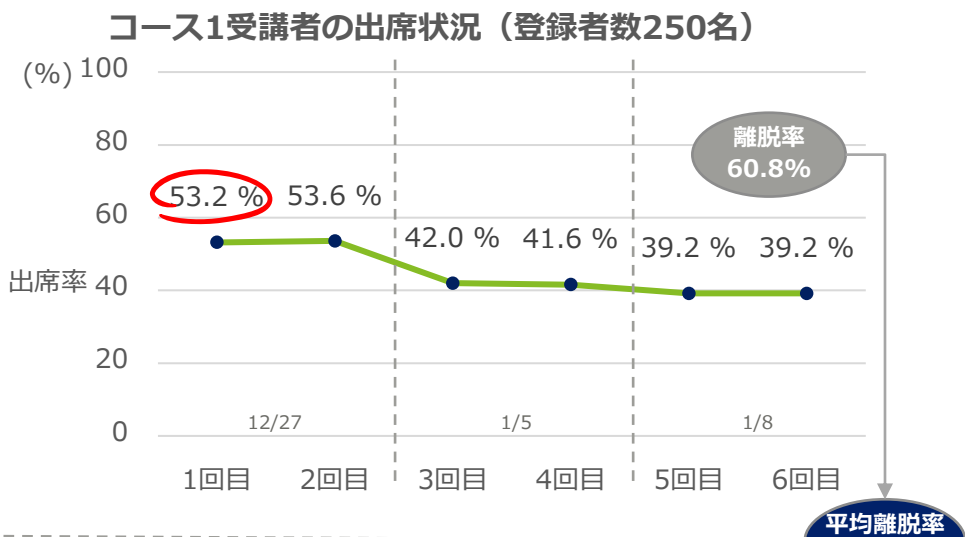
ポイント

- 当プログラムは、スタートアップを題材として活用しつつ、アントレプレナーシップの醸成を図るプログラムであり、起業家的な行動を起こしやすくすることを狙いとして設計されている
- 対象となるコンピテンシーは、幅広い領域で使える「仮説検証」である（アイデアの質向上や起業意思やキャリア教育等は対象外）
- 知識よりも実践による態度・マインドセットの変化を重視し、プロジェクトを2回実施し、振り返りを入れ、実践的知識の定着を図る
- ゲスト講演ではライブアンケートツールslidoによるQ&A、ピッチではループリックによる相互評価等を実施し、学生の能動的な学習を図る

- 南場智子様（株式会社ディー・エヌ・エー）と渡邊崇人様（株式会社グリラス）をお招きし、学生の意図を高めるために、ゲスト講演を実施した
 - 12/2（木）南場様「人生を面白くするキャリアの選択」
 - 1/6（木）渡邊様「コオロギの基礎研究から応用研究、そしてスタートアップ起業へ」

✓ オンラインプログラムはオフラインよりも一般的に離脱率が高く、本プログラムの平均離脱率は66.7%であり、継続参加する意欲を向上させる工夫やグループワークの活性化させる工夫を通して学生の当事者意識を高める必要があると考えられる

プログラムの離脱率を踏まえた今後の検討事項



検証結果

初回講義の参加率が低い

- 初回講義の参加率が50~60%前後であり、講義開始前からの離脱が確認できる

回を重ねるごとに参加者が減少した

- 講義の回を重ねるごとに参加者が減少した
- 短期集中型のコース1よりも8週間実施したコース2の方が離脱率は高い

解釈

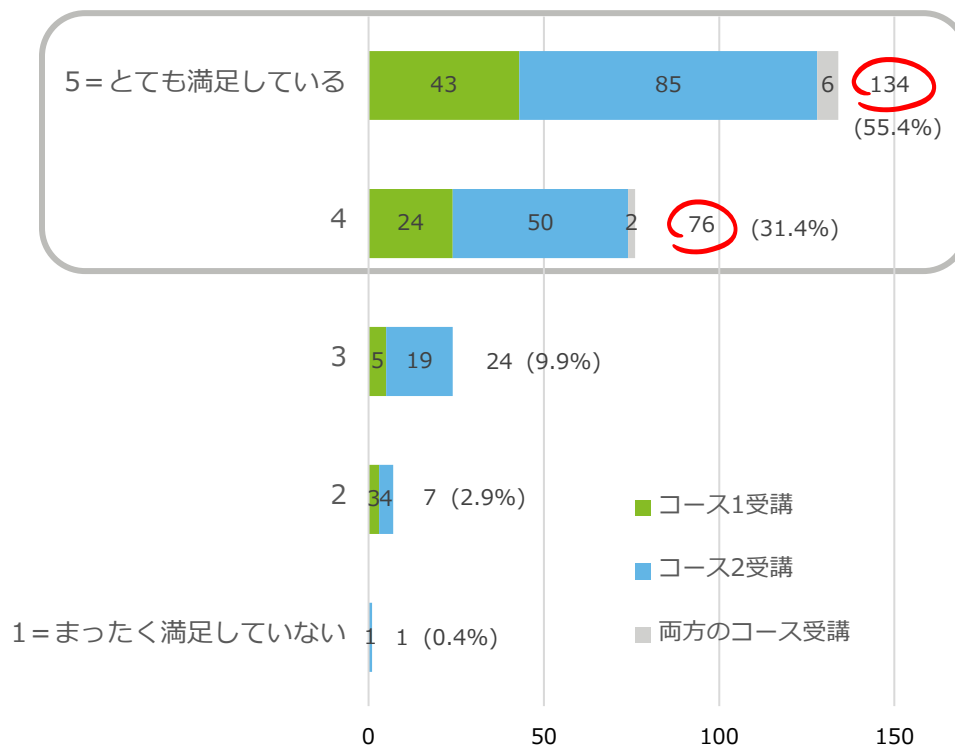
- 学生が申込してから講義開始日までの時間経過により、**学生の関心が下がってしまった**のではないかと
- **無料**で申し込みができることから、**試しに申し込み**をした学生が一定数いたと思われる

- 講義の**難易度が高く**、宿題の**負担感**が学生にとってはあったのではないかと
- 学期末の**試験期間**や**就職活動期間**と重なることにより参加が難しくなってしまった学生も多かったのではないかと

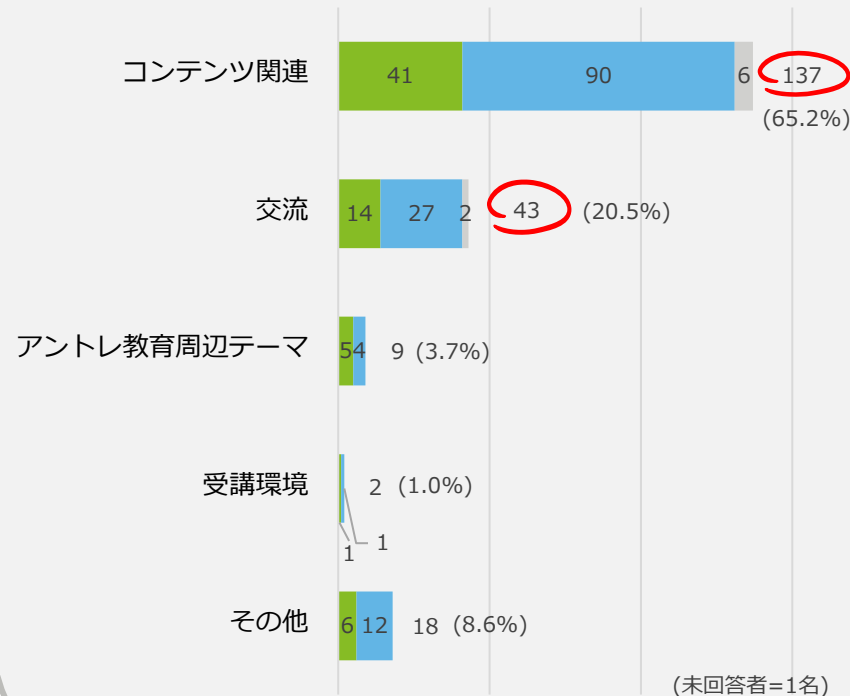
- ✓ 全国プログラムを受講した学生の86.8%は満足度調査において、高評価（5段階評価の内、“5”or“4”）であった
- ✓ 満足度が高かった学生は、「コンテンツ関連」に満足した方が最も多く、次に「(学生間の)交流」を理由として挙げている

満足度に関する学生向けのアンケートからの結果

受講終了後学生向けアンケート (N=242)
「当プログラムに満足していますか」 (5段階評価)



受講終了後学生向けアンケート
(左記の高評価者 N=210)
「左記の満足度の評価を選んだ理由を教えてください」



- ✓ プログラムの満足度が高い項目であるコンテンツと交流については、初期仮説で挙げていた通り、汎用性の高いのコンテンツや実践的なコンテンツ、学生間の交流がオンラインプログラムにおいて重要であると受講者からフィードバックがあった

学生の満足度の高い項目に対する初期仮説とフィードバック

受講者の満足度の高い事項 [C-10] 参照	1 コンテンツ	初期仮説	結果（学生からのフィードバック）	
			学生向けアンケート	学生座談会
	2 交流	<ul style="list-style-type: none"> ■ エントリー層の学生に汎用性の高いコンテンツを提供することで、心理的ハードルを下げ、当事者意識醸成につながるのではないか ■ 大人数が参加するオンラインプログラムであっても、設計を工夫することで学習効果の高いプログラムとして全国の学生に提供できるのではないか 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 講演の内容が面白かった ■ 大学では得られない新しい体験ができ、視野が広がるような知識を勉強できた ■ セールス、ピッチ、思考法等勉強になるものが多く、実践的なスキルを身につけた ■ 自主性、リーダーシップについて勉強できた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ オンラインであっても、インタビュー等の実践的内容を勉強できた ■ ブレインストーミングやKJ法等は研究生活にも、社会生活としても活かせると感じた
		<ul style="list-style-type: none"> ■ 全国各地の他大学の学生との交流を通じて、自大学では得られない刺激を得ることができ、満足度は高くなるのではないか ■ 異なる学部、学年の学生とグループワークを行うことで、相互学習・気づきを促進することができるのではないか 	<ul style="list-style-type: none"> ■ グループワークが充実していた ■ 意識の高い同世代の学生と出会えた ■ 他大学の学生と交流できた ■ 一人では学ぶことのできない経験やマインドをグループワークを通じて身につけることができた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ バックグラウンドが異なる学生から斬新なアイデアを得られて、やりがいが大きかった ■ チームメンバーからアドバイスをもらい、勉強になったので、今後も交流を続けたい ■ チームメンバーと交流することにより、自分のアイデアへの自信がついた

- ✓ 全国プログラムを傍聴した教職員からは自大学のプログラムとの連携や地域との連携について、多くの意見をいただいた
- ✓ 汎用性の高い全国プログラムを活用し、地域との連携による地域課題を取り上げてカスタマイズすることが重要と考えられる

汎用性の高いプログラムの各大学への展開結果

プログラム計画時の狙い

課題

- アントレ教育のプログラムが不足している上に、大学内外での連携も十分に取れておらず、**学生に対してアントレ教育のプログラムを十分に提供することができていない**

仮説

- アントレ教育を受講したくても受講できない学生に対して、**オンラインプログラムを全国規模で実施することで、受講の機会を提供するべきではないか**
- 全国プログラムのノウハウを各大学で活用し、地域や大学の特性や事情を踏まえた**多様なプログラムの開発が必要なのではないか**

狙い

- アントレ教育の醸成段階のベースとなるプログラムを開発した上で、全国プログラムと連携し**各地域でフィールドワーク等につながるプログラムの開発への関心や可能性について検証する**

実施後のご意見概要

教職員向けアンケート

- **自大学のプログラムとの連携意向**
 - 自大学で本プログラム、プラットフォームの活用方法を検討したい
 - 自大学のプログラムとの連携を検討したい
 - グループワークの手法について自大学で応用できると思った
- **地域連携の意向**
 - 複数の大学による共同運営や地域単位の大学での共同運営が考えられる
- **自大学の教職員の育成の意向**
 - 自大学の教職員の教育に繋がりたい
- **自大学の制度変更への意向**
 - 本プログラムを自大学で単位化/必修化したいと感じた

教職員座談会

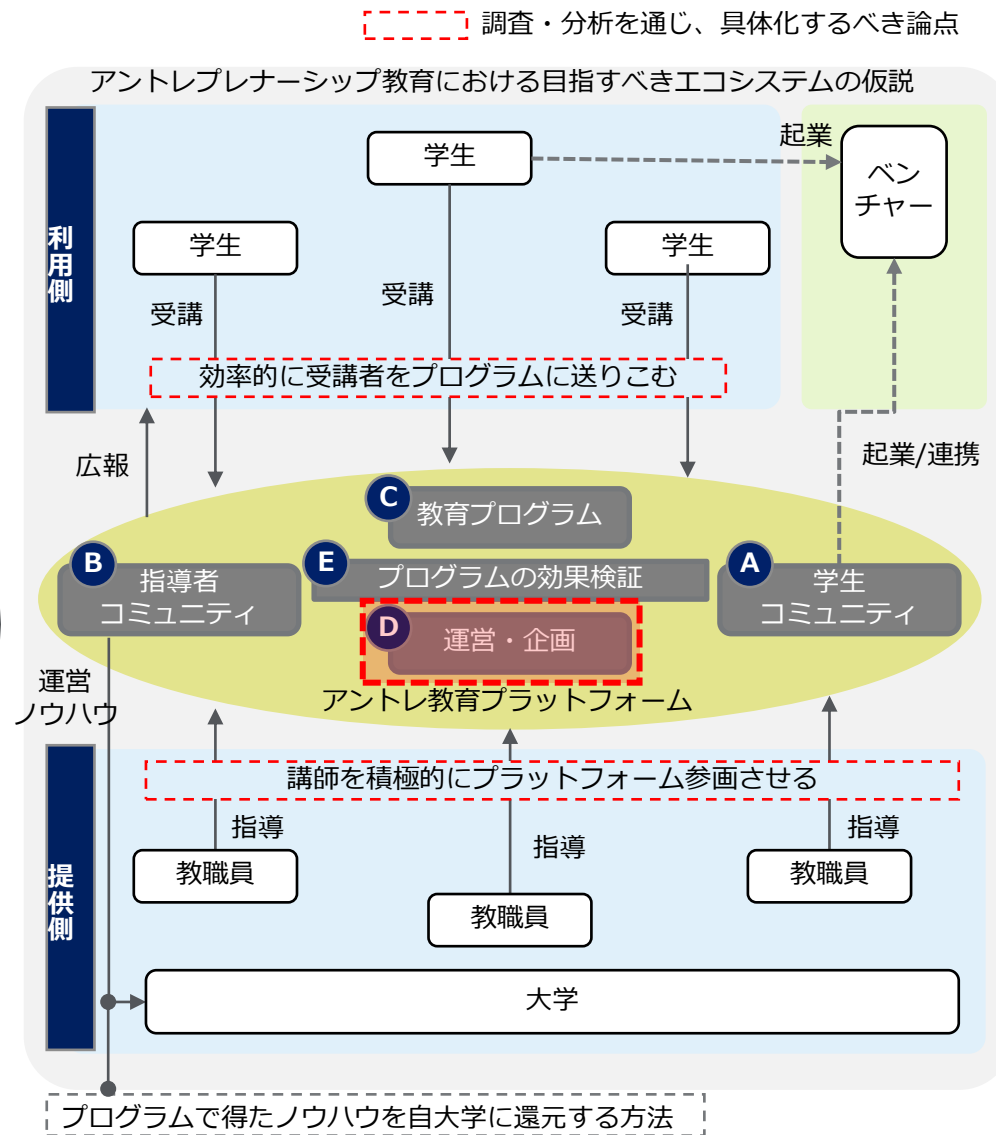
- **自大学のプログラムとの連携意向**
 - 本プログラムの次のステップとして、本格的にビジネスプランを作る後続フェーズも用意するべきではないか
 - “地域を見直す”という講義の中で、体系的な授業設計を取り入れたい
 - 実際にオンラインツールを自大学で活用し、学生のグループワークで使用した
- **地域連携の意向**
 - 地域と連携することで、課題解決など体験的な学びができる
 - オンラインプログラムを活用しつつ、各地域の特徴に根差したアントレ教育を検討する必要がある

- **自大学のプログラムとの連携**に関する意向や**地域連携**に関する意向が多く挙がっている
- 各地域の課題を取り上げたフィールドワーク等の**実践形式のプログラムの開発**が重要であり、各地域の特徴を踏まえたプログラムの**カスタマイズ**が必要となる

【第5節】 (D) プログラムの運営に関する検討

✓ 本節では(D)プログラムの運営の論点の初期仮説を検証し、アントレプレナーシップ教育における目指すべきエコシステムの検証を行う

分類	検証すべき論点	初期仮説
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高い	C 教育的価値の高いプログラムの開発
	プログラムの開発と運営	D 円滑かつ効率的な運営手法の確立
	PDCAサイクルによる検証	E プログラムの効果測定と改善方法の確立



✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、プログラムの運営には、円滑な運営体制の構築と、学生の疑問や不安を解消するフォローアップ体制の整備と、学生のコミュニティの活性化させる運営方法の確立が重要である

現状

アントレ教育のプログラムを円滑に実施する運営体制やフォローアップの体制が整っておらず、学生への効果的な学習の提供が困難な状況である

運営体制の未整備



①円滑な講義の体制が未整備



大学リソースの不足
サポーターの不足
事務局の不足

②フォローアップの体制が未整備

運営方法の未確立

学生への教育効果を高めるためのオンラインならではのインタラクティブな交流を促進させる運営方法が未確立



マニュアル整備



アナウンスメント



インフラ整備



学生間交流の促進のノウハウ

③学生に効果的な学習を与える運営方法が未確立

目指す姿

講義やグループワークを円滑に運営し、学生の疑問や不安を解消するためのフォローアップ体制を整備し、学生のコミュニティの活性化を促す運営が必要

運営体制の整備

①円滑な運営体制の構築

講義内



講義・グループワーク

②フォローアップ体制の整備



教職員の巻き込み



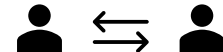
TAの組織化



事務局の機能強化

効果的な運営方法の確立

講義外



学生間の交流・学び

③学生のコミュニティの活性化を促す運営



講義外説明会



マニュアル整備



問合せ、トラブルシューティング



インフラ整備



交流促進のノウハウ



アナウンスメント

今後の方向性

各大学

- ① 講義やグループワークにおいて円滑かつ効率的な運営ができるような体制を整備
- ② 各地域や各大学の教職員等を巻き込み、学生の疑問や不安を解消するためのフォローアップ体制を整備
- ③ 学生のコミュニティの活性化を促し、学生間の交流を活性化させ、相互学習を促進させる運営体制を整備

ステークホルダー

- ② ③ 下記のようなステークホルダーを巻き込み、学生にとって効果的なプログラムの運営を実現
 - ✓ TA：教職員がフォローしきれない領域について、学生へのフォローを実施
 - ✓ 事務局：オンラインプラットフォームの環境整備や学生コミュニティの形成を支援し、活発な交流・相互学習を促進
 - ✓ 民間企業：学生コミュニティの活性化に関するノウハウの提供

- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、(D)プログラムの運営の課題には「運営体制の未整備」と「運営方法の未確立」が挙げられ、全国プログラムの運営を通してそれらの課題の解消を図った

昨年度の調査結果

アントレ教育の課題

運営体制の未整備

- ✓ アントレ教育を指導できる人材だけでなく、**運営する人材も不足している**
- ✓ 大学内外での**協力・支援の体制が整っていない**

運営方法の未確立

- ✓ 教職員が指導に集中でき、学生の受講環境を整える**事務局機能が未整備**であり、プログラムの**運営方法が確立されていない**

検証すべき事項

- ✓ 各大学のリソース不足の状況を踏まえて、**大人数に提供でき、全国どこからでも参加できるオンライン形式のプログラムを効率的かつ効果的に運営する必要がある**
- ✓ 講義やグループワーク等の教育的な効果が損なわれないように**オンライン上でのインタラクティブなやり取りができる体制を整備する必要がある**

- ✓ オンラインで学生の受講環境を整え、学生と教職員や学生同士の**コミュニケーションの質が担保される運営方法の確立**が必要である
- ✓ オンライン形式ならではの**講義時間外の学生同士による自発的でインタラクティブな交流が実現できる学生のコミュニティ形成**していくべきである

今年度の調査内容

検証内容

プログラムの運営

オンラインプログラムの運営

オンライン形式でのプログラムの**円滑かつ効率的な運営方法や運営体制**について、本プログラムを通して実証する

オンラインコミュニティの運営

受講者の効果的な学びにつなげるために、**オンライン形式ならではのインタラクティブな受講環境の整備・運営**について検証する

- ✓ (D)プログラムの運営の2つの検討項目については、プログラムを通して学生と教職員の双方の反応を検証した
- ✓ オンラインプログラム運営に係る工夫とオンラインコミュニティ運営に係る工夫について解釈・考察を整理した

検証項目	検証方法	検証結果	解釈・考察
オンラインプログラムの運営	オンライン形式のプログラムの運営を行う上で必要となる、 受講環境の整備とフォローアップ体制 について、実証的に全国プログラムを通して、学生や教職員の反応を検証する	<p>受講環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 同時に大規模の学生が受講できる環境を整備したが、オンラインツールの使い勝手については課題として挙がった【D-9】 ✓ プログラムを受講した学生の事務局サポートへの評価は高く、アンケート回答者の80%以上が高評価をしているが、受講前の事前レクチャー等を求める声も出た【D-8】 <p>フォローアップ体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラムでの失望体験を減らすためには、学生へのフォローアップ体制の構築が必要であると意見をいただいた【D-7, D-9】 	<p>オンラインプログラム運営に係る工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生と教職員の双方にとって快適なオンラインプログラムの運用方法の検討が必要である ✓ 学生への受講前のレクチャーを含むフォローアップが必要であると考えられる ✓ 教育効果を担保させるために、グループ編成の在り方等の学生間コミュニケーションを促進させる仕組み作りについて今後検討が必要であると考えられる
オンラインコミュニティの運営	オンラインならではのインタラクティブな交流や学びにつなげるための 運営上の工夫 を検討し、受講環境を整え、 学生へのアンケートや座談会 にて検証する	<p>グループワークの活性化に向けた工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラムを受講した学生の失望体験はグループワーク関連が最も多かった【D-10】 ✓ グループワークでの議論を活性化させるために、グループの人数や学生間のスキルやマインドセットを考慮したグループの編成が必要ではないかと意見が出た【D-10】 <p>学生間の交流の促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生間の交流が促進されるように、Teams上にてチャンネルを作成した結果、期間中の投稿件数が約4,500件となった【D-11】 	<p>オンラインコミュニティ運営に係る工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生の失望体験を減らすために、学生の疑問や不安を解消するフォローアップ体制の構築が必要であると考えられる ✓ 学生間の交流を活性化させ、学生同士の学び合いを通して、自発的な成長につながるような仕掛けがオンラインプログラムにおいては重要である

✓ 今年度の検証結果から得られた解釈・考察に基づき、事務局機能の強化や教職員コミュニティの巻き込みや効果的なプログラムのさらなる実証としてオンラインコミュニケーションの円滑化と学生間の活発な交流の実現の今後の方向性を整理した

検証項目	解釈・考察		今後の方向性（提案）
オンラインプログラムの運営	<p>オンラインプログラム運営に係る工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生と教職員の双方にとって快適なオンラインプログラムの運用方法の検討が必要である ✓ 学生への受講前のレクチャーを含むフォローアップが必要であると考えられる ✓ 教育効果を担保させるために、グループ編成の在り方等の学生間コミュニケーションを促進させる仕組み作りについて今後検討が必要であると考えられる 	<p>事務局機能の強化</p> <p>教職員コミュニティの巻き込み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ オンラインプログラムの運営のブラッシュアップや学生の意識改革（当事者意識形成）につながるフォローアップ体制の構築に向けて、今後検討を進めるために事務局機能の強化が必要である ✓ 活発な学生のコミュニティの形成に向けた仕掛けをオーガナイズする事務局が必要であり、学生の自発的な学びの機会の創出を検討するべきである
オンラインコミュニティの運営	<p>オンラインコミュニティ運営に係る工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生の失望体験を減らすために、学生の疑問や不安を解消するフォローアップ体制の構築が必要であると考えられる ✓ 学生間の交流を活性化させ、学生同士の学び合いを通して、自発的な成長につながるような仕掛けがオンラインプログラムにおいては重要である 	<p>効果的なプログラムのさらなる実証</p> <p>オンライン上のコミュニケーションの円滑化</p> <p>学生間の活発な交流の実現</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ オンラインプログラムの目的や内容を踏まえたオンラインツールを含む運営ロジ面については、オンライン上のコミュニケーションをより円滑にするために今後も継続した実証が必要である ✓ グループワークの効果的な実施に向けて、学生の属性やスキルや多様性等の観点踏まえて、グループの編成の在り方等を含む運営についてさらなる実証が必要である ✓ 学生間の活発な交流を実現させるために、学生同士の学び合いを通じた自発的な成長を促すための受講環境やプログラムの在り方について、今後さらなる実証が必要である

(D) プログラムの運営 運営上の懸案点と取組内容【D-6】

- ✓ 全国プログラムを実施する上で、運営上の懸案点を事前に整理し、「受講環境の整備」「フォローアップ体制の構築」「グループワークの活性化に向けた工夫」「学生間の交流の促進」のそれぞれの論点について取り組むべき内容をまとめた

オンラインプログラム運営上の懸案点に対する取組内容のまとめ

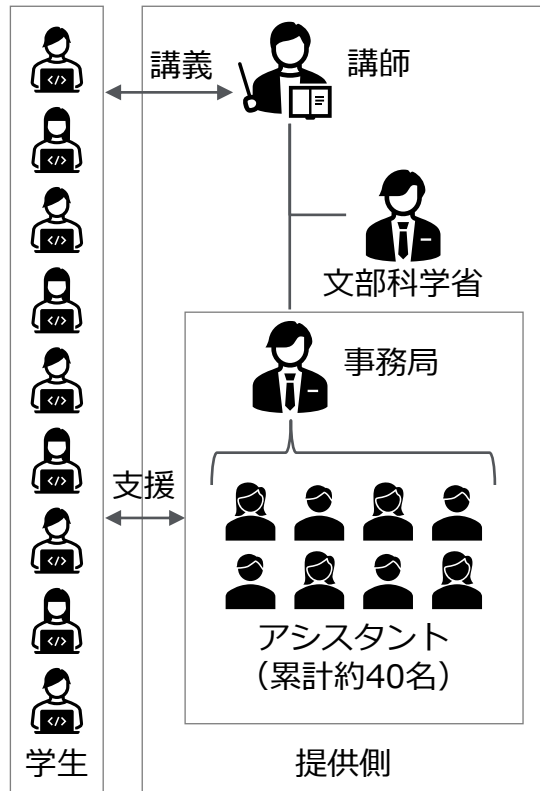
運営上の懸案点（初期仮説）		工夫した取組内容	検証結果	
オンラインプログラムの運営に係る懸案点	受講環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 大人数が同時にアクセスし、講義及びグループワークができるようなオンラインツールの選定が必要だと考えられる ✓ 学生が安心してプログラムを受講できるように、講義前に教材やサポート資料等の共有が必要だと考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラムの内容や目的に応じた受講環境を整備するために、大規模な同時アクセスでも安定した講義ができる体制を構築した ✓ オンラインプログラムの受講に関するマニュアル類を整備し、プログラムの予習動画や振り返り動画等のオンデマンド動画配信を実施した 	<p>【D-9】参照</p> <p>【D-8】参照</p>
	フォローアップ体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ✓ オンライン形式のプログラムを実施する上で、学生の不明点を解消するアナウンスやサポートが必要だと考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 事務局による問合せ窓口を設置し、学生の不明点に対して対応した ✓ 宿題や講義のリマインド等のアナウンスを実施した 	<p>【D-7】参照</p> <p>【D-9】参照</p>
オンラインコミュニティの運営に係る懸案点	グループワークの活性化に向けた工夫	<ul style="list-style-type: none"> ✓ オンライン形式のプログラムにおいて、学生のグループワークを活性化させるための工夫が必要だと考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラムの内容や学生の出席状況等に応じた柔軟なグループの組成を実施した ✓ アシスタントを体制に加え、グループワークの巡回やサポートを行った 	<p>【D-7】参照</p> <p>【D-10】参照</p>
	学生間の交流の促進	<ul style="list-style-type: none"> ✓ オンラインならではの講義時間外における学生間でインタラクティブな交流を促せるような環境の整備が重要だと考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 受講者同士が自由に交流できるような場を設定し、自己紹介やイベント交流等のアイスブレイクができる受講環境を用意した 	<p>【D-11】参照</p>

- ✓ 講師が学生に対して円滑に講義を実施し、学生が学びやすい受講環境を整備する上で、事務局の体制やフォローアップ体制の構築は重要であり、本事業ではアシスタント累計約40名を体制に加え、プログラムの運営及び学生のフォローアップを行った

事務局の運営体制

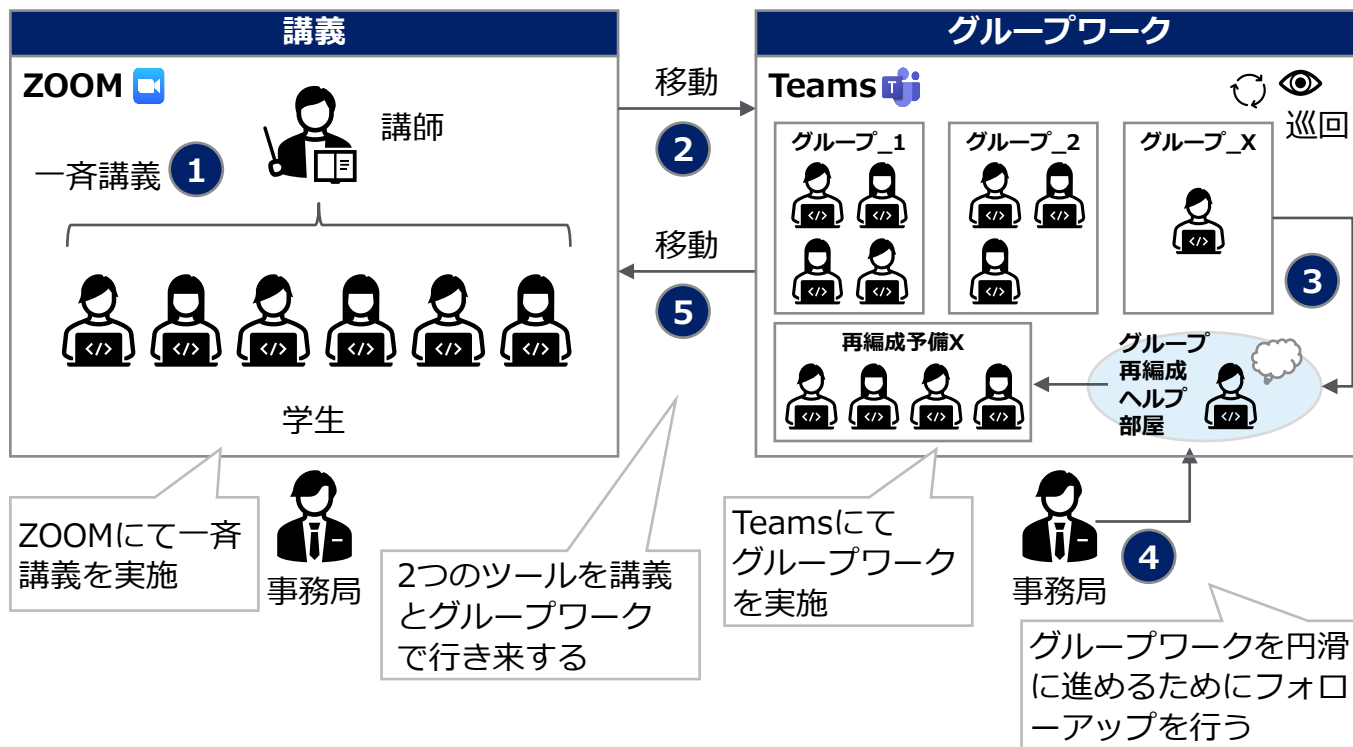
事務局の体制

- ✓ 講師が学生に講義をオンラインで円滑に提供するために、事務局はアシスタント累計約40名を組織し、受講環境の整備を行った



各講義でのフォローアップ体制

- ✓ オンラインで同時に大規模の学生が受講できるように、**講義をZOOM、グループワークをTeams**で実施した
- ✓ グループワークがメインであるプログラムにおいては各回にアシスタントを約10名手配し、各グループを**巡回**させ、トラブル発生時や学生からの**問い合わせ**に対応した
- ✓ メンバーの欠席でグループワークができない場合、事務局にて新規のグループを編成した

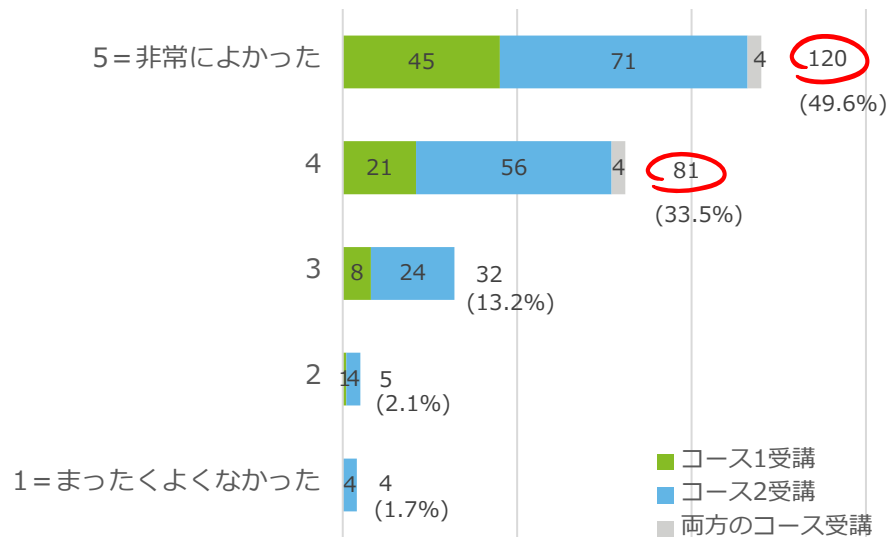


- ✓ オンラインプログラムとオンラインコミュニティの双方の観点における運営上の工夫を実施したところ、受講者の83.1%は事務局のサポートについては高評価であり、座談会等ではさらなる事務局機能の強化に関する意見もいくつか挙げられた

事務局のサポートに関する学生向けのアンケートからの結果

運営上の工夫		
オンラインプログラムの運営の観点	予習と復習	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 講義の予習と復習を促進するための講義資料や動画を配信する ✓ 事前に講義内容や必要な準備等について告知を行う
	宿題	<ul style="list-style-type: none"> ✓ オンライン上でのファイル編集や共有可能な環境を整備する ✓ 学生に宿題に関する案内を行い、問い合わせにも対応する
オンラインコミュニティの運営の観点	アナウンス	<ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラム開催前、開催後の諸連絡事項を事務局から発信する ✓ 参加者の興味関心が惹かれるような体裁で情報を発信する
	マニュアル	<ul style="list-style-type: none"> ✓ オンラインプログラムを円滑に進めるためにマニュアルを作成する ✓ 学生、教職員、アシスタント向けの3種類のマニュアルを作成する
	オフィスアワー	<ul style="list-style-type: none"> ✓ プログラム開催前のアイスブレイク、プログラム開催後の意見交換を実施し、学生の不安の解消や学生へのアドバイスの提供を行う

受講終了後学生向けアンケート (N=242)
「当プログラムの事務局サポートはどうでしたか」



- グループ再編成の対応がスムーズだった
- チーム内の連帯感を向上させるために、カメラをオンにするための呼びかけが必要ではないか
- ファシリテーターの設定は必要だと感じた



- 大学で学生のサポートを行う体制を構築するために、大学ごとの参加者情報を共有してほしい

- ✓ 全国プログラムを受講した学生の失望体験で3番目に多かったのが、「受講環境」に関するもので54名（22.3%）であった
- ✓ オンラインツールを使った講義やグループワークの経験の少ない学生に対するフォローは必要であると考えられる

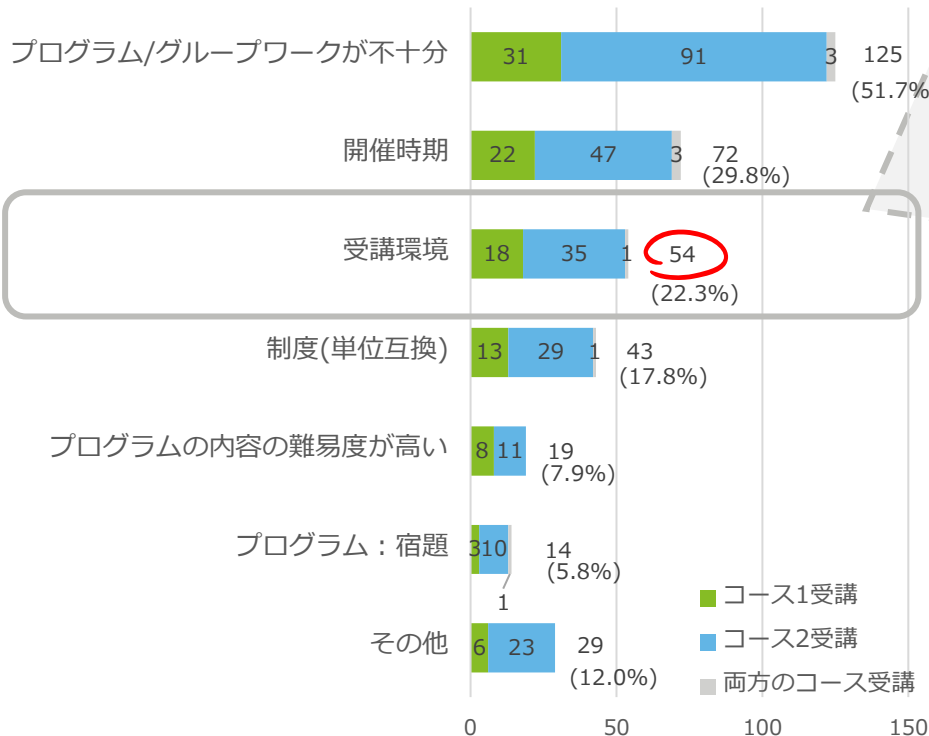
受講環境に関する学生向けのアンケートからの結果

受講終了後学生向けアンケート（N=242）

「本プログラムを通して失望するような体験はありましたか」

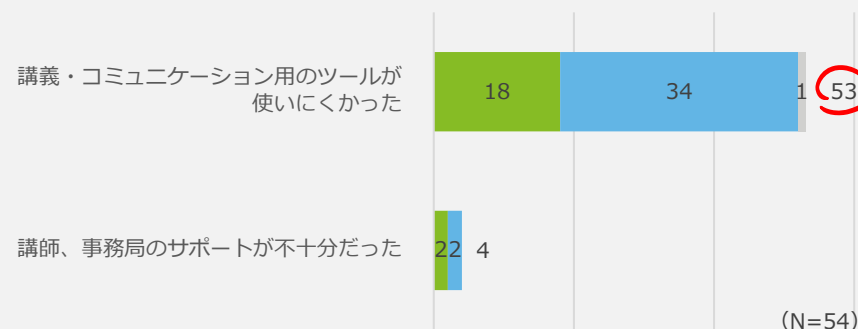
※複数回答可であるため重複有

※各分類で人数カウントをしている



失望体験の「受講環境」の内訳

※複数回答可であるため重複有



受講者

- プログラムを進める上で、オンラインツールの様々な機能を使用するのであれば、**使い方**についての説明があるとよい
- 2つのツールを行き来する手間がかかったため、ツール利用の**事前レクチャー**があるとよい

✓ 全国プログラムを受講した学生の失望体験で最も多かったのが「プログラム/グループワークが不十分」であり、125名（51.7%）と過半数以上の学生が物足りなさを感じており、グループワークの活性化の方法は今後検討していくべきといえる

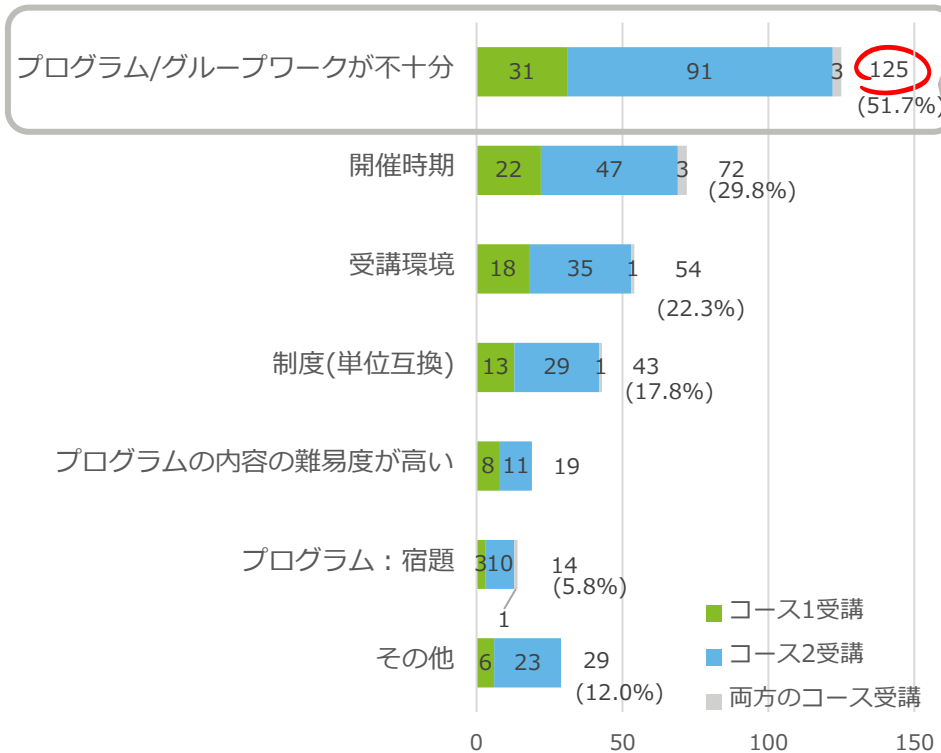
グループワークに関する学生向けのアンケートからの結果

受講終了後学生向けアンケート（N=242）

「本プログラムを通して失望するような体験はありましたか」

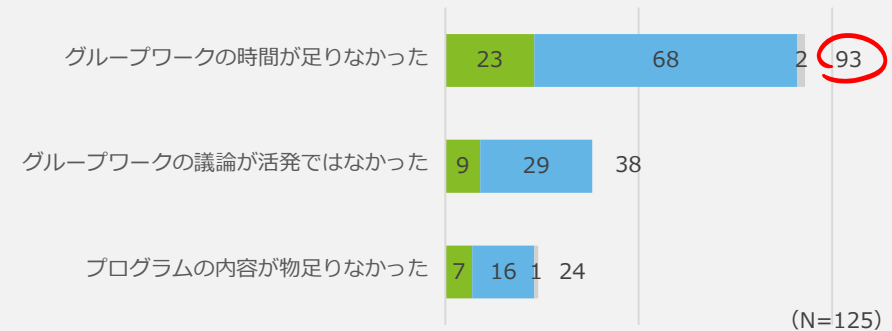
※複数回答可であるため重複有

※各分類で人数カウントをしている



失望体験の「プログラム/グループワークが不十分」の内訳

※複数回答可であるため重複有

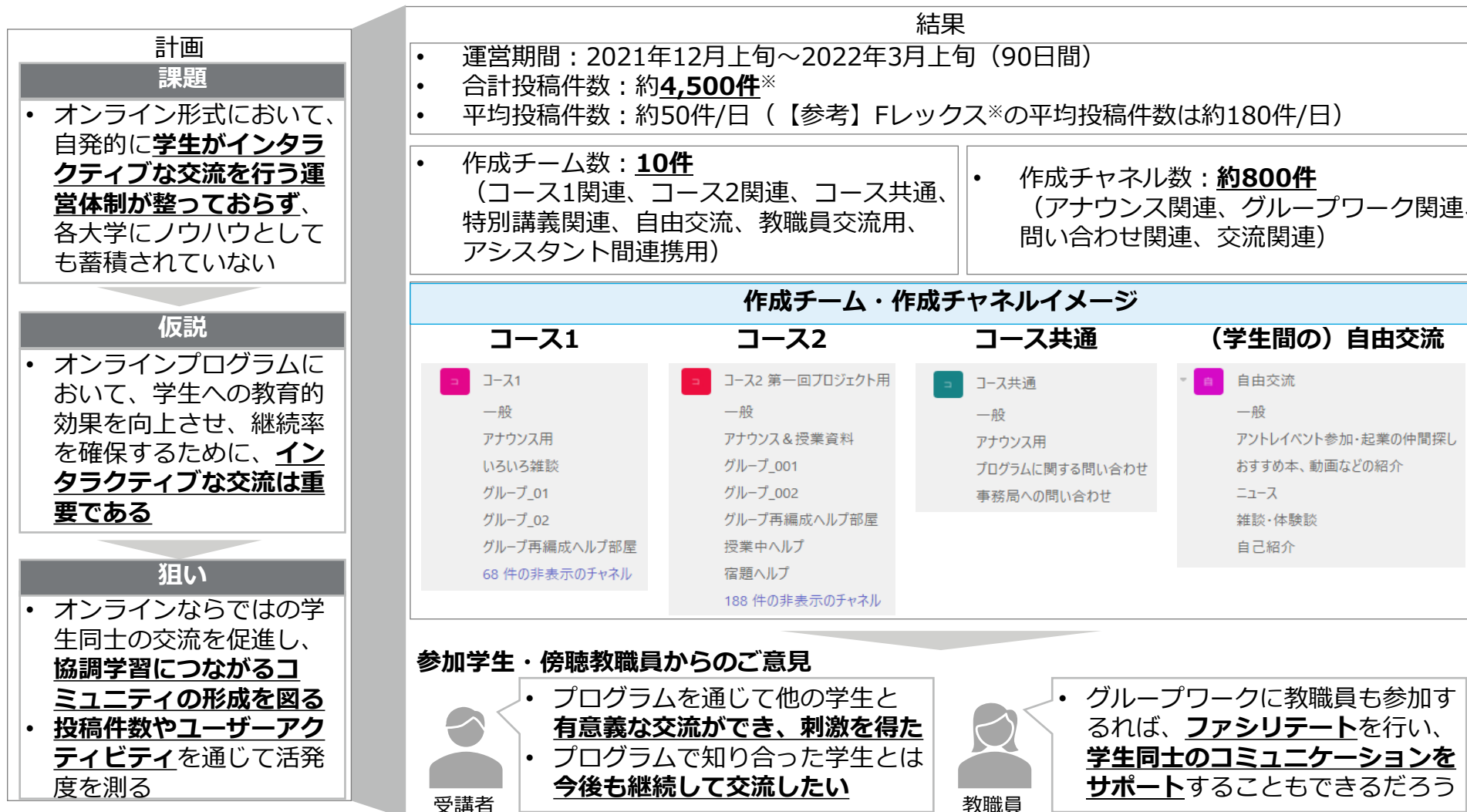


受講者

- **グループワークの時間が短く**、意見の整理が十分にできなかった
- グループ間の温度感が異なり、**グループワークの質を確保**するため、教職員やTA、ファシリテーターの関与が必要だと考えられる
- グループに脱落者がいて十分な議論ができなかったため、受講により得られる成果の提示や単位認定等の**受講のインセンティブ**を明確に打ち出す必要があったのではないかと

- ✓ オンラインプログラムならではの講義時間外にも学生同士が主体的に学び合い、交流できる環境を整備した
- ✓ 期間中の投稿件数は約4,500件となり、本プログラムで知り合った学生と今後も交流したいという声も座談会で挙がった

学生間の交流状況

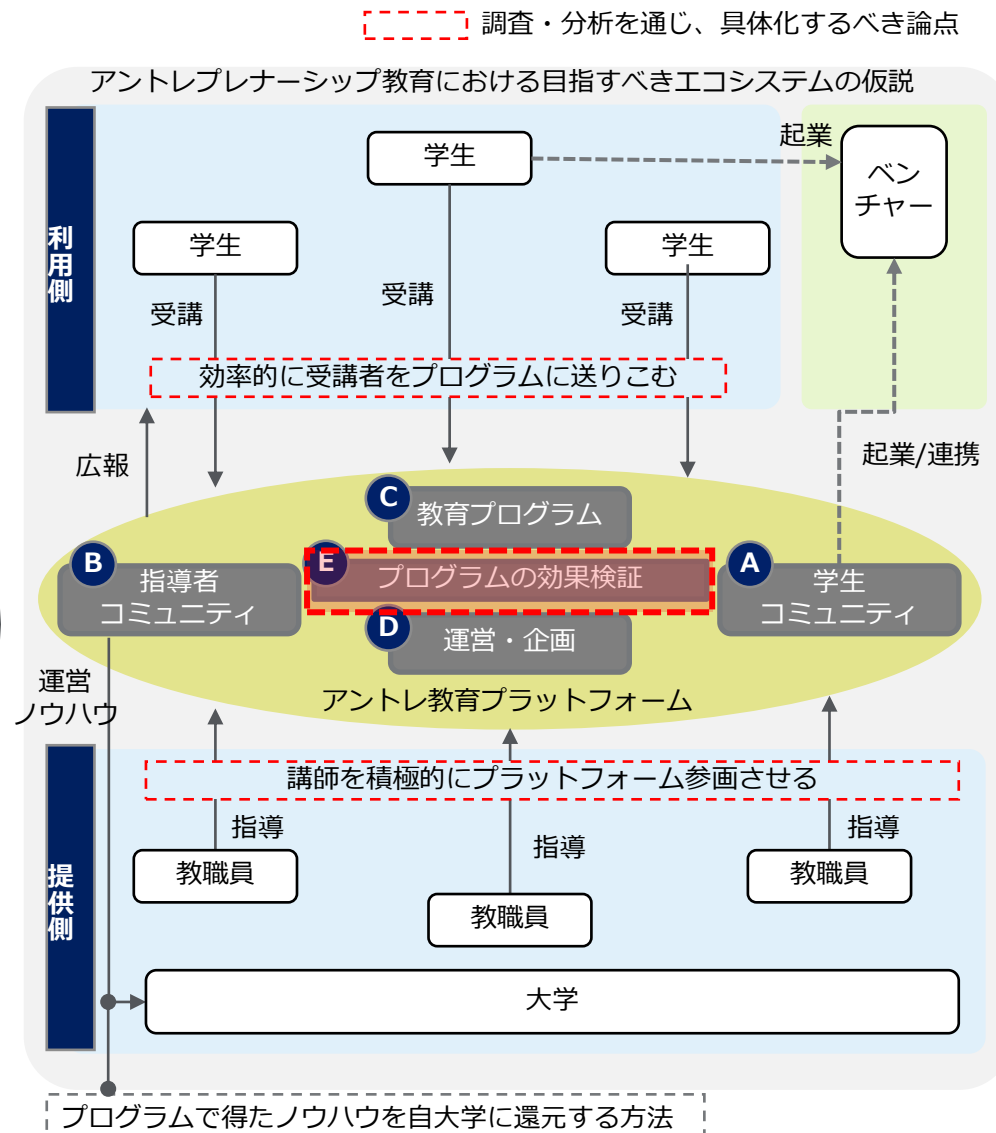


※ 投稿、返信も含む（講師や事務局の投稿も含む）

【第6節】 (E) プログラムの評価に関する検討

- ✓ 本節では(E)プログラムの評価の論点の初期仮説を検証し、アントレプレナーシップ教育における目指すべきエコシステムの検証を行う

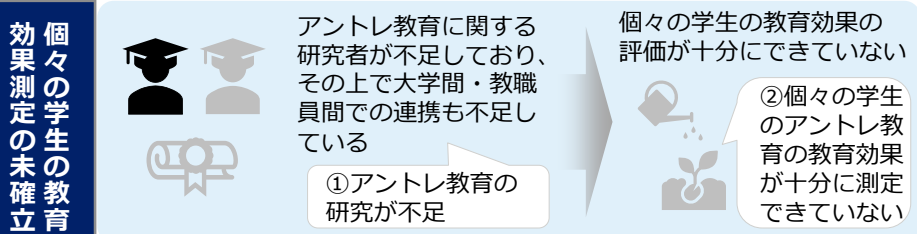
分類	検証すべき論点	初期仮説
ステークホルダーの参加促進	受講機会の創出	A 全国の学生を対象としてアントレ教育の認知・関心を高めるための情報発信および受講意欲を高めるための学生コミュニティの設計・運営
	各大学間の連携によるノウハウ共有の促進	B 指導者の参加を促し、活発な交流を実現
プログラムの教育的価値の向上	全国規模で大人数に提供でき、教育効果の高いプログラムの開発と運営	C 教育的価値の高いプログラムの開発
	円滑かつ効率的な運営手法の確立	D 円滑かつ効率的な運営手法の確立
	PDCAサイクルによる検証	E プログラムの効果測定と改善方法の確立



- ✓ アントレプレナーシップ教育の裾野拡大における、プログラムの評価には、プログラムの評価には、教育効果の測定の観点では、アントレ教育の研究の促進や教育効果の指標の測定及び中長期的な観測、一方でアントレ教育の裾野拡大の観点では、教育フェーズごとに全国プログラムと各大学が互いに補い合う座組の取組みが重要である

現状

アントレ教育の研究が不足しており、個々の学生の教育効果の測定が十分にできておらず、プログラムの在り方の検討も不十分な状況である



目指す姿

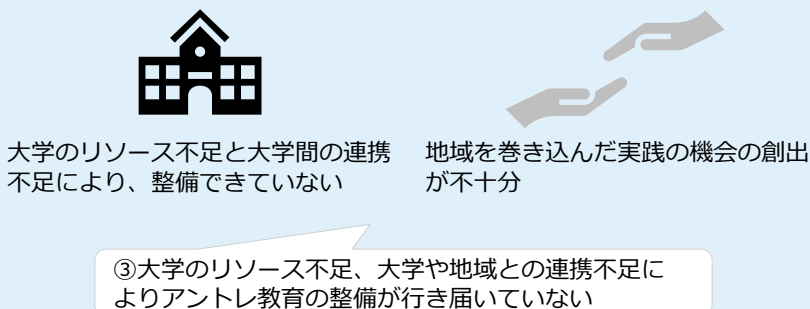
ロールモデルの設定等を通した個々の学生の教育効果の測定方法の確立や教育フェーズごとに全国プログラムと各大学が補い合う座組の取組みが重要



アントレ教育の裾野拡大における全国プログラムのあり方の評価の未確立

アントレプレナーシップ醸成

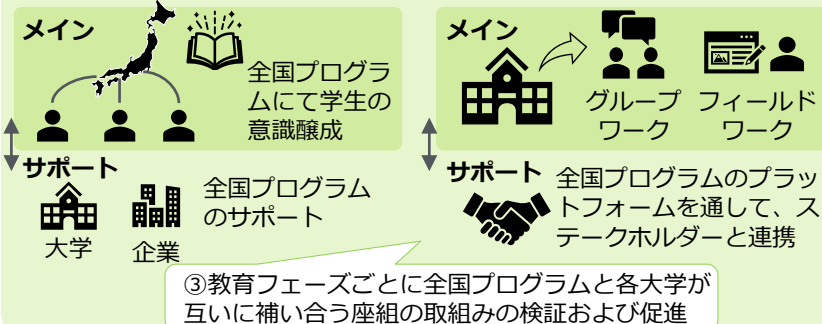
アントレプレナーシップ発揮



アントレ教育の裾野拡大における全国プログラムのあり方の評価と検証

アントレプレナーシップ醸成

アントレプレナーシップ発揮



今後の方向性

各大学

- ① 教職員の研究成果を研究者がアクセス可能なデータベースに蓄積し、共有することにより、アントレ教育の学術研究を促進
- ② 学生のロールモデルを提示した上で、教育効果の測定指標を設定し、指標に関する中長期的な測定を実施
- ③ 全国プログラムとの連携を強化し、教育フェーズごとに互いに補い合う座組の取組みを促進

ステークホルダー

- ③ 下記のようなステークホルダーを巻き込み、教育フェーズごとに補完し合う形を検討することでプログラムの在り方を実現
 - ✓ 自治体：アントレプレナーシップ醸成の段階では全国プログラムをサポートし、アントレプレナーシップ発揮の段階では各大学と連携し実践的なフィールドワークの場を提供する
 - ✓ 民間企業：アントレプレナーシップ醸成の段階では全国プログラムをサポートし、アントレプレナーシップ発揮の段階では各大学と連携し実践的なフィールドワークの場を提供する

- ✓ アントレ教育の裾野拡大における、(E)プログラムの評価の課題には「個々の学生への教育効果の評価の方法」と「プログラムの在り方の評価方法」が確立されていない点が挙げられ、実証的なプログラムの提供を通してそれらの課題の検討を図った

昨年度の調査結果

アントレ教育の課題

個々の学生への教育効果の評価の方法の未確立

- ✓ アントレ教育の研究に対する支援が不足している
- ✓ アントレ教育の有効性を示す評価指標の設計方法、教育的効果の測定方法が確立されていない

検証すべき事項

- ✓ 海外のアントレ教育の研究内容等を踏まえ、実際にプログラムを学生に提供して、個々の学生への教育的効果を測定すべきではないか
- ✓ 企画・実施だけでなく、個々の学生の教育効果の測定結果を基にPDCAサイクルを回し、プログラムの継続的な改善が必要ではないか

今年度の調査内容

検証内容

プログラムの評価

- ✓ アントレ教育の有効性を示すために、教育的効果の評価方法を確立させる必要がある
- ✓ アントレ教育の裾野拡大に資する効果的なプログラムの在り方について検討し、ステークホルダーの役割や位置づけを明確にする必要がある

個々の学生の教育効果の測定

個々の学生への教育効果の評価の方法が確立されていない課題に対し、実証的にプログラムを学生に提供し、そのプログラムが学生に与えた教育効果を測定する

全国プログラムの在り方の評価

全国規模で裾野拡大を推進する上で有効だと思われるアントレ教育の醸成段階のプログラムを実施し、学生や教職員の反応を検証する

プログラムの在り方の評価方法の未確立

- ✓ アントレ教育の裾野拡大および教育効果を最大化させるための、プログラムの在り方について検討が十分にできていない
- ✓ 各地域・各大学での役割や国としての役割を俯瞰的に捉えた最適なプログラムの設計や運営ができていない

- ✓ 各地域・各大学の課題を踏まえ、国としてのアントレ教育のプログラムの効果測定を通して、アントレ教育のプログラムの在り方を検討した
- ✓ 検証結果を踏まえて、アントレ教育の裾野拡大におけるステークホルダーの役割や位置づけを明確にするべきではないか

- ✓ (E)プログラムの評価の2つの検討項目については、本事業でのプログラムの提供を通して、実証的に評価を行い検証した
- ✓ 中長期的な定点の教育効果の測定とオンラインとオフラインの連携について解釈・考察を整理した

検証項目	検証方法	検証結果	解釈・考察
個々の学生の教育効果の測定	プログラムの <u>内容や目的に応じた評価指標を設定</u> し、本事業でプログラムを提供した上で、 <u>アンケート等</u> を通して、学生への教育効果を測定し、プログラムの評価を行う	個々の学生の教育効果の測定 <ul style="list-style-type: none">✓ プログラムの内容や目的に応じた評価指標を設定し、オンラインプログラムを受講した<u>個々の学生に対して教育効果を測定した【E-6, E-7, E-8】</u>✓ 本プログラムの教育効果の測定の研究については、プログラムを開発した両講師にて<u>論文化が進められている</u>（なお、本論文化は本調査の対象外）【E-6, E-7, E-8】	中長期的な定点の教育効果の測定 <ul style="list-style-type: none">✓ アントレ教育に関する研究が国内で不足している課題を踏まえ、各大学での効果測定の手法の確立が必要であり、<u>本事業で実施した効果測定の結果を用いて研究を促進させるべき</u>だと考えられる✓ さらに、アントレ教育の中長期的な効果を測定するために、<u>データを蓄積していき、定期的に効果を見ていくべき</u>ではないかと考えられる
		オンラインでのプログラム提供の評価 <ul style="list-style-type: none">✓ オンライン形式のプログラムは、<u>受講機会の創出やアントレプレナーシップの醸成</u>の観点においては、受講者にとって有益であったと考えられる【E-10, E-12】	オンラインとオフラインの連携 <ul style="list-style-type: none">✓ オンラインプログラムをベースとし、オンラインではフォローアップしきれない部分や実践の機会の創出については<u>各地域や各大学と連携していく</u>必要がある✓ <u>アントレ教育の醸成段階においてはオンラインの良さを活かし、アントレ教育の実践段階においてはオフラインの実践的なプログラム</u>につなげていくことが望ましいと考えられる
全国プログラムの在り方の評価	各地域・各大学のサポートを受けながら、アントレ教育の醸成段階のプログラムをオンライン形式にて全国規模で実施し、 <u>学生への教育的効果の結果や各座談会での反応等</u> を踏まえて、プログラムの在り方について検討する	オフラインとの融合の必要性 <ul style="list-style-type: none">✓ 本プログラムの受講者のアンケートでは「<u>オンライン・オフラインによる同時開催</u>」の回答が多く、<u>実践の機会や外部との連携</u>に対する要望も多かった【E-11, E-12】	

- ✓ 今年度の検証結果から得られた解釈・考察に基づき、個々の学生への評価や全国プログラムの在り方の評価における今後の方向性を整理した

検証項目	解釈・考察		今後の方向性（提案）
個々の学生 の教育効果 の測定	<p>中長期的な定点の教育効果の測定</p> <ul style="list-style-type: none">✓ アントレ教育に関する研究が国内で不足している課題を踏まえ、各大学での効果測定の手法の確立が必要であり、本事業で実施した効果測定の結果を用いて研究を促進させるべきだと考えられる✓ さらに、アントレ教育の中長期的な効果を測定するために、データを蓄積していき、定期的に効果を見ていくべきではないかと考えられる	個々の学生への 評価	<ul style="list-style-type: none">✓ アントレ教育の研究を促進させるために、アントレ教育の研究結果の論文化や研究用データプラットフォームの整備を行うべきである✓ 中長期的かつ定期的な定点の評価の実施が必要である✓ 各プログラムを開発する上では、ロールモデル等を明確化し、評価指標を検討する必要がある
全国プログラムの 在り方の 評価	<p>オンラインとオフラインの連携</p> <ul style="list-style-type: none">✓ オンラインプログラムをベースとし、オンラインではフォローアップしきれない部分や実践の機会の創出については各地域や各大学と連携していく必要がある✓ アントレ教育の醸成段階においてはオンラインの良さを活かし、アントレ教育の実践段階においてはオフラインの実践的なプログラムにつなげていくことが望ましいと考えられる	全国プログラムの 在り方の 評価と検討	<ul style="list-style-type: none">✓ アントレ教育の教育フェーズを分けた上で、全国プログラムと各大学実施のプログラムの双方の強み・弱みを補い合う役割を明確にし、各地域や各大学と連携を図り、全国プログラムの開発や運営を行う必要がある✓ アントレプレナーシップ醸成の段階では、全国プログラムにて学生の意識醸成を図り、アントレプレナーシップ発揮の段階では、各大学にて実践的な機会を提供するべきではないか

- ✓ コース1では、評価測定指標として3つのスキル挙げ、これらの習得度を通じてコンピテンシーの形成に関する評価を実施した
- ✓ コース2では、網羅的に評価測定指標を設定し、動機付け・意識醸成及びコンピテンシーの形成に関する評価を実施した

プログラムの評価測定指標・評価方法の概要

	コース1	コース2
目的	<ul style="list-style-type: none"> ■ 受講者の習得度評価、プログラムへの満足度評価を実施することにより、プログラムによる<u>コンピテンシーの形成の教育効果を評価する</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 受講者へのアンケート評価を通じて、プログラムによる<u>動機付け・意識醸成及びコンピテンシーの形成の教育効果を評価する</u>
測定アプローチ	<ul style="list-style-type: none"> ■ <u>ルーブリック評価</u>による5段階の自己評価を通じて、評価測定指標である3つのスキルの習得度を測定する ■ 3日間のプログラムにおいて、各日の講義終了後に測定する 	<ul style="list-style-type: none"> ■ <u>プログラム受講者（トリートメント群）と非受講者（コントロール群）への測定</u>をし、プログラムの教育効果の測定する ■ 教育効果の測定は、<u>3回のタイミング</u>（T1,T2,T3）にて実施する ※詳細は【E-8】参照
評価測定指標	<ul style="list-style-type: none"> ■ <u>3つのスキルを評価測定指標</u>として設定 <ul style="list-style-type: none"> ✓ 問題の本質をとらえる力 ✓ アイデアを考え出す力 ✓ 提供すべき価値の定義・実装する力 	<ul style="list-style-type: none"> ■ <u>下記のような評価測定指標</u>を設定 <ul style="list-style-type: none"> ✓ インテンション ✓ コンピテンシー ✓ パッション ✓ エフェクチュエーション など
今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> ■ 離脱者をフォローできるような形成的評価を実施し、受講者へのフォローアップの方法や、受講者の習熟度を向上させるための方法を検討する ■ <u>学会での公表</u>等を行い、アントレ教育に関心を持つ教職員の意識醸成を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 受講者に対して受講修了半年後（T3）にアンケートを実施し、<u>中長期的なプログラムの効果を測定する</u> ■ プログラム効果に関する研究結果を<u>論文化</u>し、アントレ教育分野の先行研究として寄与する

- ✓ コース1では、3つのスキルを評価測定指標とし、5段階のルーブリック評価を実施した
- ✓ プログラムの目的や狙いを記載したコースポリシーを受講者に共有し、学びに対する動機付けを行った

コース1の評価測定指標・評価方法の詳細

コース1

コース2

コース1評価

評価測定指標

- 下記のような**コースポリシーを設定し、プログラムの目的と狙いを受講者に共有**
 - ✓ 問題を解決するシステム思考
 - ✓ アイデアを生み出すデザイン思考
 - ✓ 価値を提供し実装するビジネスプランニングスキル
- コースポリシーに基づき、問題の本質をとらえる力、アイデアを考え出す力、提供すべき価値の定義・実装する力の**評価測定指標である3つのスキルの習熟度評価を実施**

評価測定方法

- 5段階の**ルーブリック評価**を実施
 - ✓ 3日間のプログラムで、Webアンケート式で評価を実施
 - ✓ プログラム受講前後での**学生の行動変容**について評価を実施

指標の詳細

	3つのスキル	測定項目
一 日 目	スキル①： 問題の本質を とらえる力の 醸成	問題認識の仕組みを理解する
		システム思考で問題を捉える
		ワークシートを作成する
二 日 目	スキル②： アイデアを 考え出す力の 醸成	思考の発散・収束を理解する
		アイデアを出す・選ぶ
		ワークシートを作成する
三 日 目	スキル③： 提供すべき 価値の定義・ 実装する力 の醸成	ビジネスプランニングの重要性を理解する
		提供価値を定義し、ビジネスプランを考える
		ワークシートを作成する

- ✓ コース2では、コントロール群とトリートメント群に分け、先行研究から導出される初期仮説等を検証するために、評価測定指標を網羅的に設定し、プログラム開始前、終了直後、終了半年後の3回のタイミングで測定を行う設計となっている

コース2の評価指標・評価方法の詳細

コース1

コース2

コース2評価

評価測定指標	コントロール変数
	Big-5 (パーソナリティ特性)
	インテンション (起業家的な意図・意思)
	コンピテンシー (起業家的な能力・行動特性)
	パッション (起業家的な情熱)
	エフェクチュエーション (起業家的な意思決定)
	行動調整方略
Implementation intention, Goal intention, action (T2,T3のみ測定)	
評価測定方法	■ <u>コントロール群とトリートメント群</u> に分けて、Webアンケートを実施
	■ 教育効果の測定は、 <u>3回のタイミング</u> にて実施
	✓ T1:第一回授業中～第二回授業まで
	✓ T2:授業終了後 (宿題提出後)
✓ T3:授業終了半年後	

指標の詳細

先行研究から導出され、本事業で検証する初期仮説	検証内容
非受講群と比較して、 <u>受講者のコンピテンシーが増加する</u> だろう	大学生・大学院生を対象としたアントレ教育は、 <u>コンピテンシーを伸ばす授業が効果的である</u> といえるか検証する
T1時点で受講者内でインテンションの低位群は、 <u>受講後にインテンションがその他の群と比較して増加する</u> だろう	大学生・大学院生を対象としたアントレ教育は、 <u>インテンションを伸ばす授業としても効果がある</u> といえるか検証する
<u>女性は男性よりインテンションの増加幅が大きい</u> だろう	男性に比べて、 <u>女性はインテンションの介入の効果が出やすい</u> か検証する
<u>学部1,2年生は他の学年の学生よりも受講によるインテンションとコンピテンシーの増加効果が大きい</u> だろう	<u>年齢が若いほどインテンションの介入の効果が出やすい</u> か検証する

(E) プログラムの評価 プログラムの在り方の評価【E-9】

- ✓ 全国規模で大人数が参加できるオンラインの全国プログラムを実施する上で、プログラムの良い点、悪い点に関する初期仮説を設け、それぞれの仮説を検証するための取り組みを実施した

全国プログラムの良い点・悪い点

プログラム評価における初期仮説		実施した内容	検証結果
全国プログラムの良い点	受講機会の創出	<ul style="list-style-type: none"> ■ オンライン形式のプログラムにおいては、<u>地理的・空間的な制約を受けず</u>、全国の大学生・大学院生に受講機会を提供できるのではないかと 	【E-10】 【E-12】 参照
	アントレプレナーシップの醸成	<ul style="list-style-type: none"> ■ 全国プログラムを通じて、<u>多くの学生にアントレプレナーシップの醸成させることができる</u>のではないかと 	
全国プログラムの悪い点	実践機会の創出	<ul style="list-style-type: none"> ■ オンラインにおいて現場での参加やフィールドワークが難しいため、<u>実践的な学習が難しい</u>のではないかと 	【E-11】 【E-12】 参照
	外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ■ <u>学生の関心を醸成させ、マインドセットを形成させる</u>ためには、外部との連携が必要ではないかと 	

- ✓ 受講者は全国プログラムを通じて、普段交流ができない他大学の学生との交流や自大学では受けることができないアントレ教育を受講できたことに対して感動体験を得たという回答が多い

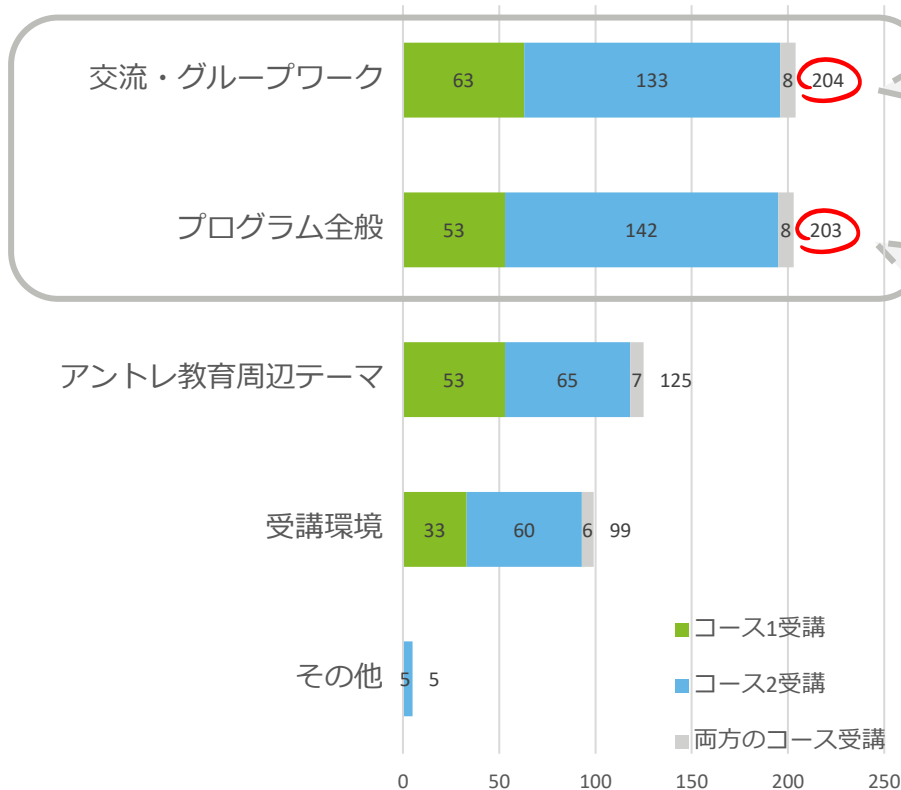
全国プログラムの良い点に関する学生向けアンケートからの結果

受講終了後学生向けアンケート (N=242)

「本プログラムを通じて、感動するような体験はありましたか」

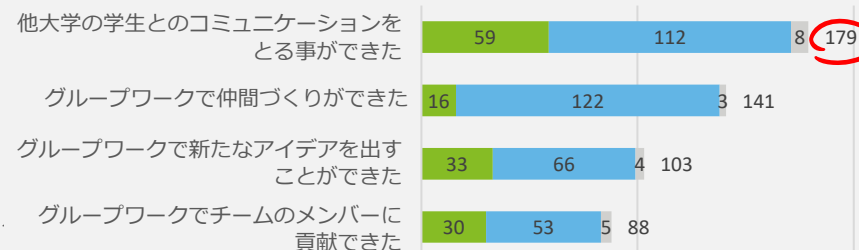
※複数回答可であるため重複有

※各分類で人数カウントをしている



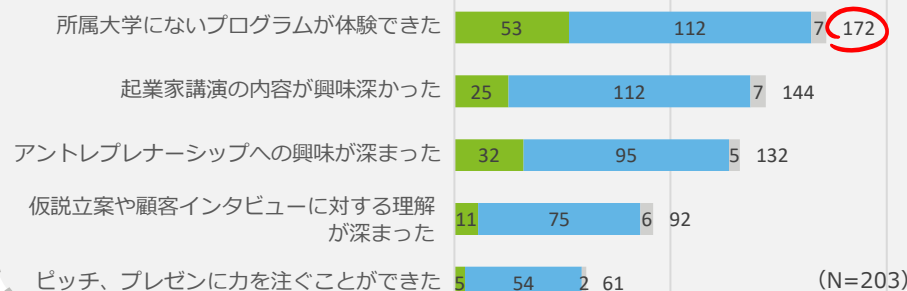
「交流・グループワーク」の内訳

※複数回答可であるため重複有



「プログラム全般」の内訳

※複数回答可であるため重複有



【参考】オンラインプログラムの良い点※

- **物理的・時間的制約を受けず、教育の機会を提供することが特徴的である**
- **教室内外の枠を越えて、学生同士はオンラインを通じて交流できる**

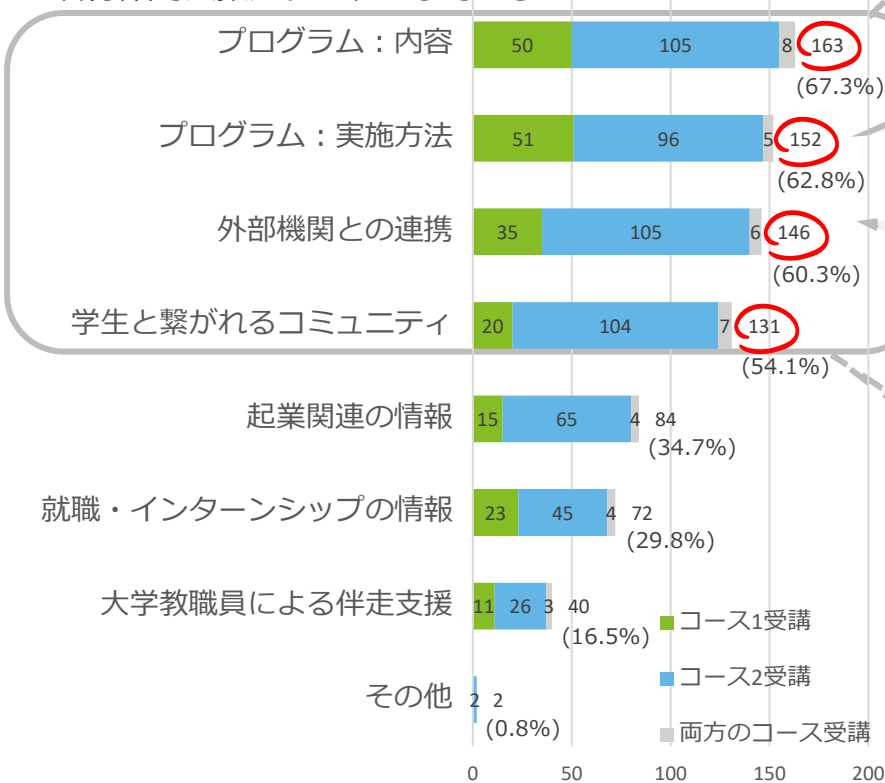
※ 「遠隔授業のインパクトとニューノーマルの高等教育」中央教育審議会大学分科会質保証システム部会(第9回)よりトーマツ整理

(E) プログラムの評価 オフラインとの融合の必要性【E-11】

- ✓ 本プログラムを受講した学生からは課題解決、アイデア創出など手法に関する学習コンテンツやオンライン・オフラインによる同時開催プログラムや起業家との繋がり創出等の要望が挙がった

全国プログラムの悪い点に関する学生向けアンケートからの結果

受講終了後学生向けアンケート (N=242)
 「アントレプレナーシップの教育を受ける上で、
 どのような内容・形式が望ましいと思いますか」
 ※複数回答可であるため重複有
 ※各分類で人数カウントをしている



「プログラム：内容」の内訳
 ※複数回答可であるため重複有

課題解決、アイデア創出など手法に関する学習コンテンツ	50	77	8	135
ピッチ大会の実施	3	50	3	56

(N=163)

「プログラム：実施方法」の内訳
 ※複数回答可であるため重複有

オンライン・オフラインによる同時開催プログラム	46	80	4	130
SNSなど、新しいツールをたくさん使用したプログラム	15	35	2	52

(N=152)

「外部機関との連携」の内訳
 ※複数回答可であるため重複有

起業家との繋がり創出	17	86	6	109
自治体・行政の政策・補助/支援制度等の情報	20	29	8	57
専門家への相談・依頼のできる窓口の設置	13	36	2	51
vcや金融機関等とのつながりの場の提供	7	37	2	46
外部専門家によるメンタリングの提供	6	34	2	42

(N=146)

「学生と繋がれるコミュニティ」の内訳
 ※複数回答可であるため重複有

起業仲間づくり、学生コミュニティの支援	16	78	6	100
OB/OGと繋がれるコミュニティ	13	66	6	85

(N=131)

【参考】オンラインプログラムの悪い点※

- 在宅での受講のため、実際の現場での参加やフィールドワーク等の**実践的な活動が実施しにくい**
- 遠隔であるため、教員は**受講者の活動が把握しづらい**

※ 「遠隔授業のインパクトとニューノーマルの高等教育」中央教育審議会大学分科会質保証システム部会(第9回)よりトーマツ整理

(E) プログラムの評価 プログラムの在り方の評価【E-12】

✓ 全国プログラムの良い点、悪い点について、受講後アンケート、学生・教職員座談会における意見を整理した

全国プログラムの良い点・悪い点に対するフィードバック

		アンケート	学生座談会	教職員座談会
全国プログラムの良い点	受講機会の創出	<ul style="list-style-type: none"> ■ 所属大学にない新しい体験ができた ■ 他大学の学生と交流できた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 時間や場所等の制約がなく、気兼ねなく学習ができた ■ グループワークを通じて、主体的な学びができた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 全国オンラインプログラムのため、リソースが不足している大学の学生にも受講の機会を提供することができた
	アントレプレナーシップの醸成	<ul style="list-style-type: none"> ■ アントレ教育に関する興味加深まった ■ グループワークを通じて新しいアイデアを創出した 	<ul style="list-style-type: none"> ■ プログラムで得た学びを日常生活や大学研究に活かせる ■ アントレ教育に関する理解を深めた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 本プログラムは学生にとってアントレプレナーシップの動機付けにつながり、達成感や気づき与えることができたと考えられる
全国プログラムの悪い点	実践機会の創出	<ul style="list-style-type: none"> ■ オンライン・オフラインによる同時開催が望ましい 	<ul style="list-style-type: none"> ■ プログラムで知り合った学生との継続的な交流の場があると嬉しい ■ ビジネスコンテスト等の機会があると嬉しい 	<ul style="list-style-type: none"> ■ オンラインのみでは実践的な学習が難しいため、ハイブリッド型授業が必要である ■ 学生の発表時間、フィードバックの時間を十分に確保することが望ましい
	外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ■ 今回のプログラムでは専門家などの外部機関との連携が足りなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 座学のみならず、フィールドワーク等の内容が望ましい 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 全国プログラムでは地域や企業と連携した取組が望ましい